

日本經濟叢書

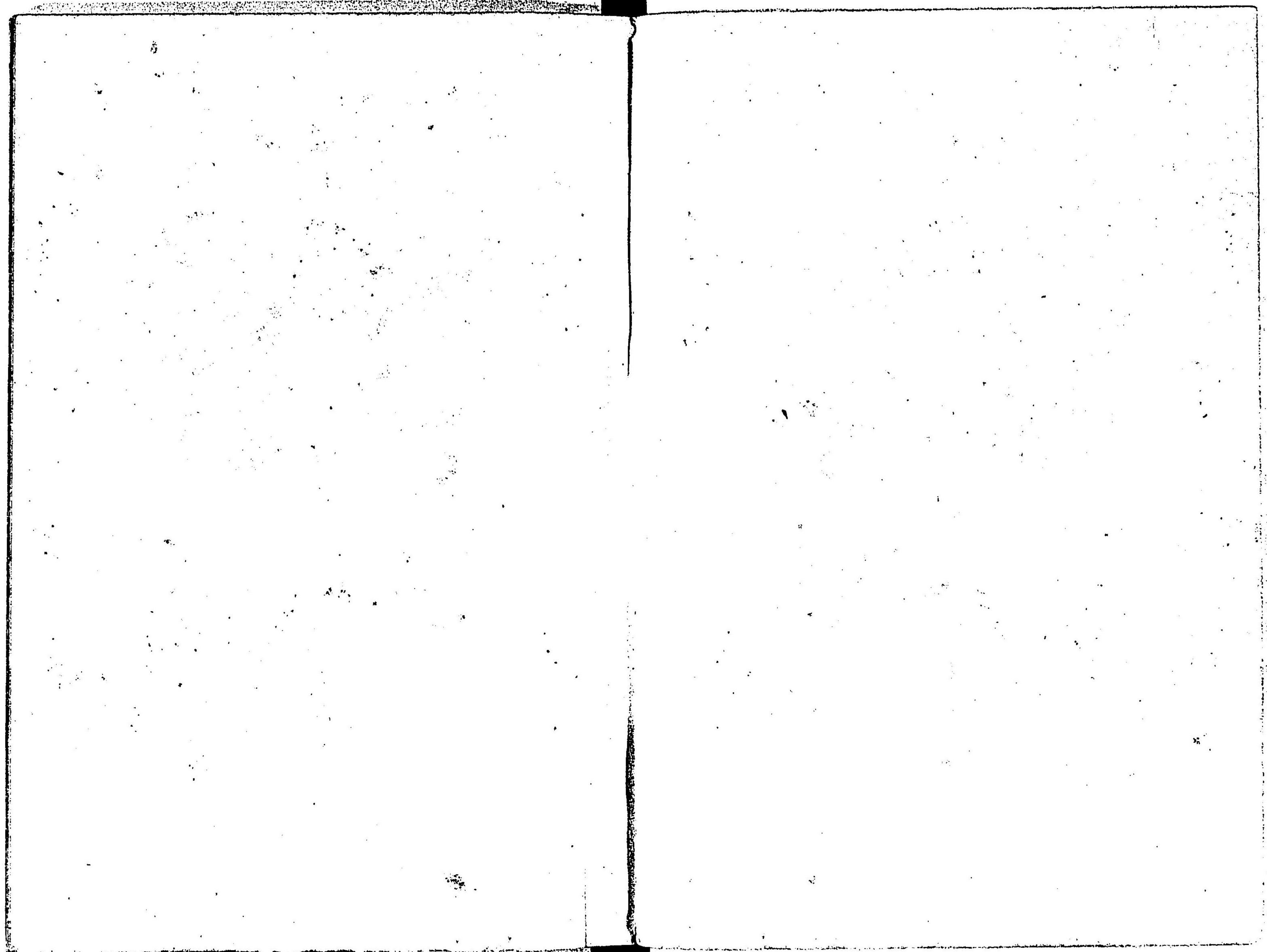
目次

本

年

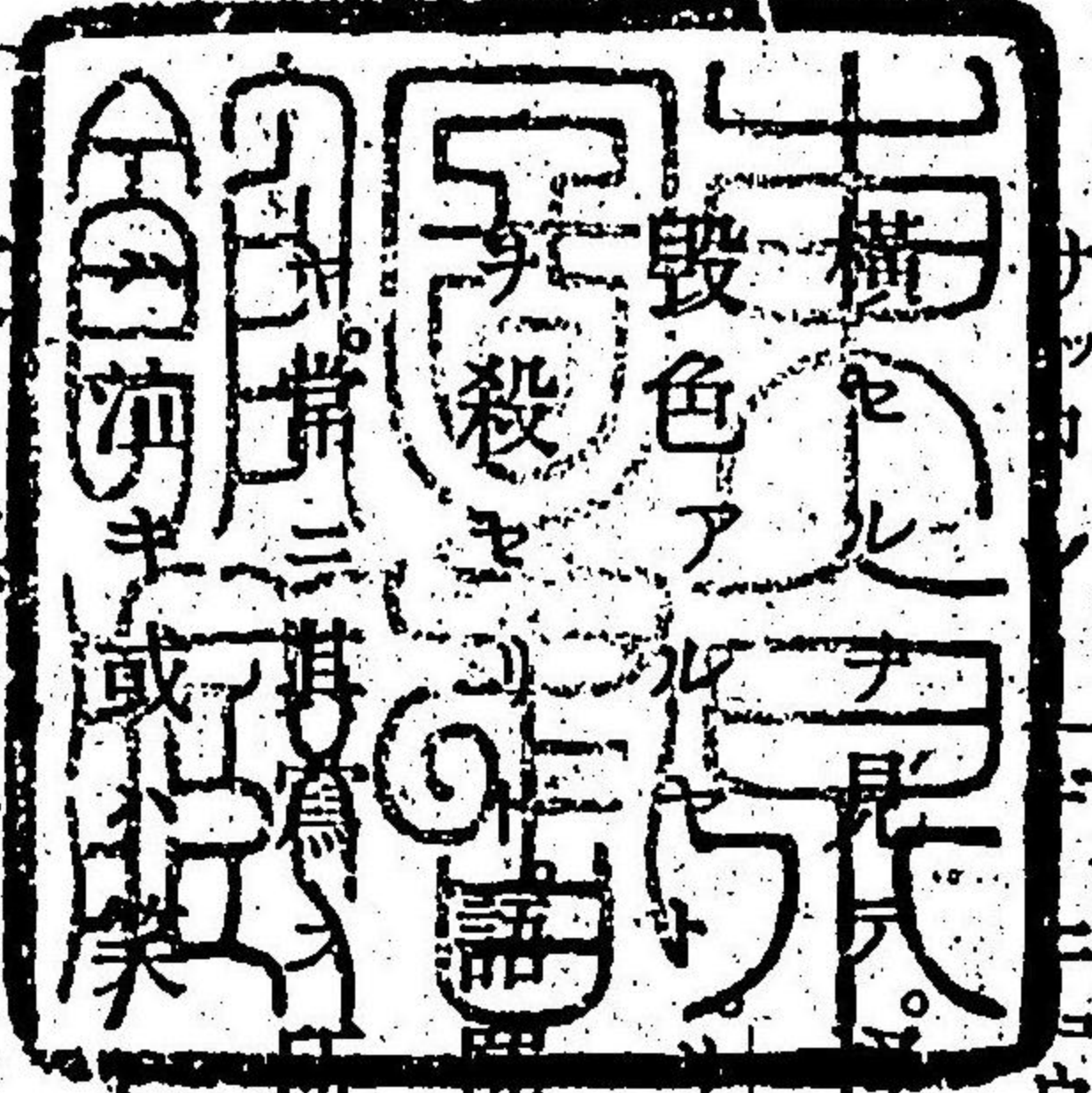
文

日本經濟叢書



特28
724 W016580/22

序



ナ草ス。客アリ室ニ入り。其ノ涕淚縦
 横セルヲ見ル。任ニ問テ曰ク。子至親ヲ喪ヘル乎何ソ其ノ
 毀色アルヤ。答テ曰ク。余方サニ佐
 殺セリ。復テ曰ク。余方サニ佐
 常ニ其ノ爲メ。所ノ人物ヲ以テ我トナシ。筆ヲ揮フノ際。或
 自ヲ禁セサルモノアリト云フ。是レ皆ナ
 文ノ興ナルモノナリ。蓋シ文ノ意ハ讀ム者精粗ヲ以テ之
 ナ品ス。文ノ辭ハ讀ム者美醜ヲ以テ之ヲ品ス。唯々興乎。讀
 ム者之ヲ品スル能ハス。其ノ鼓舞顛倒スル所トナリテ。而
 カモ自ヲ知ル莫キナリ。韓子カ爲ス所。氣盛ナレハ言ノ短



長聲ノ高下皆宜シキモノハ亦々興ノ謂ノミ。是ヲ以テ文ニ善キ者ハ其興ヲ養フヲ務ム。其興ヲ養フ他無シ。文ニ信ナルノミ。苟モ文ニ信ナレハ。充如躍如。我吾文ニ動カサル。吾文能ク我ヲ動カシテ。而テ後チ始テ得テ人ヲ動カスナ言フベキナリ。故ニ作者笑テ而テ後チ讀ム者笑ヒ。作者泣テ而テ後チ讀ム者泣ク。世人皆サツカレ。ドイツケンス。ノ小説ノ讀者ヲ泣笑セシムルヲ稱シテ。サツカレ。ドイツケンス。ノ先ツ自ラ泣笑セルヲ道フモノ鮮シ。近ユロ浮虛胡亂ノ文横行シテヨリ。作ル者多ク漫然。讀ム者亦々漫然。漫然ト漫然ト遇フ。滔々トシテ底止スル所ヲ知ラサルナリ。宮崎君ノ是著蓋シ此ニ慨アリ。人若シコレニ由リテモテ文ニ

充如躍如ノ處アルヲ悟リ。更ニ進テ其此ニ到ル所以ノ故ヲ求メナハ。則チ作者不信ノ弊或ハ少シク息ムベキ歟。昔シオーコンチル。グラシゲ岡ノ大會ヨリ歸ルトキ。偕ニ送ル者車ニ盈ツ。謝シテ語ラズ。獨リ懷ヲ探リテ新刊「ヂ、オールド、キョウリ、オシテイ、シヨツ」下編ヲ出タシテ之ヲ讀ム。漸ヤク讀テ酣ハナルニ至リ。頭低レテ書ニ帖ス。既ニノ。俄ニ之ヲ地ニ投ケ絶叫シテ曰ク。余ハ復々「ドイツケンス」ノ文ヲ讀マシ。人ヲシテ情ヲ爲シ難カラシムト。夫レ政治世界ノ豪傑オーコンチルノ若キヲ以テシテ。其ノ兒女ノ泣笑ニ於ケル。當サニ顧ルニ邊アラサル所ニ在ルヘシ。而シテ此ノ如キハ何ソヤ。嗚呼。今日我邦ノ政治世界ハ將ニ多事

ナラムトスルノ運ニ向ヘリ。此ノ政治世界多事ノ士ナシ
テ。尙ホ其ノ寸陰ヲ競テモテ吾文ヲ讀マムト欲スルニ至
ラシムル者。能クコレ有リヤ。吾文ヲ讀テ終ニ之ヲ地ニ投
ケ絶叫スルニ至ラシムル者。能クコレ有リヤ。余竊カニ文
學世界ノ爲メニ之ヲ愧ツ

帝國憲法發布ノ後一月

思軒居士撰

緒言

支那には講文の法有り。西洋にも華文の術有り。獨り日本の文章にも。
僅に詞の法のみありて。妙處と指示をべた法なし。法なれに非ず。法を
無法の中にあまど。明かよ名目を附して。文の眉目を鮮明にまべきもの
なきなり。往時葛西因是が源氏物語の雨夜の志なさだめの巻。及び國姓
爺合戦此淨瑠璃と評し。又森田攝齋此淨瑠璃本と評したるが如きは。日
本文の妙處と抉出したるに庶幾し。近頃先輩依田學海翁亦國華發韻、新
評戯曲等の著ありし。皆力を此に用ゐられたるも此なり。予も亦竊よ文
を好み。讀むに隨ひて評隲したるもの數篇あり。今又數篇を増加へて一
冊となす。日本華文と云ふ名を冠らせて世に問ふ事となりぬ。されど元
々自家の樂みの爲よせしものなれば。中に穿よ過ぎたるもあらん。疎

齒なるも多からん。作者をして知る所あらざれば。随分迷惑に思ふ事もあるべけれど。又時として口を開いて莞爾たる處もなきよは知らざるべし。但し議論体の文は達意と主とまるものにて。素と奇巧を争ふ目的の者に非ざれば。一切採らず。

本篇採る所の外極めて妙文多し。本篇採らざる所の書亦極めて妙文多し。されば此書は日本華文と名づけたれど。日本の華文を網羅したりとの意に非ず。日本の華文を網羅せんことは。到底爲し得べきことに非ず。又一通り種類を集めて。日本華文の雛形を示さんことを。強がちなすきにもあらざるべけれど。是とて予が如き凡庸の輩が軽々しくなすべき業にあらざれば。初より思ひもせざりしなり。唯此書中に収めたる文を。日本の華文なりと稱して愧づることなき文のみを集めたれば。日本

華文と名づけたりと知るべし

予を明に自ら懺む。本篇掲ぐる所の一半を舊稿にして。一半は新作なることを。文の評は意の適したる時の評と貴ぶ。課を立て程と趁ひ。矧々として讀み。切々として評する者は。縱令經營慘澹賢胃と摘擢する。雖。竟に興到り神悦ひ。勃然興裡に漫然の評を下したるに及ぶこと能はざるなり。篇中所載孰れか新にして孰れか舊。有眼の讀者は必ず之を識らん。予を本篇の悉く舊稿ならざるを感むなり。

日本文の評に漢文を用うるを不倫に似たり。されど日本元と文を評するの法なし。支那此講文此法を借りて評をなす此み。縱令書下志よ志たりとて。其實は依然と志て漢文なり。故よ舊稿此文を一切書變へず。新し評臨せよ先例も從ひ漢文を用ゐるなり。

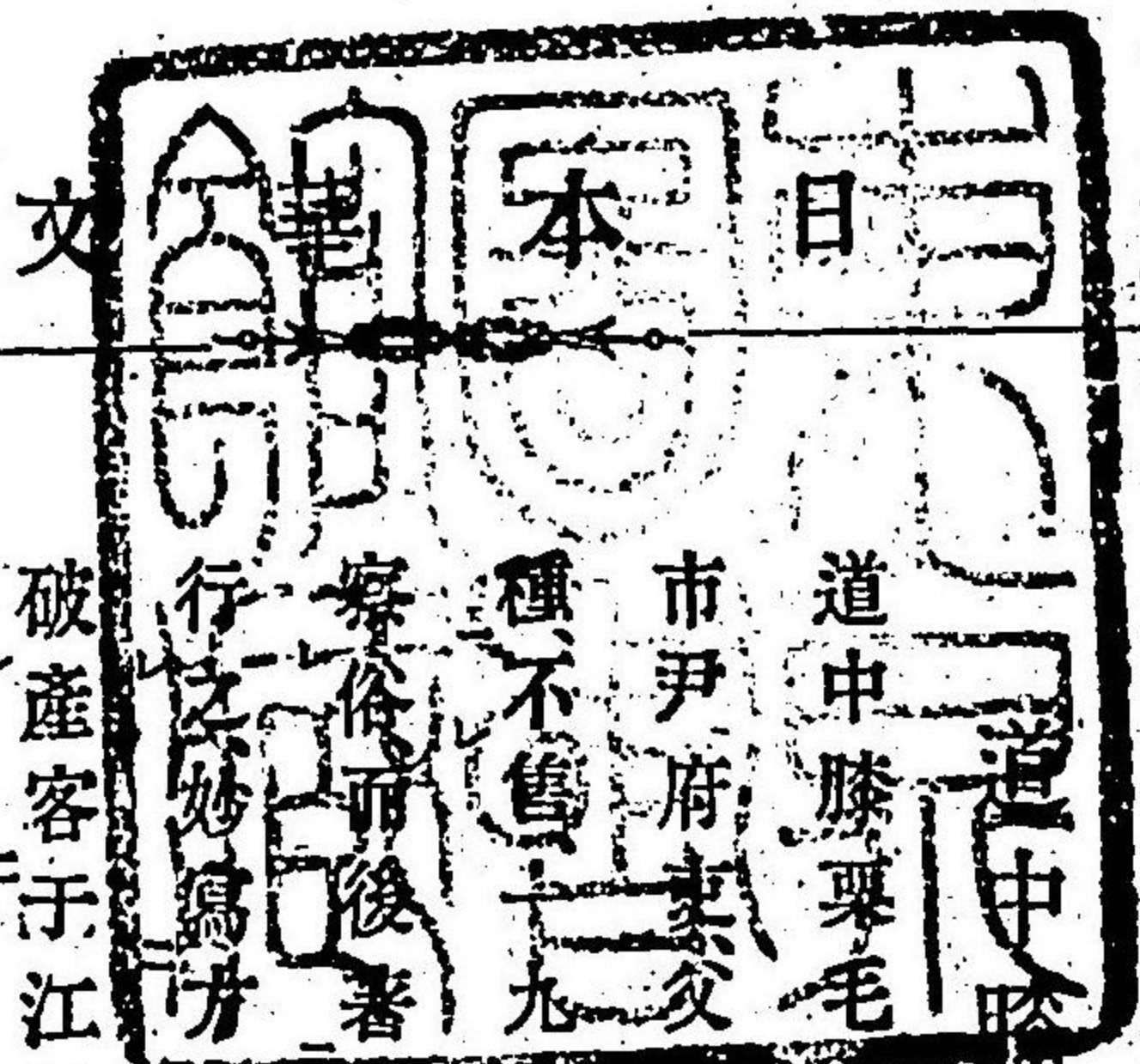
學海翁の著何りしより。漢文を以て日本文の評語を爲るもの。翕然と志
て競ひ起れり。されど評よは肯綮よ中ると云ふ一の大切なる事あり。徒
らに陳腐此熟語を駢べて。長々と文字を列ねたりとて。評の能事畢ま
るとは云ふ可らず。唯識者の眼孔能く玉石を甄別せんことと冀ふのみ。但
し是は予が書に關して云ふに非ず。一衆に就きて思ひ附きたる所を記
せるのみ。

明治二十二年四月四日

三昧道人志るす

日本華文

三昧道人著



道中膝栗毛 栗毛彌次郎兵衛北八鬻錢囊條

道中膝栗毛 十遍舎一九著之一九重田氏名貞一、駿河府中人、父爲
市尹府吏父歿職然性磊落不羈不屑吏務辭職遊江戶著稗史數
種不售十九愧之欲著一奇書以聳動一世之耳目去周遊四方觀風
察俗而後著道中膝栗毛實享和二年也鐫成遠近爭傳其体以滑稽
行之妙寫方言土俗入微極細書中所載彌次郎兵衛者駿府之產而
破産客于江戶後周遊四方滑稽多才蓋一九小照也所記談諧亦往
々出於實歷云依田學海翁作一九傳其中有云一九著書坐一室書
籍雜陳筆硯並列杯盤枕衾縱橫狼籍不餘寸隙禁家人不得闖入嘗
夏曉早起殘月如晝步到日本橋下遊興遽動單身上程遊京師浪華

道中膝栗毛彌次郎兵衛北八鬻錢囊條

日本文華

三月餘而還、室中枕衾紗幘、設置如故、蓋家人亦化之云々、一九平生之梗概、竭于此焉、其行事多侮弄人世者、今不一々錄、以天保二年辛卯八月歿、年五十七、

三

膝栗毛之妙、在不失自然、故其淡於脚色、則所以其妙於脚色也、雖然淡也平也、作者最所難、巧手如一丸、亦時不免作深邃之脚色、唯本節與次節、則極淡極平、如毫不費細心、而奇趣橫生、爲膝栗毛中第一等文字、且絕無鄙猥媒孽之語、而妙摸寫人情、最爲不可及、如斯文字、是天稟富奇想之士、則能之、非刻苦雕琢所能企及、
前節叙彌次喜多旅舍遇狗盜失行李錢財、故以餅飢療飢、稍勵鼓勇等起、全節寫蕭條光景、間交滑稽、曲盡人情、
此處にて餅なごとのへ、少しのはらの虫をやしあいたがひに力をつけ合、とあしものして漸々沼津の驛につく、こゝにてまづ足を

日本文華

やすめんと宿はづれの茶やへはいる △茶や女「お早よう御座い升チヤ、おしたくでもしあさいませぬか △北八「イヤあどのたて場で、うんどいおほと喰て来やした」下徳江戶兒在焉此内兩掛を人足にかつがせ、供をつれたる侍、お國ふう大たぶさ、木綿を片面に染めたるぶツさきばをりを着たるが 封建時代士人模様この茶やへは入る △茶や女「おちや上りませ △侍「もう何時だの △茶や女「ハイハッでもござりやしよ △侍「よい酒が有ればちくとだしなさろ △茶や女「ハイ、く三十二文のを上げませうかやア △侍「今すこし下直なの、かんばじや △茶や女「廿四文のもござい升 △侍「しからはその二十四文の酒と三十二文の酒と等分に割て一合五勺ばかりだしなさろ 太平壯士有、勤儉美德「ハイ、く」と勝手よりちろりさかづきを持きたり魚の煮付などをいだし △侍「コリヤ、くこのにつけよッたさかあどものあたひ、なんばじや

道中膝栗毛彌次郎兵衛北八隠岐齋條

三

文 華 本 日

△女 卅二文でござい升△侍 こちらは△茶や女 十二文△侍 ム、よいく、
 コリヤ傳助とごりよも一ツのみやれ △供傳介 子イ△侍 コリヤ向ふに火
 をたきよるおち子をもり奥田氏の内室によく似よつた △供 「いか
 さま、こちらの今とらひよるおち子もよいようて御ざいます
 △侍 「どれか、ウ、アノはしらのねきによふたわつてをるおち子
 のよいく、莫道心腸百鍊堅 品紅評翠太風流 サア傳介今すこしあるのんでしまへ
 △供 子イく△侍 勘定のいたそ何不じや、コリヤく此さかなど
 もは手はつけないぞ徳之至△女 ハイく四十二文でございますチヤ
 △侍 「チ、よいく」と供の者にはらひせ、こゝを出かける北八彌次
 郎の茶ばかりのんで立あがり 可綱設此△北八「サア行ふ△彌次」アイお
 世話 △女 「どなたもようおいて下夫よりあゝを立出、二人はかのさ
 むらひと跡になり先になりて、いろくはあし連てたどり行くに、

四

文 華 本 日

あらの坂といふ處に至り千本の松原にて北八がこじつける歌に
 この景色見ての休まにやならの坂いざたばこにや千
 本の松
 侍この歌をきみて感心し藝之不可△侍 ヒヤアてけたく、おみた
 ちは江戸ものだな △彌次 さようでございます、わたくしどもは夜前の
 泊りでござのはいに取つかれて、大きにあんぎをいたします △侍
 「ハアそれの近ごろ氣の毒じや、成ほごまけ灰のさしたのはいた
 りろう好△北八 イヤござの灰と申すはどるぼうの事でございます
 △侍 どるぼうとは何トや愈出△北八「ハイ泥捧と申は盗ぞくのことと
 ございます △侍 「ハ、ハ、何う人のものをとりよる盗ぞくのこと
 を泥ばぎと云ふか △彌次 「左様でございます △侍 ソノ又泥捧をござ
 の灰と云ふトやな、なるほと解せたく △北八 「時にだんちへちとお

道中膝栗毛彌次郎兵衛北八雲隠裏條

五

日 本 華 文

ねがひがござります、私をも右のどろばうに合ひまして、さつぱり
 路用のとられてしまいましたから、大きにきんぎをいたします、府
 中まで参れ、バいう様とも致しませんが、夫までの處にござります、そ
 ろみて材は身の差合せとやら、どうぞ是を賣りとう御ざります、お
 かいささつて下さりませぬか、と腰にさげたるいんでんの巾着を
 出しみせる、△侍「ホウ夫は氣のどく、途中で物をもとむるは如何し
 いか、小心慎密、亦是太おみたちの難義とあらば求めてつかひそう、
 あたいは何ぼぢや、△北八「ハイ三百ぐらいにさしあげませう、△侍「そ
 れは高直ぢや、△北八「すこしのおまけ申ませう、△侍「然らばその巾着
 やく共のおたひな、カウト六十文のつかひそう、△北八「それのおんや
 り、△侍「六十一文のつかひは、そか好△北八「もちとねかいさすつて下さ
 りませ、△侍「しからば六十二文のつかひそか好△北八「イエとらうも、△侍

日 本 華 文

「左あらは清水ナウ、ぶたいでもからとんだとおもふて、六十三文の
 つかは、そか世無輪、錢樹一、文錢固不可輕△北八「イヤもう、そんなに一文づゝおかひ
 なさつては、ご相談がてきませぬ、こういたしませう、丁度におかひ
 なさつて下さりませ、一語作一奇、一機子△侍「ヤア、丁度どの何ぼトや、△北八「ハ
 イ、丁度と申は百につば、やりましたことを、丁度と申すから、百文
 ならさしおなませう、△侍「ム、百のことを、丁度といふか、しからは
 丁度にもとめて遣はそう、△北八「夫はありがとう御ざります、下巾着を
 見たし、百文とり、△北八「モシ、是はおや、すいもので御ざります、捨賣に
 しても根付ぐるみでは、四五百が物は、ござります、△侍「イヤ、身共せ
 ぐれ共、が兩人まかりあるが、是、物領へのよいみやげじやて、△北八
 「ハイ、おあなたは、ほだお若うお見へなさい、はすに、お子達が、お二人と
 はよい、おたのしみで御ざります、ぶしつけあがら、モウおいくつて

御さいます △侍「あてゝお見やれ 模亦一 △北八「ハイあなたはコウト三
 十七八にもおありおされませうか △侍「みども當年巳のどしにて四
 十二才にまかりなる △北八「夫はお若うございます △侍「コレハ御あ
 いさつしかし身共相役の園原作左衛門米木津甚太夫などみな同
 年でまかりあるが其内でみどもがいつち若へくといふおるて
 果然 △北八「さやうございませ △侍「夫に又家中うちの若へおなご
 共なぞが身どもがことを澤村宗十郎に似て居るなぞと申す 未可
△北八「ハ、アあるほど △侍「時におてまへはいくつとや 話漸 △北八「だ
 んちおあてなさつてごろうじませ △侍「ムウお手前年なコウト廿
 七八にもなりあるか △北八「エ、丁度で御ざります △侍「ナニ丁度、ア
 ノ百か 奇趣 △北八「イヤこれ御ざります 下指 三本をいだす 妙 △
侍「ハ、ア三百にハ若へおとこだ 呆那痴耶將神仙奇想自 △皆々「アハ
天外來之語宜評此等文

ハ、此のはなしよまぎれて、おもむ共なしに小諏訪大諏訪をうち
 すぎ程なく原の宿につくことにて連の侍もわかれて

まだめしも喰ず沼津を打すぎてひも下の原の宿につ

きたり 一部 駭栗毛
中 第一 名 吟

全箱根山中潑皮相話條

斯て山中と云へるたて場にいたる彌次郎北八也こ、は両側に茶
 屋軒を並べてお休みなさいませ下り諸白もお座りやアす、餅よ
 ナおがりやアし、一せんめしよチおがりやアし、お休みなさいやア
 し △彌次「北八ちつと休んでいこう下茶屋へ這入る、此内の庭に
 つき立てたるへつづの前に雲助も蒲團をからだにまきたる
 もあり、澁かみをきたるもあり、或はねごさ赤合羽などをきて、より

文 華 本 日

こぞり火にあたり居ると、如表のかたより竹のきせるをくわへて
 入入和一人の雲助ズットはいり△おへねへひもうたくれどもた頭
倒先勝讀者之勝 赤熊やとぶ八めが峠まで長持てやツたアな △ひとりの雲助
 たいん、そんだるあい手が、あんどんにげんこのふんだくるべい是宛
檀淵之此長持といふ六六の事、あひてと云の酒手の事なり△
調和今一人の雲助「コレそりやアたいが、ユノ野郎がおしやらくを見るへ是果
任酒落しツかり紋付を着やがった果是任△酒をもきて居る雲助 昨日小田原
 の甲州屋でやらやつと一枚もらつてきたが、定是好あんまり裾が
 長くてお醫者様のようなだとけつかる結△丸はだかの雲助 野郎めらくめん
 がたいから好きなものを着やがる、おらアこのぢう内からはだか
 てゐたりや、がら吉ばいアが好名ぬかすにやア、古傘をやるうから
 ひッべがしてきるとけつかる、べらぶらうめ一語聞倒得 野郎の猪じ
如不容口妙

文 華 本 日

やアあんめへしそんな物が着られるもんかと云たりや亦自有修飾之意
 すんだら、こりよナ着ると言てたいみしろを一枚うつくれたと思
 へ破傘則拜之其のみしろを、きんによう晚げに畑で湯につッペ
 るとつて、ひんぬいておゐたら聞きやれ、だいの着物をがら、お
 まにくいれてしまつたア奇想非いまいましム彌次郎北八此手や
 ひの咄を聞き居て大きに興に入り、やがてころをたち出て行

花曆八笑人飛鳥山賞花節

十二

花曆八笑人瀧亭鯉丈著之、鯉丈江戶人、以醫管櫛之類爲業、好著詠
諷之書、花曆八笑人、大山道中栗毛駿馬、滑稽和合人、牛島土產、伊勢
道中三方廣人等皆其作也。
本篇主滑稽、與十遍舍一九道中膝栗毛異調而同工、蓋膝栗毛以平
坦制勝、故讀之者、儉夫野人皆能解其妙、本篇以奇崛爲妙、故非風流
洒落者則不能容易領其真趣、膝栗毛一讀而叫妙、再讀而索、本篇一
讀而不解、再讀三讀而后始大呼妙來、膝栗毛膚淺、妙在其中、本篇幽
玄妙亦在其中、要彼爲洛下羊酪、此爲吳中尊羹、彼人々味其美、此非
老味者、不能吸其中精液。
邦人滑稽小說、大率意匠淺薄、止不過博讀者一粲、本篇則不然、意匠
富贍、結構偉大、無數樓閣、無數山水、一步奇一步、一着妙一着、竟送許

多遊人、達於彼天堂、乃尋常作者見以做奇構妙想者、在本書則不過
爲前挺、爲楔子、爲青面金剛、其黃金佛則在一重又一重、金龜扉深、綴
帳陰暗處、今見本節、初從同臭相騙、拈出一箇擔字、又幹出日暮里諺
話、而這條話亦不過借焉爲八笑作戲之楔子、這般結構、這般布置、決
不在曲亭馬琴之下、中間又屢插閒人閒語、閒語亦生趣的、屢發屢解
人頤、而任手煙散霧去、不毫顧惜之、可謂錦繡心腸、咳唾珠玉矣。
八笑一臭味、而亦自八樣人、一人有一人性格、個々皆殊色彩、左次郎
是將帥之材、不屑々事小巧、自有寬厚大度之風、安波太郎則心性較
鈍、然規模濶大、雖屢次喫儕輩之調諷、固是翹々一方之雄、卒八提而
猾、眼七猾而頑、圖部六則以平爲奇、出目助則以蠢爲巧、而野呂松之
優柔、吞七之老實、長短相救、蠢猾相待、生出絕世的奇々妙々話來、八
個傀儡更相爲淨丑旦、面々扮彩、雖隨時異樣、竟不失其本來面目、

文華本日

誰其爲之瀟亭鯉丈子嗟乎非夷所思也

福壽草の咲初しより四季のはな盛りたがへぬ時津風静けき御代の春なれや、遅日をおくる日暮里もけふに飛鳥の人の山、茶瓶の行列三重も、一舛徳利のてんつくも、弾けや謠への芝だ、み、浮世のちりの玉箒はらふ片手は折詰の勝負あらずお拳相撲、まくの内外の合せ物、疎き親しき隔てなく、ちよつとねあひの、エ、はいかりあがら櫻かな、太平氣紙梢にむすぶ短尺もおもひくの花見月、起手數依流暢適朗誦是稗官者流帶套所謂こ、に下谷のかたほとり、何屋の某がそうりように甚六ならで左次郎とて、依様胡塵者在木篇未足詫其奇本文生れついで酒の香太郎人、年中續く夕べ氣に受くる家業もうるさしと、弟右の助に相續させ、酒盃用左手持之故邦俗呼酒人為おのれの隠居の身とありて、心のま、に不忍の池のほとりにかりすまゐる、同氣求むる飲會處、八笑人

文華本日

おもての方より、おがれたる聲にて、ちと御めん下さりまし、おなたに安波太郎様は御出ささりませんか、一客使讀者不此家に居つきの居候眼七、ハい今も内から呼に來ましたが、以爾之矛まだこちうへは見たません、讀者未知其爲誰安波太郎表をおけてすつと入り、突如閃山△こ、内からだれがきた、讀者亦疑△左次、ハい、べらぼうめ、誰も來やあしねへ、返打を喰つたな、眼七詭計借左次眼七傍より口を出し、△汝等如き不才を以て孔明を計らんとん、これ能くきかつし、誰天へ向つてつはをはけは却て我身へかゝる道理だ、一叱可聽矣而△「いや御大層なことを申上るのかれが、おんまり聲を拵へすぎたから悪かつた、承濁といふ内また表の方より卒八といふ友達、又一客明々點出其名與此家を覗きながら、△「い、安波公居るか、明々知其在故意ちよつと來て見さつし、美しくし、

花曆八笑人飛鳥山賞花節

日 本 華 文

く。其讀者亦疑之。△アバ女かくうろたへて馳出す拍子にくつぬぎの下駄を踏返し足をいたため一頃成奇這等入這顔をしかめながら障子をおけてとれく亦喫卒八ズツとはいり直身徑行之△卒跡を引よせてくだッし△アバ女はどこへ来た尙不曉△卒「あけて這入るが面倒だから、足下にちよつと木戸ばんをたのんだのよ、最うい、からおもてをしめて此方へ來さつし躬自說其跪△アバ此のべらばぎと座しきへ追來りくらはせる△卒「コレよせく、あんまりこすりつくあだにがたりらア△アバなほく不届かことを言上するま△卒「なんの其顔て女さんまいをするからのことッたア△左「それ見さッし人を呪は、穴二つといふり、最初おれをかつがふとして眼公にかつがれて欺人者初擡舉而後嘲笑之卒八先生にたてつけられるも智惠のねへ理くつだ、アハハハハハハ、△眼「なに安波公さんぞが呪ふ

日 本 華 文

には穴一つで澤山だ就祖字ひとりて落ちるばかりだ△アバ「いめエましい、足をひどくぶつた、あ、いてへく一△卒イヤかつぐといへば昨日日暮里へ往きやした從據字生ところか聞ねへ可聽△アバなぞかつぐといへば日暮里へもくのたろう聞話△卒「なんの又のたり出るよ、燕雀さんぞ大鵬の心をしらん此一回何等のことを言出づるや次のだんに説分るをまつて知りねかした馬語故意做曲事△アバ「こやつ何事をいふかど首をかたむけ手をこまぬきやをら左右の耳をすまして彼以馬琴來我聞いた處が河童の屁だらう△卒「エ、片言をあらべたてるは、そして利いたふうにしやべるが、河童の屁といふはどういふ譯か知りぬしめエ、あんまり文盲で不便だから、友だちのあさけにおしへてつかぬそう、先づ河童といふやつ、川にすむものだが、水の中で屁をひッたらぶくく」と

おどのするはずだせ、ソレ柳樽にすかしても音のするのは河童の
 へといふ句があるの、それをまたたわいのない譬へにいふは譯が
 わかるめ、是れすなわち云ひあやまつて居るからのことだ、子曰
 こッばの火と論語にもあるは、好引證道學 先生不夢想そこてたのひのあゝ筋
 が分るだらう、ア、歎からしいことだ、ちつと學問をするが、等
好學五日の日に、在宿いたすから、チト機げんを聞きながら來さッ
聞語〇日釋里 △アバム、二七三八四九五十、ひなしかして押分け
 られめ、エ、あゝなるほど屁の講釋、かん心だ、おめへの物知りて、
 ねへ物ひりだらう、聞人 △左「ころくそりやア、い、が卒公日ぐら
 しいどうしたのだ、△ア、ななに屁でまぎらしたからへぐらしたらう
 又聞語 △卒「どうもこいつが此通り腰を折るから話ができねへ、 △左
 「安波公ちつとだらうッせへ、ちかましい口だ、△卒「いやさ聞きねへ、

可又提 奇妙な趣向で花見に來たが、みんな一ぱいかつがれたよさ、
 がいのおれせへ、まどめたと思つた、借問乃公 △ア、ナニさす、がのおれ、
 へん小刀のまがり、聞いてあきれら、又聞語〇奇 △左「東西く、マ
 ア、どういふ趣向だ、△卒「き、い、ねへ、聽うまく筋をかきアがつた、 △左
 はてな、△卒「き、い、ねへ、すッぱりとかつがれたぞ、誠に憎くしやア、
 つた、き、い、ねへ、△左「ム、い、はてな、一歩々如 △卒「イヤ、こてへられねへ、
舞之使 △ア、エ、こぢれッてへ、不獨どうしたのだ、手前はかりが吞
 込んで、あんだか譯が分らねへ、僕亦 △卒「んにやよき、い、ねへ、△ア、き
 いて居るよ、一つの話にき、い、ねへ、が一そく五六十出ら、遂使
君不忍耐過乃讀者 焦躁亦遠沸騰點矣はやく申あげ、 △卒「そんならかいつまんで話さ
 う、先づ本舞臺三間の間一面に櫻の立木、上の方に葎張の茶店、脚
 様、△左「これさ、撮んで話すにそんなとら入らねへ、ナ、 △卒「いやさ

聞きねへ、其の出茶屋が筋だいな、その娘が十七ばかりで岩井半
 四郎瀬川菊の丞勾當時正旦、蕨の大吉桑三のお茶ツびいに生薑二
 へぎ入れ一語煎法常の如しといふ代物だらう聞きねへよ謹聽そ
 の又腰掛に居た野郎が、はたちはかりでいづれ金満家の息子株色
 の白い嫌味なしの梅幸團十郎亦勾名優持物衣裳つきの御推量 △眼「モ
 シ是にの生薑のはいりませんか其後一語我一語、△左「マタ、ひかへ
 ろく左君由来有、△卒「そこで、其客が暫く休んで茶代を置いて表へ
 出合ひがしらでんばうらしいやつが二人、門口で突當つたといふ
 が云ひがうりて喧嘩よ笑語出花、桃源漸進、それから聞きねへ、其色男をの聞
 きねへよむごくぶちのめすもんだから聞きねへ謹聽又△あな「いや
 さ聞て居るよ語、△卒「流石おすこの事だから、人の黒山のやうに集
 つて見て居るけれど、誰一人り取さへるものもねへ、おれもあんな

りかわいさうだから中へはいつてやうく両方へ引分てやつた
 らぶつたやつら隣の茶店へはいる、色男は其娘の處へはいると
 こと娘も氣の毒がつて、いろく介抱して「おぐしをまアかりに私
 ても結て上げませう」と鏡臺を出してもいに掛ると聞きねへ、隣に
 居るぶつたやつらがいつの間にか調子を合せて、チヤン好「櫛笥鏡
 臺取揃へ」と長五郎髪すきの場よろこで合方にあると聞きねへ△卒
始終以可聽成波、隨又生、語、連解、入、照、其野郎が梅幸の身振聲色で
是不使、文、板、重、秘、訣、讀、者、不、可、及、々、看、過、
又半四、又菊之、又團十、娘を相手に色くおもいれありよ、日暮里中の人
又梅幸、速成、眞、優、人、
 をスツパリヒツかついだが、なんと面白くかついだじやアねへか
咄々、世有、紹、 △あな「まかし重かつたらう山ぐるみかついトやア △卒
子、笑、者、上、
 「いんにやようまくういたトやアねへか △左「ふ、ふりやアい、そ
 れどもあるいか知らねへが面白へく 左君而可、△眼「コウ

花唇八笑人飛鳥山曾花節

なんど此連中へ出掛けやうトやアねへか肉助も飛おめへたぢが
 ぶちのめしてておれが髪すきよ是自負的人、不是自負的人、且故傲
 ちア又成田屋でやるべエ是八笑一流人、本來面目の聲色になり不思議な縁でい
 かいお世話に」△左エ、よしてくれへ、さう思つたばかりで胸がわ
 るくあつた △卒「其顔で髪梳ところか、かみつぎさうだア、お唄の
 うしろで、渡返しのかみずきがい」悪評△眼「へんそねめく、ノウ
 安波公於周不可、去之催さうじやアねへか △あそ、その渡返しの方から御
 多分に洩れやすめへ和而不同、其有深得、於友朋切睦之義△眼「チヨツいめへまし
 やつらだ、兎角おれがいふと、取用ひねへ雖然奈其言、沈瀟大何△左「そんなら
 斯うさよう、人のまた通りもされめへから自分で茶番の心持で一趣向づ
 づつけて、自分の書いた筋なら其狂言の立物にするがい」△あそ「ム
 、それで役不足がなくッていふ、それにしても此顔ばかりで、淋

しい野呂松や出目介のさうしたらう隨手又拈出△卒「さうよ今日の
 てへぶ遅い出仕だの」△左「ナアニみんなさ夕べから二階に行倒れた
 安卒二個自外矣、野呂出目在樓上、免重親ほんに眼公モウおこさッし、晝すぎだ △眼「そ
 うだつげ、一ばん脅かしてくれべい」と棕櫚箒の柄にて二階をどん
 と突きあがら △眼「オイみんなが活きッけへらねへか、モウ日が
 暮れるの」三階にて八人藝の三助の聲で △せん七「ヒヤアさうもハア
 ばうき(病氣)あんべいで痴氣のせへか、どたまがやめて起きられま
 しねへ」△左「其筈だ、アタへはひびくくらつたぜ、オイ外の倒れ者は
 さうだ」三階にて今ひとりの野呂松といふ男、これも八人藝の小僧
 の聲色 △のう「ハイ私ハエ、痴氣のやうな色氣のない病ひはおこり
 ませんが、エ、血の道のせへか、エ、さうも、エ、目が醒めませんで
 困ります」△卒「さうく、馬鹿アいはすと早く起きさッし、急に相談

日 本 華 文

が出來た △眼「ナニそんな甘口でいくのぢやアねへ、みんな引ッば
がう」と眼七卒八安波太郎三人 左女則不動 身處占身分 二階へおがり、夜具を殘
らず引きまくれば、やうく起きて下へ來る △左「時に斯ういふ相
談だ此連中で花見茶番と号して「出目介の半分聴かず △でめ」チット
皆迄のたまふ 如斯抹却 去省察繁、最前より二階にをいて、様子は殘らず承
はり △とん「疾くより趣向致して御座る △のろ」いざ鎌倉といふ時には、
我等が智計を施さば △とん「世界の女は皆殺し 一唱一和、語 演戲模様」表のかた
より頭分六といふ男 △とぶ「香友公御入いーびいーくーてんくーつ、
てんくー 又一人自外亦做演戲様口吻、△左「イヤア奇妙、これて軍勢の
着到はすんだ、コウ寐ばけたやつらは早く顔でも洗つて飯でもく
はッし、そこで頭分六かういふ案だ △とぶ」オット承知く、先刻こ
へ來か、つてズット這入るも智慧がねへから、あんぞ一ばんかつ

日 本 華 文

がうと思つて、そつと障子の蔭に身を潜め、工夫の始終殘らず聞き、
すぐに高案の定て置いた 亦隨手抹去、不然重複觀其何休我〇又拈
出擔字射安卒來時光景唯其不重複爲高手
△とん「イヤハヤといつもすばやいやつらだ、サアくこつちは大變
だ、さッぱり心當りはねへせ △左「ナニサそら、ろたへるともねへ、
今日ッから始めて一日に一幕づ、だから、其うち出來たものから
先へやらかすがい、 誰耶、此間、マア今日の初日はだれがする 且護
一若賭、△とん」物ごとすべて手始めが大事だ、容易なものにはさせられ
めへ先づさしづめおれだ 唯我、△のろ「ナンノ又さしてるとよ、先度
の茶番の手なみて 其車、有、どうして初日が勤まるものかマアく
初日のおれだ 又唯我、△左「熊谷平山待ち給へ 輕々開口、爭ふうち
猶奪」
日がたけるから、中をとつて亭主役におれが始めやう 主帥哉、△でめ
「それがいーく 長者之言、△とん」シテ其趣向はなんとく △左「おづ筋

花曆八笑人飛鳥山賞花節

日 本 華 文

い。じ。か。た。が。ね。へ。此。節。が。ら。だ。此。首。で。間。に。合。ひ。さ。う。な。ら。お。大。事。の。も。の。だ。が。心。置。き。く。つ。か。ひ。給。へ。使。得。好。亦。左。そんなに力を落すこと
 ね。へ。出。來。役。廻。り。の。助。高。屋。だ。せ。優。六。部。の。い。て。た。ち。で。チ。ヤ。ン。く。と
 鉦。鐺。を。な。ら。し。て。來。掛。り。切。結。ぶ。中。へ。割。つ。て。入。り。暫。く。錫。杖。で。あ。し。ら
 ひ。ま。が。ら。[それ]がし一言いふとあり暫くくくと双方引分けて、笈を
 お。ろ。し。中。か。ら。搬。出。是。那。酒。肴。三。味。線。を。出。し。て。お。れ。に。渡。す。と。チ。ヤ。ン
 く。チ。ヤ。ン。く。と。ひ。き。出。す。か。ら。出。目。公。と。頭。分。公。が。[エ。]。一。エ。山。で
 き。ッ。こ。ろ。が。し。た。松。の。木。根。ッ。こ。の。よ。で。も。と。頭。分。公。が。波。之。打。份。安。波。公。が
 例。の。踊。り。打。份。太。鼓。跡。其。人。太。鼓。跡。の。者。も。見。物。に。ま。じ。つ。て。居。て。す。ぐ。に。
 そ。こ。へ。踊。り。込。で。大。酒。も。り。と。あ。る。と。い。ふ。や。つ。だ。一。酒。一。盤。風。流。千。古。
 △のろ「イヤきてれつ〜、妙計サア〜ちツとも早くおしださう。真。個。奇。
非。妙。計。天。道。是。歟。失。算。顛。倒。△ア「うんならア衣裳や道具を早く工面しよき。△左「が

日 本 華 文

ん。公。て。へ。ぎ。な。が。ら。例。の。と。こ。ろ。へ。行。て。か。り。て。來。て。下。ッ。し。是。は。茶。番
 一。式。の。損。料。屋。な。り。入。用。は。今。い。ふ。通。り。だ。順。禮。の。つ。に。裝。刀。の。も。大。小
 も。銀。貝。刀。が。い。、ぞ。し。か。し。お。ひ。ず。る。ゆ。せ。な。か。に。千。秋。萬。歳。や。大。入。叶
 では。チ。ト。中。だ。の。お。正。う。つ。し。て。行。て。へ。も。ん。だ。△卒「それにい、算
 段。が。あ。り。や。す。と。う。せ。六。部。の。お。ひ。も。本。も。の。で。な。け。れ。ば。諸。色。が。這。入
 る。め。へ。か。ら。山。崎。町。へ。い。ッ。て。六。部。の。な。り。と。お。ひ。づ。る。の。借。り。て。こ。よ
 う。こ。れ。も。ま。た。彼。の。地。に。出。來。合。の。順。禮。六。部。の。損。料。屋。あ。り。△左「そん
 なら。そ。う。し。て。く。ん。ね。へ。あ。、併。し。じ。い。む。穢。汚。だ。ら。う。な。△卒「じいむ
逆。秩。も。坂。東。も。一。處。に。か。い。て。あ。る。ぞ。△左「エ、わ。る。く。し。や。れ。ず。と。千
 手。觀。音。の。居。さ。う。も。ね。へ。の。を。用。人。呼。風。為。千。手。觀。音。以。其。多。手。足。早。く。借。り。て。き。ま。ッ。し
 と。卒。八。眼。七。を。せ。き。立。て。を。い。出。し。排。眼。卒。法。△左「サアそれできまッたが、
 あ。ん。ば。出。た。ら。め。で。も。ち。ツ。と。は。き。ッ。か。け。を。附。け。て。を。か。う。と。是。よ。り

日 本 華 文

稽古にかゝる △左「さア出目公とをれば程のいゝ處に居る」とて
 安波公もをちとく、これさマア立たッせへち、一語從左次口裏寫、そ
 うくそこいらがいゝ、そこできッかけの圖部州が山の下でかね
 をたゝく音を合圖にたば公があはこをつめて二者稱呼相類故左次
之「順禮どの火をニッ」とそはへくる △ア「むゝ能し」 △左「あゝ
 能し」くじやアねへ、こゝへ來さッしな、いけづる 現從左次口裏
△「たば公があはこを呑んとやア、たばるときせこ入れが入るの成
左次之語 △左「エ、しやれるちへ邪魔になる、サアたバ公亦又た、
一次成趣 ねへか △ノ「アハ、ハ、ハ、ハ、ヤッパリたば公だア 又插野呂 △ア「お
 いた、こりやう順禮びろうなびら火を一つおかしやれ △テ「な
 に夫れにびろうが入るものか 又挿出目 △左「いゝさ、いゝさ、そこでト
 すいつける、笠の内をのぞいてやアめづらしや鳥目百味、汝を尋ぬ

日 本 華 文

る其爲に幾年月の艱難苦勞、供不載天の父のおだ元來不俱載天、眞盛
 サアトんじやうに勝負く、さア出目公もな者流錯爲俱不載天んとか云ハッし語作
語宛 △出「おいゝ、辨才天の御由來、好笑くわしく尋る母の敵 △左
轉自在 「これサ、どうもしやれてばかり居ちやア、いけねへ、身にしみさッ
 しな、そしておれが父の仇と云ふのに、母のかたきと云ふこともね
 へ △出「おめへが父といふから同じ云草も智恵がねへからそげて
 やるきだ 好 △左「いや、そんな智恵の出さねへがいゝ、そしてむづ
 かしく云はずと、あたりめへに浮きぎの龜う、どんげの花こゝで逢
 なたは天の興へ是劇部とかなんとか紋切形でいゝ、とさ △出「う、と
 んに花巻などやッていどうだらう 又 △左「かにくしやれた
 がッちやア、とりいゝ △出「おいきた、そんなら優曇華の花うきい
 の龜ふゝで逢ふたの百年目 △ノ「どうでこッちは夜がたらき、二世

日 本 華 文

より先きへいのちづな野呂吞又挿△吞「戀の盗みとたれしら波晚
 にやいかうと合ことば一語分做三人△左「いやモウどうもならねへ
 ぞ、あの又べらばぎなんだ、いやみなさまをしやアがるわ一語形
有餘且舞「オアちツと邪魔をせず居て下ッし、それでなくッてせへ、
 しやれたがッていげねへ、オアく〜てへげへにして置から、サアお
 を公ちツと立つて見さッし△左「へんおれかよし〜、かうなるか
 らは名乗ッて聞かさん能ツく聞け、我こそなくとんむ天皇無咎の
 強陰又△左「これさ〜、そう時代てわりい、そして狂言の氣を
 はなれてもかねへと、オドめらしくねへ、ム、かうするがい、あら
 たまるど角が立つから矢ッぱりかだんの喧嘩の心持ちでやッて
 見さッし、一轉又おれはオア見物にあるから二人でやんな△出「ム
 、それだと大きに仕い、そんならおは公やるぞ△左「おい〜順

日 本 華 文

禮どの火を一ッかしてくだせへ△出「ハイ〜、笠の内をのぞいた
 と思入あつて、オヤてめへは鳥目百味だな、七年以前におれが親を
 うッて墮落ちをして、おくねが知れなかつたが能い處であつた、モ
 ウこちとらが目に掛かつては貧乏もささせねへぞ、覺悟をし
 て勝負をしろ△左「なんの此野郎めへ、うぬらが二人や三人來たと
 ヽッて、屁とも思ふものか、そしておのれのおやぢがするい事をかり
 しやアがッたから殺したのだわい、それがわりいか△出「む、わり
 い、これへ、親父を殺されてだオッて居ちやアげねばわりいやア、お
 んでもうぬを殺さねへトやア、つらぶよをれらア、ばかんつらん奇
溢然サア江戸子だア△左「どう〜、どう云へば斯う云ふと夫れて
 も又おんよりだ、儲て〜、ヒレッてへ事だぞ、道理で茶番のたんび
 にいた〜く等だア如真有其車「エ、てへげへにして置かッし、をれがい

、様にどたついて仕舞うから餘まり口敷をきかねへやうにしさ
 ッし自然そこで又たてだが夫れもばた／＼やどっこひと見へに
 なつての能くねへせ、すぢの先度の通りて間のぎっくりなしたよ
又勾前回演戲「をい／＼」左づぶ公そのさいはいと、しんばり棒
如真有其事を持つて来てくんか、おは公は両刀だぜ、ア承知／＼、をれにのさ
 いはいを下ッし、オットきた、サアやるべい、左「出目公の左へまわ
 んな、出へん御開帳のやうだ、又一監〇押靈、左しやれるな／＼、又
 サアトんじように勝負／＼、又「アバ」心得たりと、△佐「イヤたりとト
 云ふどの字はいらねへたい心得たサ、又「おそれ抜き合せた、そうそ
 う、そう来る、うまひ／＼、取語如祝、それを拂ッた、一つ飛んで後
 ろへとんとんとん／＼と、おとすさりするはづみに箱火
 鉢へつかへて、尻餅をつけば、好掛けてありし土びんをこゝしぢら

くぢら／＼と一面に灰を吹き立てる、おバ太郎はごとくにて龜
 の尾の骨をつよく痛め、急に立ちおぼると出來ず、火鉢へ腰を掛け
 たるま、灰まぶれまッしろにあり、△アバ「あた／＼あた／＼」不費力
 此時本八は笈をせおひて歸りしが此の体を見てきもをつぶし、不
節來話分爲兩「おや／＼、こりやアどうしたのだ、大變／＼、行暮ら
段、文便不板直したる旅の修行者此大雪に難義至極、好一箇「エ、しやれ處で
 ねへ、まア早く来てくだッし、△ミナ「おバ公、尻が焼けるの、早く脇へ
 のかねへかど引立てられ、顔をしかめながら／＼／＼／＼、△ノ「そこへすわらッし、オイ其のさいはいをこ、へくんか、さア
 目をしッかりと睡ッて居たり、好「おれ／＼、目も鼻も知れなく
 ちッた、さアい、こッちへ來さッし、△左「まア着物を着替さッし、尻
 のびしよぬれだ、好「なに此の着物をしよぬせて町内を一ぺん

日 本 華 文

廻らせるが、△左「寐小便も此の年まで止まねへからモウ直
 るめへよ、△ア「あ、く、いてへぞ、まことに目がくらんだ、△左「アハ、
 と左次さんモウちツと痛くねへ趣向のあるめへか、△左「アハ、
 、、、、、何さ飛鳥山に箱火鉢が無いからい、と益出みなみ
 な大笑ひになる、此時眼七も諸色とりそろへて歸り、△眼「さア、
 道具の揃った、コウ今道で八つをきいたせ、仕組が能くは出掛け
 ねへか、人の出さかりで無くツちやアおかしくねへせ、△左「そろく
 稽古もあらまし筋が通ったから能いとして出掛ける仕度にせう、
 どれがん公、衣裳を見せ、い、奇妙く、黒羽二重朱鞘の大小、あみ
 笠とサアあは公渡すぞ、こつちの杖はくりだ、さア、く、着替へた
 く、これより役割のもの思ひく、のこしらへ出来て、△左「まづ是
 てしたくない、い、が些と腹がわりいな、日可日不可編案結△がんでうさ
此世開口便不凡

日 本 華 文

今日のめづらしくマダ始めねへから、果那物わすれをしたようだ
足想見平生「あんどさかなをこしらへようか、△左「ナニく、そんなこと
 をして居られねへイヤ併しべんとら入るあ、がん公そこらへ
 イッて見つくろツて来てくれねへか、両用ゐに鯨なんぞもい、ぞ
△ア「ア、ますいもの屋のにしめも恐れるツ、そして鯨もこひ願ひ
 くば長門といきてへな、△眼「ながとすしとどこだ、△ア「馬喰町よ
 此男もあゝの鯨屋を知らねへか、△がん「なんぼおれが物識りだ、とッて
又自負的語「どうしてこゝいら迄知れるものか、コレすしに、△左「アハ、
といふとサ不足以爲佳證「△左「アハ、△左「アハ、
 くごたつくせ、なんでもい、から早く働らいて來さッし、ぞして笈
 の中へ皆んな詰めて、圖部州の一足あとから出掛けさッし、おらア
 茶碗で酒出、二三ばい引ッ掛けて先へ出よう、ナア出目公、△出「ム

日 本 華 文

夫レがい、盃一ア、おれから始めよう。我一ア、咽がぐびぐびする。△「ア、おれ」意地のきたねへ男だぞ、そんならてんぐにまよう待遠だ。皆盃サアこれへついでくん△左「そりやアい、が順禮唄を承知か」△出「オット氣づうい玉ふな例の美音で女どもを迷はせてくれべい」的又自負 普陀落や岸打つ浪のおのれのみ。△「ア、ム、碎けて今朝の物をこそ思へ」出目語半截作安 紋切形だの。一實是庸梵唱。△左「サア、おは公出掛けねへか」△「ア、おい」最う一つ、ついでくん△出「いや最う呆れた意地き」なだぞ、そんならおれもモウ一ばいやろう。此尤而傲之、と負けず劣らぬ底抜け上戸。詰左二郎のよろしく立ちいで、△左「さア」遅いぞ、今からそう飲んでつまるものか、是からが大役た馬鹿くし。以五十歩笑、と小言たらしく手を取つて引いださね、おは太郎はおみ笠深く打ちかむり、

日 本 華 文

出目介左二郎もおひづるをふどころに入れ、管笠に顔をかくし隣を忍び出てゆく。白眼看他人之指目、引きちがへて眼七歸り來り。△「さアさかなもりッばに出來た、なんと重詰はきれいだろう」危哉々。△卒八「おれ」既有恣、△「オット」單一語、出擷取有餘力、夫れからごろうじろ。△「ッ」なんだぞ、まだ見もしねへに、喰ふと云やアしめへし、其然然。どうぎと用心をするぞ。△「すみの處にある黄いろい物はなんだ」准陰流、△「おれ」端環矣、不「これよ」△「オット其手はくはね」上流、△「おれ」治將有賊、△「その手をくはすば此足をくはう」好葛と櫻煎をしてやらね。△「エ、おじやれるさいきたねへ、笈から出すのだから奇麗ごとでなくッちやアいけねへから折かく骨を折て詰めさせたにちヨッだいましにした」故曰、盤之不可、卒「おれ」ほんになア、おれが直してやらう。嗚呼亦不、△「いんニヤたのむめへも

花曆八笑人飛鳥山賞花節

淨瑠璃曲義經千本櫻渡海屋銀平家宅之段

四十二

淨瑠璃曲淵源于平家物語及謠曲其有之始于小野阿通淨瑠璃姬十二段物語故名曰淨瑠璃阿通織田信長侍女也或云阿通以前既有淨瑠璃物語其後浪華俳歌師井原西鶴作二三曲而至其門人近松門左衛門則極結構文字之盛自是淨瑠璃大行竹田出雲紀海音三好松洛並木宗輔並木千柳錦文流等並起競巧出新皆施之傀儡優倡者流亦探爲其戲藍本於是淨瑠璃卒爲本邦劇部院本義經千本櫻係出雲松洛千柳同撰雖其撰非最上乘結構壯麗行文流暢亦屬淨瑠璃曲中屈指文字

淨瑠璃詩之一體諧音韻主曲調故其文五七語作儷步騶有拘束造語嫌放肆時或不免局促冗長之病然至其上乘者運神于規畫之外寓法於無法之間流暢輕妙天馬行空有所謂一箇之內音韻盡殊而

句之中輕重悉異言之短長與聲之高下皆宜之妙其豪宕壯快文字如山峙水奔其沈痛激越文字如笛悲筑激故感動人之切勝于散文遠矣其体宜乎高聲朗讀亦是一種華文

本篇知盛暗筭義經義經暗筭知盛彼此明々知對兒爲白龍魚服而俱僞爲不知俱僞落其圈套欲以收豫且之功是所謂鬪智之戰非鬪力之戰也乃如相摸五郎昧者信爲鎌倉武士何圖亦是英雄欺人之策末段雙龍露全形疑雨迷雲全露至尊也典侍也相摸五郎也所有萬物皆莫不呈真形而讀者始出五里霧中架空樓閣未有如斯崢嶸偉麗者也

本篇立案從謠曲舟辨慶來故處々湊合舟辨慶之文描知盛半如鬼半如人幻怪詭譎使讀者不知所端倪雖則襯貼謠曲畢竟作者弄狡獪技倆眩讀者之眼目者

夜ごと日ごとの入船に濱邊賑はふ尼が崎、大物の浦にかくれなき
 渡海や銀平海をかへて船商賣店は碇帆木綿上り下りの積荷物
 はこぶ船頭水主の者、人絶のまき船問屋、世をゆるやかにくらしけ
 る、夫の積荷の問屋廻り、内とまかなふ女房おりう、宿より客の料理
 と、のへ、處がら連網の物、鹽がらな鹽梅もあまふそ、だちし一人娘、
 おやすがついのうた、ねに風ひかさじと裾に物、おくのふすまを
 ぐとらりとあげ、風呂敷わいげけ旅の僧、是什麼によきくど立出れ
 ば、これのママお客僧さま今御膳を出しませすに、どこへおいでなさ
 る、ぞ、さればく西國への出日和待て連れども、ほつと退屈、只
 居よりは西町へいて買物をしてきませう、是のくこのりおほい
 外のお客へのとり貝なます御出家には精進料理、分だつてこしと
 へたに、ついあがつてござらぬか、イヤく愚僧の山伏おれば精進

日 本 華 文

日 本 華 文

せぬ、とり貝なますよりうぞや、性頭それでもおまへけふは廿八
 日で不動様の御ゆる日、ほんにそふトや、大事の精進、ハテあんとし
 よ、しよとがまゐい、いてきませうとふいと立、あいたくく、ハア御
 客僧さまあんとあされた、イヤ別のことでもあいが、ねているのこ
 のおむすか、此子の上をおみこへたれの、俄に足がすくばつて、是
 等現エ、聞へた、ちいそうても女子なれば、虫が知してしやきはつ
 たもので有、蝶語從此ヤア大ぶりのせぬうちに、いてきませうと
 武藏坊、はつてう笠ひつかぶり、いづくともなくいそぎ行、是後經晴
 歩、作者微點線索爲後匠、是草蛇灰線法母の娘のそばにより、コレお安そのようにうた
 たねして、かぜひいてたもるなやと、寶玉般奉承、豈いたきおこせ
 ば目をすりく、チ、母様おまへのなさる事見て居て、ついとろよ
 とと一ねいり、チ、夫れならば目をさまして、けふ習ふた清書をと

日 本 華 文

つくりとよふ書いてと、さまのお目にかきやと、子にの目のなき
親心、手をひき納戸に入にけるか、る處へ誰とも知らぬ鎌倉武士、
誰家來引具し亭主にあいふと内に入れば、女房おどろきはしり出
夫の他行何の御用とたづぬれば、身の北條の家來相摸五郎といふ
もの、此度義經尾形を頼み、九州へにげ下るとの風ぶんによつて、
刺入鎌倉殿のおほせを受け、主人時政の名代として討手に只今下
れども、うちつづく雨風にてふね一艘もとのはず、さいはい此の
家にかりおいたる船日和したい出船と聞く、ねがふ處あれば其船
みどもが借受け、櫓を押し切つて下らんす、たび人あらばはいま
り座敷をおけて休息させいばやふく、と權威を見せてのし上れ
ば、女房のはつと返答に當惑しあがらそばにより、御大切な御用に
船がなふてさぞ御難義てまへのおきやくも三三日いせんよりひよりま

日 本 華 文

ちして御逗留、今さら船をこととりいふておまへの御用にもたて
がたし、殊に先様も武士方なれの御同船とも申されず、何とぞ御り
ようけんあつて今夜のところをお待ちなされて下さらむ、その中
に日和もなかり、なんぞうもく入船の中をかりと、のへて上ま
せうだま女其突如一喝、逗留がなればかのれらに、云付ぬ、處の守
護へ權付に云付くる奥のさからひがこはふておのらの口から云
ひにく、は身どもがトきに云ふべいとすんと立つ、一袂にすがり、
おせきなさるのど尤なれども、おまへをおくへやりまして、じきに
御相對さしまして、ふなやどの難義なにぶん夫のかへるまで、お
待ちなされてくだされと手をすりわびれど、ヤアしちくどいめろ
うめ、我彌謙、おくの武士にあいさぬ、察するところ、平家の餘類か
義經の彼彌謙、おくの武士にあいさぬ、察するところ、平家の餘類かかりの者、又辣語、使人汗浹、背、家來ぬかるな油断すなど、

浄瑠璃曲義經平家御難義てまへの

日 本 華 文

といむる女房をはね退けつきのけ、又一嚇一嚇また取附くをあらけ
 なく、ふみたおしけたおすを戻りか、つて見る夫、故是到矣、誰知亦是
又嚇殺、不獨嚇殺家婦、殆欲嚇殺讀者、蓋此處はしり入て彼のさむらいが
極力描成、奸曲摸樣、以華後面、繪局之紀事、手を取つてまつびらごめん下さるべし、すなりち私このやのてい
 しも渡海や銀平、御立ぶくのようす我等におほせくださるべしと
 膝をおり手をつけば、ムウ儂○亭主○なら云つて聞かさん○善○出○彌○傲、
者武士身は北條のけらいあるがよしつねの討手をかうむりおくの
 武士が借つたるふね此方へ借らんため、おくへふん込身が直きに
 その武士に逢ふといへば、わが女房がさへぎつてといむる故に、今
 此しぎへエはかりながらそりやおまへが御無理なやうにぞん
 トラれやす、なせとおつしやりませ、人のかつておいた船を無理に
 かるふとおつしやりやす、ナア御むりドや御坐りませぬか、その

日 本 華 文

うへにまだやどかりの座敷へふん込ふとなされたを、やらんと
 おつしやつて女房共をふんだりけつたりささる、い、おさむらい
 に、あいませぬようになぞいやす、この家に一夜でもやどいたし
 ますればあきない旦那さま座敷のうちへふんごましましていど
 うもわたくしがお客様へ立ませぬ、どうぞ御了簡なされておかへり
 なされてくださりませ、恢氣冲天、而恭願謹慎、イヤサ町人めかまくら
 武士にむかつてかへれとい、い、さん是非なくへふん込とぞりう
 ちかへいてひしめけば、傲極矣、業既不可、堪且恭謙一恭謙、ア、おさむらい様それい
 おまへのごたんきでござりましょ、わたくしも船問屋はして居ま
 すれど、聞はつッております、が、うべつ刀脇指では人切るものと
 やないげにござりやす、おさむらい様、がたの二腰のみの要害、人の
 そふつ狼籍をふせぐ道具じやとやらうけたまひりました、さるに

日 本 華 文

よつて武士の武の字は戈を止むるとやら書きますげにござりま
す解妙ヤアとしやくなやつめ、嘲るはうけた切りさかんと抜打ちに
きりつくる使則不施、ひつはづして相摸がきううてむんずとと
り、コリヤもう了簡がならぬい、町人の家の武士の城郭敷居の内
へ泥脛をきり込さへあるに、このかたなごたれをきる、そのうへに
平家のよるいの、イヤよしつねの所縁なんぞ、たび人をおどすの
か、我却發よし又判官殿にもせよ、大物にかくれなき真綱のきん
平が、おかくまひ申たら何とする刺義經サア真綱がひかへた、なら
ばびくともうごいて見よ、素頭みじんにはしらかし、命をとりかぢ
この世の出ふねと、刀もぎとり宙にひつさげもつていで、かどの敷
居にもんごりうたせば、死入るばかりの痛さをこらへ、頬をしかめ
ておきあがり、亭主めよつくおぼへてゐよ、此返ぼうにうぬづく

日 本 華 文

び、さらへ落す覺悟をせよ、まだ頼げたくかど、庭なるいかりをぐ
つとさしあげ、みじんにあさんとなげつくれば、暴風に逢ふたる小
船のごとく、しりに帆かけて主従い、あどを見ずしてにげ失せける、
婦謙而渠怒婦謝而渠喝、婦止而渠打、是既可發作、乃夫問知其車、山說以道理
而渠罵、容以詭辭而渠笑、刃研之而後、我其狀而打其首、我其休而被其魂、是理
所當然、勢所必至、誰其謂之、ホ、ウよいざま〜と、たばこぼん引寄せ
假而終是假、嗚呼奇策矣、 眞知是英雄欺人、ちんと女房、おくの御客人も今のもやくやお聞き
なさつたてあらふあと、義經女夫がひそめくはなし聲もれきこ
へてや一間のふすまをしひらき義つね公、たびの艱苦もやつれた
る御顔ばせ、駿河龜井もあとに従がひ立ち出る、こは存トよりちや
と夫も俄かに膝立なをし夫婦もろとも手をさぐれば、かくすより
あらゐる、はなしと兄頼朝のふ興と受け、世をしのぶ義經、彼深秘
其為知
盛、我自告、吾為義、經、彼謀一在能秘、我策
一在開柙、作者寫二人、不用同一之筆 尾形をたのみ下良んと此の處に

日 本 華 文

一宿せした、その方よくもはうり知つて時政が家來を追退け、今の難義を救ふたるは業に似ぬうい働た、され一の谷を攻め、時鷲の尾といへる木こりの置に、山道の案内させした、山がつには剛あるもの故、武士とあきてめしつかひし、それにまされた、汝が働き、あつばれ、昔の義經からむ、武士に引上げめしつかひんに、あるにかひあき、飄泊の身と、武勇はげしき大將の身をくやみたる御ことば、駿河龜井も諸共にむねんのごぶしを握りける。風箇如示赤心誰知亦是英雄欺人蓋彼以情來我亦以情接之彼以假來我亦以假應之兩相相遇助有這般現象これはく有難い御仰せ、私も此かいわいては眞綱のぎん平とて人に知られて居ますれど、たかい町人今日のはたらきも畢竟申さばかまを將軍、瑣細なごごお目にまよつて、我々連に御褒美の御ことば、冥加にあまる仕合せ、まことに君を見おぼへたてまつるは八島へおもむき玉ふとき、渡邊福島よ

日 本 華 文

り兵船の役にさ、れ拙者が手船も御用にたつし、一度あらずこのたびも不思議におやど仕るも深き御縁、さるによつてお爲めをぞんじ申上たきは、北條の家來とつてかへせば御大事、一こくも早く御乗船然るべしと。明々拔之死地、何云ひもあへぬに駿河の次郎、われくもその心の天氣にて御出船のいかいあらん、ア、夫をぬかつてよござりましよう、弓矢うちものはお前がたの業、船と日和を見ることは舟問屋の商買、きのかけふは辰己、よあかには雨も上り、曉がたにはあさあらしにかとつて御出船にはひん抜の上々びより、數年の功にて見置いたと見すかすやうにいひけるは、其の道々と知られける、龜井の六郎すんとたち、チ、ぎん平出かしたり、それ方が詞について雨のはれまに片時もはやく、主君のおとも仕らんと申し上れば、義つね公、船中の事はぎん平が宜しく計らひ得させ

日本華文

よと明々入固套矣何固仰せにはつとかしらを下げ只今も申すとは
是反問苦肉之策 御見おくり
の爲め拙者も手船で須磨明石のへんまでまいらん元船の有所の
五町あまり沖のかた船はすまはち日吉丸おもひ立日が吉日吉祥
われも雨具の用意をいたし跡よりおつゝきたてまつらん女ぼう
君を御見立申せと云すて納戸に入りければ妻はこゝろへ御身を
をかくれ簾笠まいらするヲ心づかひ忘れしと龜井駿河も共
に蓑笠とつて着せまいらせ二人も手早く紐引しめいざせ玉へ
と主従三人打連立つて濱邊に出でかねて用意のはしづねにめし
玉へば兩人も飛乗りくサアく船頭仕れともやひほどけば女
ぼう門送りしておまはにあり御武運めでたくましくて果願其武運長
耶御縁もあらば重ねて御目にかゝるべしさらばくくに鴈を押立

日本華文

て沖へ出船女房のいぎせき内へ入相時ア、心せかれやとひうち
からして油さし神棚おらへに灯をてらし娘々おやすくとよび
出し暮がたに手習ひもおきやらいで今夜はと、さま侍衆を元船
までおくつてなればそなたもねるまでこゝにいやほんにぬしと
したことが千里万里も行やう唯言千里萬里終是十萬億土身ごしらへもう日
も暮れた用意がよくばいりしやんせと呼べどぐつともいらへな
し若し晝の草臥てうた、ねではあるまいかぎん平どのくと呼
びたつれば、ろもそも是は桓武天皇九代の後胤瞬息轉換何等微妙淨瑠璃多奇文雖然如是
者稀平の知盛幽霊明々自説幽鬼是幽鬼是不幽鬼瞬味模渡海やぎ
ん平といかりの名新中納言知盛と實名あらひ上り恐れありと
娘の手をとり上座にうつしたてまつり君は正しく八十一代の帝
安徳天皇にて渡らせ玉へと源氏に世をせばめられ所詮勝つべき

淨瑠璃曲義經千本櫻渡海屋銀平家子之段

日 本 華 文

軍さからねば、玉体の二位の尼いだきたてまつり、知盛もろとも海
 底にしづみしとあざむき、某供奉してこの年月、おちの人を女房と
 いひ、一天の君を我子とよび、時節をまちし甲斐あつて、九郎太夫よ
 しつねをこよいの中にくちどり、年來の本望を達せん、ハア、よ
 るこばしやうれしや、曲侍の局もよろこむれよと、いさめる顔色
 威あつてたけく、平家の大将知盛と、其の骨柄にあらはれし是人
 さてはつねぐいのおんねがひ、今夜と思し立玉ふあ、ときて九郎の
 す、とぎ男仕損トばし、玉ふな、典侍慈眼説九郎可畏亦是作チ、夫
 者暗作後面之地草蛇灰線
 れにこそ手だて有れ、北條が家來さびみ五郎といひしは我手下の
 せん頭とも、討手といつたり狼籍させ、某よしつねに方人の跡を見
 せよ、ろをゆるさせ、今夜の難風を日和といつたり船中にて討取
 る手だてなれども、果是鬼耶否々鬼
 焉有此等詭計 知盛こそ生き残つて、義經を討ッ

日 本 華 文

たん也と沙汰あつて、未々君を御養育もあふすかさねて、頼朝に
 怨も報ひれず、去るによつて某人數を手配り、解にてあどより、不ッ
 つき、義經と海上にてた、かひ、分人鬼漸 西海にて亡ひたる平家の
 悪靈知盛が怨靈なりと、雨風を幸にかれらがまなこをくらません
 ため、我が形も此のごとくあやしく見する白糸をとし、是人この白
 柄のなきなたにて、九郎が首取り立返らん、勝負の合圖は大物の沖
 に當つてちやうちん松明一度に消えなひ、知盛がうち死と、ころ、
 ね、君にも御覺悟させまし、御骸みぐるしなき様に、オ、跡氣づかは、
 すとよき奏を知らせてたべ、知盛早うとみこと、のりこは有難しと、
 龍顔をはいし申せばおどなしき、ハツの太鼓も御年のかずをかた
 どの合圖のしらせ、早やお暇よと夕浪に薙刀とり、なかし、巴波の紋
 あたりをばらい、砂を蹴たては、やてに連れてまなこをくらまし、飛

淨瑠璃曲義經千本櫻渡海屋銀平家宅之段

日 本 華 文

か。如。く。に。か。け。り。も。く。既是人也尚作幽鬼摸樣敢句深添あ。と。見。お。く。合語曲來文字變慘鬼氣森然逼人
つて曲侍の局御傍にさしよつて今知盛のおつしやつたと能うお
聞きなされたかおさなければも十善の君このさもしきゆすがた
にての軍神へのおそれあり御装束とたちあがりまさかの時はも
るどもに冥土のたびの死装束と心にみめし納戸口なみだかくし
ていりにける夜も早や次第にふけわたたり雨風はげしく聞おれば
今ごろは知盛の難義しやらんいとおしやとねびさせ玉へはひた
すらにあんじとびたる御けしきゆをかくつばねは山鳩色の衣冠
うやうやしくくだいにのせその身もども衣服をあらため一間を
出で片時もはやく御装束と御そばに立寄りしづのうわぎをぬぎ
かへて下の衣上の衣御衣冠に至るまでめさしかもればあてやか
にはじめの御すがた引かへて神のみすへの御よそほひいとたう

日 本 華 文

ど。く。ぞ。見。へ。玉。ふ。光。輝。面。一。變。サ。ア。こ。れ。か。ら。は。知。盛。の。吉。左。右。を。待。つ。ば
かりと國終是凶報そよどの音も知らせかど胸轟るかす太鼓かね
すいや軍まつさい中と君のおそばにひきそひて知らせをいまや
どまつおりから知盛の郎等さびみの五郎いきつきあへず馳せ付
けば様子いかに早う聞かせよ聞かせよとつばねもせきにせき
たてたり知盛混戦摸樣不實寫之借五さればかねての手だてのど何
り暮すきよりみかたの小船を乗出ししし義經がのつたる元船ま
ちかくとぎよせしにありしもはげしき武庫山あらしにつれてふ
りくる雨いかづち時ふそ來れと水練たる味方の勢みな海中に
どび込で西國にて亡びし平家の一門よしつねにうらみをあさん
どとねくによむわれは光景源從話敵に用意やしたりけん提燈
たいまつばらくと味方のふねに乗りうつりこゝをせんぞとた

淨瑠璃曲義經千本櫻渡海屋銀平家宅之段

文華本日

たかへはみかたの駆武者大半うたれ事あやかく見ゆし
はどつてかへし主君ともりの御先途を見といけん
へすかけり行サア〜大事が起つて来たさるにても知盛のお身
のうへ氣づかわし沖のやうすいはいかならん
しあぐれば提燈たいまつ星の如く天をこがせばまんくたる海
も一目に見ゆたりあまたの小船やりちがへて船やぐらを小精
にとり敵もみかたも入みだれふねをどびこへはねこへて追ッつ
まくッつたい〜聲にて切結ぶ人影までもありありとたいか
こへ〜風につれ手にとるやうにきこもるにぞあれ〜こらん
せあの中に知盛のおわすらんやよいづくにどのびあがり見たま
ふ中に提燈たいまつ次第〜に消ゆるせて沖もひつそとしづま
ればこれこそ知盛のうち死の合圖とあよりあきれて泣かれもせ

文華本日

すどぼらにくれて立たるところに 果是當時情狀作 入江の丹藏あ
けになつて立返りよしつね主従手いたくはたらき味方のこらす
討死まつた主君知盛も大ぜいにとりまかれすてにあやかく見ゆ
けるがいかい〜に御行方知れず 是死是不死畢 必定海にとび込
御さいとぞんすれば冥土のおとも仕らんと云ひもあへずにも
ろはだくつろげ持つたる刀腹につき立て汝のかかみへとび込め
は 火滅矣是接知盛之計也又隨拈出一人使之報知盛之死以激成典侍ヤア
さてい知盛もあへなくうたれ玉ひしかはつとをかりにさうと
し前後も知らず泣きければ君も見ることを聞くことのかなしさ
いさ取りまぜてともになみだにくれ玉ふつばねいなげきの中よ
りも君を膝にいだきあげ御顔つく〜とうちまもり二とせあま
りは此の見ぐるしきあばらやを玉のうてなとをばしめしての御

日 本 華 文

すまゐるおさ夕の供御迄も下々と同トやらにさもしいもの、それさへ君の心では殿上にての榮華とも思ふてお暮らしなされしに、心傷知盛おはてなされて、いしづがふせやに御身一つ置きたてまつる事さへもならぬやうになりはて、つひにはこの浦の土となりたもかかや上もなき御身の上に悲しいことのかぎく、が、ついでにば、ついでものかいのと、くどきたて身もうくばかりなげきしが、アよしなきくやみごと御覺悟いそがんとなみだながら御手をとり、なくく濱邊にいでけれど、いと尋常なる御すがた此の海に沈めんかどをもへと目もくれ心もくれ身もわなわきとぞふるいける、君はさかしくましませと死ぬること、い露知りたまはず、コレのかうは覺悟くといふていづくへ往くのじや、チ、そうをばしめすは理り、コレ能うをき、おそばせやこの日のもとには、ナ源氏

日 本 華 文

の武士はびこりてをそろしい國、この波の下にこそ極樂淨土といふて結構な都がござります、その都に、いはい、君二位、尼ごをば、いめ平家の一門ども、いりも、知盛至乎今日在君側親昵最久故おはすれば、盛待以知君もそこへかみもきあつても、のうき世界のくるしみをまのがれさせたまへやと、此物文字從平家物語紀事來かだめ申せのうちしほれたまひや、おそろしい波の下へ只一人もくのかや、ア、もつたいない此のうばがうつくしくそだて上げたる玉體をおのなんうたる千尋のそこへやりまして、なんと身も世もあられうぞ、このうばもおともするいとしかわいのやしさい君、なんとお一人やられかぞ、夫れからうれしいそなたさへ往きやるなら、いづくへかりとも往くわいのチ、能ういふて玉つたとひきよせく、いだきしめ、火に入り水におぼる、も先の世の約束なれば未來の誓ま

日 本 華 文

しくて、天照す大神へおいとまごひと東に向いせまいらすれば
美しき御手をあひせおしおがみ玉ふはありさま見たてまつれば
きも消えぬ、能うおいとまごひなされたのふほとけのお國のこ
なたぞと指さす方にむかはせ玉ひ、今ぞ知るみもすそ川のなぐれ
に、波のそこにも都ありといと詠し玉へ、チ、おてかしきされ
た、能うお味しあそばした、そのむかし月花のおあそびのありから
かやうに歌をよみ玉ひ、父帝は申すにおよばず、祖父きよもり公
二位のおま君、とりわけては、門院さま、なんぼうよろこび玉はん
に今はのきはにこれがマア、いふにかひなき御製やとかきくとき
く、なみだの限り聲かぎり、なげきくぞくぞ道理ある、つばねのあ
みだの際よりも、御髪かきあげ掻きあせて、いまははや極樂への御
門出をいそげんと帝をしつかといなきあげて、磯打つ波に裳をひ

日 本 華 文

たし、海のおもてを見とたし、いかに八竜王がうがのうろく
づ、安徳帝の御みもきなるぞや、守護し玉へ、語壯傷語之後有這とら
づ、よく波に飛びいらんとするところ、いつのまにか、九郎義經、
突如、かけよつて、いなきとめ玉へば、のふかなしや見ゆるして死な
せてたべとふりはなつて、ヤア、こなたは、急聲立て、急語お、急語作者何故
去、蓋恐後面脚色と帝をこわきにひんだかへ、つばねの小がいなぐ
つとね、ト上げ、無理むたひに引きたて、一間のうちにいり玉ふ、
果是何か、るどころへ、知盛は亦突如來、一篇大わらひにた、か
等主意ひなし、よろひに立つ矢のみのけのごとく、おとしもあけに染まし
て、我家の内に立ちかへれば、如書あを慕ふて、武藏坊、不脱武おも
てのかたにたちぎくとも、知らず、知盛聲をあげ、天皇はいづくにま
します、お乳の人すけのつねねとよば、り、く、とらと伏し、エ、む

淨瑠璃曲義經千本櫻渡海屋銀平家宅之段

日 本 華 文

ねん口おしや、これほどの手によはりのせじと、薙刀杖に立あがり
お乳の人わが君とよるばひく、かけまければ一間をかみ明け九
郎判官帝を弓手のこわきにひんだぎつ、おねを引つけつ立玉へ
は、あらめづらしやいかに義經おもひぞいづる浦浪に、知盛が沈み
しその有様に亦是幽鬼模樣用舟辨慶曲中之語又よしつねもみぢんにあさんと薙
刀とりなほし、サア、勝負とつめよれば、義經すふしもさはぎ玉
はず、ヤア知盛さなせられそ、義經が云ふことありと、始説出主意文情如火み
かどを典侍のつばねにわたししづくとおもひいて、其方西海に
て入水といつはりみかどを供奉し此のところに忍び、一門のおだ
とむくのんとはあつばれく、我れ此の家に逗留せしより、なみよ
うならぬ人相こつがら察するところ平家の落人、辨慶に云ひかく
めみかどをさぐるはかりこと、あやまつて踏みこへしに、果して武

日 本 華 文

藏が五躰のしびれ草蛇灰線悉皆躍然そのうへわれに方人のていを見せ、心
をゆるさせ討ちとるてだて、我れ其事はかり知り、解のせんと、う
を海に切りこみ、うちうみへ船をまひしとくより、これへ入りこん
で始終くしく見といけ、みかども我手に入れたれども、日の本を
知ろしめす萬乗の君、なんじよう義經がとりこにするいれおら
ん、一旦の御艱難は平家に血をひき玉ふ故、今それしがたすけた
てまつたるとて、不和なる兄頼朝も我があやまりといよも云ふま
じ、かならずみかどの事は氣づかじれお知盛と、竟足敵一家聞くられし
さのすけの局不接知盛、接典侍、鋪浪一番而後入、知盛語妙、蓋以此間不可脱典侍也、筆法周到無有遺憾チ、あのこと
とばにちがひなく、さきほどより義經どのだんくの情にて天皇の
お身の上のしるべの方へ渡さふと、武士のかたい誓言、よろこんで
たべ知盛卿と聞くに疑つたる氣もさか立ち、局をとつて引きのけ、

エ、むねん口おしや、わが一門のうらみをむくわんと必魂をくだ
 きしに、今夜暫時に手だてあらいれ、身の上まで知られし、天命
 とまつた義經みかどをたすけたてまつる、天恩を思ふもへ、これ
 以て知盛が恩にきるべきいはれなし、是眞是假不必論源平氏サア只相仇之深不可莫此一語
 今こそ汝を一たち亡魂へたむけん、痛手によるめく足ふみしめ、
 薙刀おつとり立むこふ辨慶押へだて、打物わざにて叶ふまじと珠
 數さらく、と押しもんで、亦是添合詰曲來いかに知盛かくあらんと期し
 たるもへ、我もけさよりふなごにまどり、計略のうらをかいたれば、
 もはや悪念發起せよと、持つたるいらたか知盛のくびにひらりと
 かけかくれば、よ、さてはこの珠數をかけたのは、知盛に出家とあ
 エ、けがらはしく、そもく、四姓始まつて討つて、討たれ討た
 れて討つは源平のならひ、生きかはり死にかはり恨みをなさて置

日本文華

日本文華

くべきかどおもひつめたる無念の顔色まあと血はしり髪さかだ
 ち、この世から悪靈の相をあらひすばかりあり、吐詞變慘形容陰森鬼氣來襲入
 と聞くより龜井、駿河、主君の身の上きづかひしと、おひく、かけつ
 け取りまはせし、ご幼稚なれども天皇は、始終のわかちをきこしめ
 し、知盛にむりいせ玉ひ、朕を供奉しあがくの介抱のそちがあさ
 け、けふ又丸を助けし、義經がなさけなれ、あだにおもふな知盛
 ともつたいなくもおんなみだを浮め玉へばすけの局ともになみ
 だにくれながら、チ、能うおつしやつた、いつまでも義經のこゝろ
 ざし、必ず忘れたまふや、源氏は平家のおだ敵と後々迄もこのお
 乳がみかど様にあだし心もつけうかど人々にうたがはれん、雖爾壯烈
竟是婦人情態さあれば生きてお爲めにあらぬ、君の御事くれくもたの
 み置くは義經のと、用意の懐劍のんごにつき立て、なごり惜しげ

日 本 華 文

に御顔を打おもりく、さらばとはかりを此の世のいとよ、あへか
く息は絶へにける了典侍思ひ設けぬつばねの最後一語辭旋出知盛
君のなほさら、知盛もかさなるうき目に勇氣もくだけ、まばし詞
もあかりしが、天皇の御座ちかく涙をはらくと流して知盛之眞悲
死典侍之悲起知盛之果報はいみじく、一天の主とうまれ玉へども、
懺悔何等曲折何等波瀾西海の波にたいよい海にのぞめども汐にて水にかつせし、是れ
がき道あるときは風波にあひおめしの船を荒磯にふぎ上げられ、
今もいのちを失いんかど多くの官女が泣きさけぶらび叫喚、陸
に源平戦かふとりもなほさず修羅道の苦しみ、又の源氏の陣所
くにあまた駒の嘶くは畜生道、今いやしきおん身とあり、人間の
うたかたなん、目前よ六道のくるしみを受けたまふ、ふれといふも
父清盛、外戚ののぞみあるによつて、姫宮を御男宮といひおらし、權

日 本 華 文

威をもつて御位につけ、天道をおさむき天照大神にいつはり申せし、
その惡逆つもりく、一門我子の身にむくふたか是非もなや、我
れ斯く深手を負ひたれば、なげらへはてぬ此の知盛、只今此の海に
沈んで、未代に名を殘さん、大物の沖にて判官にうらみをなせし、
知盛が怨靈ありとつたへよ淡合得妙、サアく息あるその中に、
片時もはやくみかどの供奉をたのむく、とよるほひたてば、チ、
我のこれより九州の尾形方へ赴く也、帝の御身は義經がいづくま
ても供奉せんと、御手をとつて出玉へば、かめ井するが武藏坊、御あ
とよ引そひたり、知盛莞爾と打笑ひて實是英雄、きのの怨はけふ
の味方我一家敵あら心安やうれしや雙至、是ぞ此の世のいとよ、ま
ひどふり返つて、竜顔を見たてまつるも目に涙喜悲交臻、今はの
名殘に、天皇も見返り玉ふ別れの門出、といまる、こなたの冥土の出

船三途の海の瀬踏せんといかりを取つて頭にかづきさらは
 も聲ばかりうきまぐ波に飛び入てあへなく消れたる忠臣義心此
句發宕雄偉有千鈞重了此大英そのなきがらひ大物の千尋の底に朽
雄結此一大篇不可缺此壯文字ちはて、名引汝にもられく、て跡自波どぞなりにける結亦不
失舟辨

謠曲舟辨慶

謠曲施之猿樂古言謂歌謠爲行猿樂義蓋基之或云猿樂散樂也散
 樂唐山俗樂周禮旄人掌教舞散樂舞夷樂鄭注散樂野人爲樂之善
 者賈公彥疏以其不在官之員內謂之爲散是也古之猿樂者單演談
 謔之態以博觀者之笑爲主至應永中伊賀人服部某善此伎爲足利
 義滿所寵稱觀阿彌其子左衛門大夫元清襲箕裘稱世阿彌宗全父
 子相謀作爲新曲名爲謠曲分其主談謔者名狂言自是猿樂一變面
 目其伎大行足利氏定爲將門式樂使其優人觀世今春保生金剛諸
 氏世祿當時僧一休河上神主僧正徹等皆戲作爲謠曲云後世定曲
 數爲內外百番其曲多成於足利氏之時故所演事蹟大抵係北條氏
 以前不及足利氏以後

謠曲多沈痛激越之音蓋其所說大体趁々武夫之事蹟而間交佛家

日本文華

菩提之説、自不得不然、然至其至理至妙處、言簡而旨長、語婉而情切、有樂不淫、悲不傷之致者、亦不勘、要讀者眼光能甄別之、則於談文蓋有餘樂、

本篇凡二節、第一節寫靜姬叙別、凄婉兼艷麗、第二節叙知盛現靈、陰森交雄偉、前半如花散鳥悲、後半如虎嘯砂走、結合甚佳、

今日思ひたつ旅衣、歸洛をいつと定めむ、起手既帶、加様に候者は、西塔の傍に住居する武藏坊辨慶にて候、是辨慶語、話曲例用、自叙法、中扱も我君判官殿の頼朝の御代官として平家を亡ぼし玉ひ、御兄弟の御中日月のごとく御座いべきを、もひがひなき者の譏言により御中たゞはれ候事、返々も口惜き次第にて候、一解説頼朝、然れ共我君親兄の禮をおもんと玉ひ、一まづ都を御開きあつて西國の方へ御下向あり、御身にあやまりなき通りを御歎きあるべき爲に、今日夜

日本文華

をこめ淀より御船に召され、津の國尼が崎大物の浦へと急候、二解、經避難、自大物浦買船、奔九州上、俱是嘆口氣好、一比は文治の初めつがた頼朝義經不會の由既に落居し力なく、是從者語、下判官、判官都を遠近、道字通、上下用、の道せばくならぬ、其さきに西國の方へと心ざし、まだ夜深くも雲井の月出るも惜き都の名殘、出字亦兩用上、是月出、下是出都恨、いと、せ平家追討の都出には引かへて、追憶、是此時得、意光唯、景、追憶、是此時得、意光唯、とさもうとからぬとも舟の上り下るや雲水の身は定なき習ひ哉、從舟字喚起上下字、上下起雲水、竟說歸人生無常、話曲以外無遺、等世中の人は何とも石清水、石字通、上下用、くすみ濁るを心ぞしるらんと高きみかげをふし拜み、從地名清水起、清水濁二字、竟說神靈灼然却、湊合爲遙拜石清水祠、是假說、經出都沿路、光景、間交、以、其、心、緒、此、種、句、稱、行は程なく旅心潮も、潮字通、上下用、一、是、潮、愁、一、是、海、潮、爲道行記、交之情景、兼至者、とも引く大物の浦に着にけり、從海潮退、喚、起、大、物、浦、御急候程に是のはや大物の浦に御着にて候、某存知の者の候間御宿の事を申付うす

日 本 華 文

るにて候、如何に此屋のゐるじの渡候か辨慶語、前半對後經說、誰にて
御入候ぞ旅會主人語「いやむさしにて候辨慶語」扱只今は何の爲の御出候
ぞ又主人語「さん候、我君を是まで御供申て候、御宿を申候へ又辨慶語」さらば
奥のまへ御通り候へ、御用心の事は御心安く思召れ候へ旅會主人語、辨慶語與
主人問答「如何に申上候、恐れ多き申事にて候へ共、正しく靜は御供
終于此」
とみぬ申て候、辨慶語對義經說、是不定語、蓋義經此行尚勞携、今之折節
何とやふん似合ぬ様に御座候へば、辨慶固非無情者、唯懼外人之指目あつばれ是よ
り御かへしおれかしと存候、判官「ともかくも辨慶はからひ候へ較
強從「畏て候、さふの靜の御宿へ参りて申候べし、辨慶語前、半對義經いかに此
屋の内に靜の渡候か、君よりの御使に武藏が参して候、後半對「むさ
し殿とは荒思ひよらせや、何のための御使よて候ぞ、辨慶語「さん候、只
今参る事よの義にあらず、我君の御説に是迄の御参り返々も神妙

日 本 華 文

に思召候、先慰去あがら唯今は何とやらむ似合ぬ様も御座候へば
而後説外人「是より都へ御歸りおれとの御事にて候、是は思ひもよ
らぬ御哉、何く迄も御供とふそ思ひしに頼みても頼みなきは人の
心なり、微有怨あら何共なや候、扱御返事をばなにと申候べき不對
命之詞、單責復「みづから御供申、君の御大事に成候へ、留り候べし
答得斬哉、女「あらくことくしや候、たい御とより有が肝要にて候、又
丈夫之語、恐之、謂雖靜姫從、何大事之有、雖然當今之能々物を案するに是は武藏殿
時、外人指目亦頗可憚、故第不隨伴爲可の御はからひと思ひ候程に、わらは参り直に御返事を申候べし、先
可止而後察辨慶語氣、說出乘自己不是「夫はとも角もにて候、さらば御
義經主意、却是辨慶所恐、妙人慧眼「夫はとも角もにて候、さらば御
参り候へ、如何に申上候靜の御参にて候、上半對對靜姫、判官「いかに
靜、此度思はずも落人と成、落下る處に是迄遙々來たる心ざし返す
くもしんべうあり、さりながらはるくくの波濤をしのご下らん

日 本 華 文

事然るべからず先づ此度は都に上り時節を待候へ「扱は誠に我君の御談にて候ぞやよしなきむさし殿を恨申つる事のはすかしさよ前應うへすくも面目なうこそ候へ「いやくは苦しからず候唯人口を思召すなり御心替るとおぼしめしそと涙を流し申けり「いやどに角に數あらぬ身に恨みもなけれ共自説無恨却是恨絶痛絶是の舟路の門出なるに涙風も静を留め玉ふかどく兩用静字形容涙をながしめふしての神懸て替らじと契りし事も定めなや實や別れよりまさりて惜き命かな君に二度逢んとぞ思ふ行すへ別實可惜然不知生之最可惜也何則以欲生還君歸來之日也設欲再觀君之切而別之最可惜也悲現于言外與古歌所謂往昔君不惜生今日為君却憶生同一意味如何に辨慶靜に酒をすめ候へ如醉酒淡中有至味畏て候げにげに是は門出の行末千代ぞと菊の盃靜にこそめけれわらはの君の御別れ靜やる方あさにかきくれて涙にむせぶ計あり

日 本 華 文

や〜これの苦しからぬ辨慶旅の舟路の門出の和歌唯一さしとす、むれば靜姫為歌妓故戀戀其歌話以送其時靜の立上り時の調子を取あへず一語波頭の満所は日晴てみも是朝詠中句滿以比下義是にゑほしの候召れ候へ辨慶語〇靜姫為舞妓故戀戀其立まふべくもあらぬ身の袖うちふるも耻かしや靜靜姫靜語一句傳聞く陶朱公は勾踐をともなひ會稽山に籠り玉て種々の智略をめぐらし終に吳王を亡ぼして勾踐の本意をたつすとかや然るに勾踐は二度よをとり會稽の耻をす、ぎしも陶朱功をあすとか把類胡與義經されば越の臣下にてまつり事を身に任せ功名とみ貴く心のごとくあるべきを功成り名とげて身しりぞくは天の道と心にて小船に掉さして五湖の遠島をたのしむか、る様も有明一語の月の都をふり捨て西海の波濤に赴き義經御身の科の

かきよしを歎き玉ひ、頼朝も終にはさびく青柳の枝をつらぬる
 御契などかひ朽しはつべき極婉妙「たい頼め唯頼めしめちか原の
 さしもぐさ我世中にあらん限りは新古今集所載傳「かく尊詠の偽
 なくば、かく尊詠のいつりなくを、頓て御代に出舟の二字通上下
義經語上直接舟子船子共はやともづなをとくとくとく、す、め申せ
解纜幹旋有力を判官も旅の宿りを出玉へは、静はなくく、るぼし直垂ぬぎすて
 、泪にむせが御別、みるめも哀成けりく、「静の心中察し申て候、頓
 て御舟を出さふするにて候辨慶語、半微慰、靜「いかに申候從者「何事
 にて候ぞ語「君よりの御談には今日は浪風あらく候程に風浪二
後面疾風御逗留と仰出されて候從者語「何と御逗留と候や後
驚濤之精「さん候從者「是の推量申に靜に名殘を御惜みあつて御逗留と存
 候辨慶先づ御思案あつて御らん候へ大醫疾呼「先提、今此身に

加様の事は御運もつきたると存候一層論、留之不可、語其上一年渡
 邊福島を出し時は以の外の大風成しに君御舟を出し平家を亡ば
 し玉ひし事歴説、滅平氏今もつて同事ぞうし二層論、風浪不足、急御
 舟を出すべし末一語、對舟子「實に是は理りあり鬼憑語、德いづくも
 敵といふ浪の立さはぎつ、舟子共一懸字、貫波、浪舟子、是等「い
 くといふ塩につれて舟をぞ出しける段「荒笑止や風が、はつて
 候從辨慶、眼中看出「あの武庫山おろしゆづりはが嶽より吹おる
 寸嵐に、此御舟の陸地につくべき様もあし怪光景皆々心中に御祈
 念候へ雖爾、勇猛、竟不「いかに武藏殿鬼憑此御舟に「あやかし鬼が
 付て候あ、暫弁慶語「此種語、詠曲、常々、價、左様の事をば船中にては
 申さぬ事にて候、荒ふしぎや海上をみれば、西國にて亡びし平家の
 一門、をのく、浮び出たるぞや先風浪、而後風位、變、終來、一、隨、か、る時

日 本 華 文

節を伺ひて恨をなすも理り也いかに弁慶義經御前に候弁慶判官
 「今更驚くべからず口氣高弁慶一等」たどひ惡靈浪をなすも何事
 のあるべきぞ惡逆無道の其つもり神明佛陀の冥感に背き天命に
 しづとし平家の一類主上を始め奉り一門の月卿雲霞のごとく浪
 にかびてみへたるぞや語似不若落然自抑是は桓武天皇九代
 の後胤平の知盛幽靈なり軍驚然來荒珍しやいかに義經思ひもよ
 らぬ浦波の聲を知べに出舟のく知盛が沈みし其あり様に又義
 經をも海にしづめんといふ浪に浮べる長刀取なほしどもへ波の
 紋あたりを拂ひ潮をけたて惡風を吹かけ眼もくらみ心もみだれ
 て前後をばうする計あり銀下習其時義經少しもさわがせくう
 ち物扱持ちうつ、の人にかかぶごとく言葉をかどした、かひ
 玉へ心弁慶をしへだてうち物わざにてかかふまじと數珠さらさ

日 本 華 文

らと押もんで東方降三世南方軍叱利夜父西方大威徳北方金剛夜
 叉明王中央大聖不動明王のさづくにうけて祈りいのられ惡靈次
 第に遠ざかれは辨慶舟子に力を合せ御船を漕ぎのけみぎはによ
 すれば猶怨靈いしたひ來るを追拂ひ祈りのけ又引盤にもられ流
 れまたひく盤にもられおがれて是舟是鬼畢竟通三者説跡白浪
 どぞ成にける款乃一結有煙消日出不見人

椿說弓張月鶴龜復讎節

椿說弓張月曲亭馬琴著之。傳會古記錄所載爲朝大島放流後航琉球鎮其國亂云々事蹟。間出入正史最詳說琉球之風俗地理矣。馬琴名解字瑣吉。瀧澤氏。曲亭馬琴其號也。又有篋笠翁。乾坤一草亭。信天翁。著作堂等別號。通稱清右衛門。晚年削髮稱篋笠民。江戶人。世仕某藩。父名興義。馬琴其季子也。幼失怙恃。以多病去隱市。初從山東庵京傳。作稗史。後無幾與齊名。而其學殖富贍。則當時稗官者流比肩者蓋鮮矣。故其所作。結構偉大。古今無比。以明和四年丁亥生。歿于嘉永元年戊申十一月。壽八十二。所著稗史椿說弓張月。朝夷巡島記。里見八犬傳。開卷驚奇俠客傳。近世說美少年錄。玉石子訓。賴豪阿闍梨怪鼠傳。以下三百九十餘種。大概傳會古史古記錄。行事實於虛構之間。寓勸懲于遊戲之中。又尤精考據。雜著有玄同放言。燕石雜誌。篋笠雨談。

羈旅漫錄。羨交記等。稗史間亦往々交考證說。蓋亦學殖餘波所溢。齡過古稀。精力不耗。著書不復稿。下筆如流水。晚年失明。尚不廢述作。使其子婦代書之。如八犬傳第九輯是也。當時儒士龜田鵬齋嘗作馬琴塵筆塚記云。巧寫憂樂愁啼嬉笑怒罵之光景。使閨人稚子估客村農。不能不爲解頤酸鼻千般万般之態。此言評盡馬琴矣。蓋本邦小說家指不暇僕。其所長或在寫悲態。或在作謔語。或嬉笑。或怒罵。要皆備本色。然求其結構壯麗。諸態兼至者。則寥寥如晨星。獨馬琴寫憂樂愁啼嬉笑怒罵。凡人世所有許多大波瀾。莫不悉極其妙焉。不獨使閨人稚子估客村農感動不能措。亦使許多有眼孔文士喟然欲燒筆硯。其所作雖間非無疵瑕。要爲本邦稗史者流中第一等巨擘。馬琴常言。小說以勸懲之意誘婦幼者也。其文字不可偏古雅。亦不宜流鄙俚。故馬琴文章。折衷雅俗。自爲一體。不肯倚古人之門牆。然其極

日 本 華 文

卒生駢四儷六之癖、有奇極落常套之嫌、晚年之作最多其病、獨弓張月屬初年之作、文字自有一種疎宕之氣、本節尤輕妙、而曲盡悲哀歡笑之情、爲最不可及、

小雲時して雨やみにければ累る雲の薄づくま、に月こそ出ぬあかくなるかとおぼたしかは鶴は竊によるこびて、野伏等がたちかへらば後悔こ、またちがたじ名告かけてうたばやとおもい定るをりしもあれたちほちむかひの尾崎より、以下總從鶴、眼中看出たいまつの光りニツ三ツひらめきいづると見ゆし、有雨後見、星之趣とよめく聲のさわがしく、三人の野伏らがひとりたびいとを捉へつ、果是手をとり足をかいつかみ宙に引たて、喘ぎく走り來れば、阿公は王子をいそがしくかきおろして階の板をなかはをりたち來れるものは津嘉山の平瀬、仲井間の宜壽、古波藏の安樂ならずや、隨手拈出、三箇人名

日 本 華 文

時をうつさず振ぐんのはたらき賞すべしく、這奴いづこよりいけどり來つると、とへば三人もるともにかの旅客をはたと引すへ、晝だに人跡たへたる山中、何ものあるべうの思ひざりしが、おほせもだしがたければみなく、八方へてわけしつ、そが中に吾儕三人この山の尾のあなたなる、穗屋のほとりを徘徊すれば、うちにいひきの聲したり、それうとばかり火をおげてさしのぞけばこの壯俊前後知らずにうまるしたれば、矢庭に外面へひきすり出し、首をはねんどおもひしがねがふにまねなるものなり、活ながらこそいで、以使二孤復、尊所以、作者製出許多脚色もかけず、亦所とられし脛をよきかへさんとて小ひざを衝てた、まくすれどもどりの諸羽をぬはれし如く、押しすくめられたればあへぐのみに

日本文華

てせんすべあし、正是祖阿公はこれ聞き對平是を見て對くろ
やかなるはぐきをあらはしてうちわらひ、老奸婆 其のかづ缺け
たる祭のにへに神慮もおぼつかなかりしに、たちまち満足しつる
こと念願成就うたがひあし、まづそやつが面を見せよ、果是那
へばたいまつさしつくる、火光にがくのうしろより鶴はかいまみ
て大きにおどるき、阿公未認之先使鶴 おもひきやわが弟仇人のた
めに生ざられあへなくいのちのをはらんとは、兄はこゝにといへ
ばたにいはてふた、びつくぐと見ればおもへばくちをし、い
かてか弟をうたすべきと、ひそかに弓矢とりなほし、暫らくひまを
窺ひけり、そのとき阿公はちかく進みて、壯俊とおもてをあらはして
もろともにあちにおどるきつ、阿公與弟 阿公のまた阿々とあざ笑
ひ、なんぢはさきに誅罰せられし、毛國鼎が二男、龜あらずやと、開口未

日本文華

阿公先發言妙、蓋龜也未嘗一日問、ハセもあへず齒をくひし、はり、なん
ち未だわれを忘れず、われまたいかてか汝を思はず、れん、去年長川に
いくさ破れし、その日よりながらあふべくも思はねど、母のかたきを
狙ひ撃んとおもふばかりに、たも死なず、兄弟あちこちにかくろひ
つ、仇人のいのち長かれといのるのぞみをとげんため、眞是麻
之手一紙而しるし、あるに似たれども、汝がこゝにありとも知ら
曲尽切情、しるし、あるに似たれども、汝がこゝにありとも知ら
でげふやは、下めてのぼる山のけしきにいたくつかれ、やこひく
こと、天者地久此恨 天なるかな命なるかな、兄弟ひとつやどり、
ら、わかれ睡るども、兄のさめなん、近世村上佛山翁有詩云、雖可勉勞、向
節別れし日、かすのほを經ねど、こゝに弟がうたる、とも知らず、
たづね玉ふらん、處也、則又從骨肉上痛悼一番情交兼至 仇人のあり

椿説弓張月鶴復歸節

日 本 華 文

かをわが兄に告げまほし知らせまほしあしき心はもたかくに過
 世いかなる悪報にや欲使汝為惡不可為わが同胞の天神地祇に
 もにくまれけんおきし世界れ月も日もかくまで照し玉はぬかど
 一入骨傷心下誰不隨紙聲をふるはしまなみを睜りあしすりしてのい
 そたび走りか、らんとすれの推居るみたりを枷にかけられて泥
 にまみる、雨後の庭雲あし近くまだ晴れぬ晴字一辭兩用元近於謎
 幾倍うらみの毗血をそ、ぎはらわたをたつ孝子の怨言則阿公先
 き、かけてうち咳きあがまやかしましやこの阿公の王子のめ
 のど世とて時とてきみもろともにやつくしくどもおいたりど
 もなんぢらがなまくら刀うす皮一重きりたんや却冷笑冷罵何等苦
語來源反觀とてもかくても屠兒が羊なぐ思ひをさせんよりい
後面大悲哀きのお断ておさせよと、嚇殺いひつゝ、左右をみかへれをうけ玉は

日 本 華 文

るといらへもあへず平覇が引抜く刃のひかりに、嚇殺やよ待てし
 ばし手なくだしそと王子は急によびといめ、喃阿公、毛國鼎の國の
 忠臣、その子どもを弟へなくもうたせんいふびんなり、いのち助
 けて得させよと、王子救難吐辭慘斷人勝孝子をおはれむさびしさ
 の入つごにまれなる君命を耳にもかけず氣色をかへ、毛國鼎を忠
 臣なりとい何人が告げまいらせし、忠臣にもあれ逆臣にもあれ、彼
 のつみありて誅せられ、その子どもを君にあだせし爲朝に媚ひ
 へつらひ、あまつさへ阿公を母のかたきなんど、なきこといふて
 人をまよはすくせものなれば放しがたし、かれもこれもみな王子
 のをんだめあしかれとてうくいはんや、人こそをほけれこよいの
 にへに龜をたたるいにしへの龜の下部にませし吉瑞、いどけな
 いども君の君め、しきとをのたまふ、其言也吐其ものどもな

日 本 華 文

てもうよせし首をはねよと下知すればのがれかたな刀亦用得好の下に立つ龜がかいなを左右より引とらへて推なほせ平覇のうしろに立めぐり目さきへつきだす氷の刃をひらりとひいておりあぐれば急殺古廟の廂につる音して承接妙平覇がわきつば兵と射る極やじり四五寸あはれて叫びもあへずたふれけりこれはどをどろく安樂が二のやにのどぶを射ぬかれてのけさまにかしまるべの龜のたたりと身をひねりて敵のかたなをかいてりはやく宜毒がかうべをうちをどせば兄氏既許二賊矣宜毒之首宜鶴は半弓なげすて身をとらいついどび下るに急殺也あはやとおどろく阿公より龜のふしぎに我が兄のこゝにかくれて必死をすくひし事のおもむき問ふにいどなく此不可無おもひげすとばかりに兄弟左右にうちどかれて阿公をかにかき有疾雷之

日 本 華 文

致鶴はいさめる聲をかり立て名のらすとても龜が兄鶴をいよだ見も忘れ從昆弟上下語友誼然益二孤之於阿公けふはからずも谷かけなるきんじがかくれに宿りをもとめたるに留守せし童がうけ引かねば王子ありとい思ひもかけず然況為自つひに宿りをもとめかねて亦たちかへる道に迷ひてめぐりなくも天孫氏の御廟を拜したてまつりこゝに明くるをまつ折からあまたのふしらがつとひ來ることのやうを知らんために扁額のうらにかくれて一伍一什をかいまみたればとくに名のりて撃つべかりしが汝の多勢われの一人便りならねば黙止せしに所以卒能その徒のはしり去りてたよりあるに似たれども雨降るよぎていと暗し以卒能救王子に傷つけたてまつることもやあらんとたもたひて其弟傷之はからず弟が必死をすくふ皆これ天のたすくる所眞然眞然

椿説弓張月鶴復離節

日 本 華 文

亦是作者所爲にぐどもいかに脱すべき母のかたきと、くあのれ氏稱爲母のれ氏之譽、何母之名告れくとはらからがいきまき高くきるひか、れを阿公さはぐけしきもなく以主意いへばとていはる、ものかな、王子にきすつけたてまつらんとてもうよせしと、そらごとならん、汝らつもばかりも天孫氏の神裔をたうとみたてまつる心あらば、出處不定の爲朝に加擔して、王子を逐失ひたてまつらんや、われ元來國の忠臣、汝等が母を知らず、仇人およびなす證據やあるといひ、せもあへず鶴の腰なる短刀を抜きはなちて突出し、いかに阿公この刀をばみしれるならん、汝いぬる年南風原の城の水門をくぐり出で、脱去るとき、これに打ちかけたる銚劍のまがふかたなき母のかたみの解手刀、めぬきの黄金の鶴と龜是認仇之左券、又認骨肉之左券、最有關係物件、富藏河のほとりにて母新垣がうたれたまひし、亡骸見ればはらな

日 本 華 文

る兒と、這兒不知今日在那處、何國亦是在目前この短刀の失せたれば、ふれにますべき證據のあし、なんぢの母のかたきなること既に蒙雲が口より洩らせば、是等皆是大かたの知るといへども、虚實をさだめかねたりしに、うばひ去られし母の刀を、打ちかけられて疑念をはらすも、實になんぢが自業自得、真是自業自得、却是苦計熱情かくてもおた、びあらずおやと罵れは龜もまた引提し血刀とりなほし、老賊何の忠かあらん、何國是その身のつみをのがれんために幼君をとりたてまつり、山林にかくれ狗黨をあつめ、世を誣る人をあざむくくせもの、今立地にこれを討たず、誰か忠孝の人といふべき、何其王子をわたして刃をうけよと、いふ聲さへにかひくしく、うたばきらんとよせあふたり、阿公は證據をとられて、固其のがれんとするに詞なく、面色あかくなりあをくまり、却是取揚一番欺騙齒もあきはぐきくひしは

日 本 華 文

りてぬけあがりたる額髪の針の如くなるをそらさまに振りあげ
てにらまへたるまなこの光り星のごとく形容夜又般老婆筆挟は
のほの如き息を吻き故苦勝然也今は何をかつ、むべき、その短刀を奪
はんために假設富藏河のほとりにてはらみをんなをさしころ
し走り去りたるものいわれなり返りうちになせられそと名告り
かけつ、懐劍を閃りと抜て打かくるをいたりと鶴が受けとむる、
やいばの光りもろともに龜がめてよりうつ太刀を、いらひのけつ
、きりむすぶ老女に似げなき手練の太刀すぢ右をさ、いつ左を
うちついとも烈しくた、かへり、如一氣何成何圖是百鍊出來文字王
子いあつて、皆よりはいりありつ、彼此と立めぐれどもせんす
べなくなみだぐみたる聲をあげ鶴龜とやらんしはしまて、阿公は
やく逃げようし、狼亦是為後面大悲哀發局者狼いとあやうしととい

日 本 華 文

め玉へは側杖うたれ玉ふあとしきりに見かへる阿公より無不憤之
來發露たけくいさめる鶴龜も思ふ程にはうちかねたるやいばの際
に阿公は足をどはしてもへしさるたいまつ一度にかみけせば得寫
如火たちまちもどのやみとなりてうつ太刀さらに定かならず、迭
に氣息を伺ふて丁どうてのあとへ引きまたうつ白刃の空を切り
知らで目さきにつき出す刀尖に思はずも鼻をしわめて身をそら
し上節暗裏摸樣是有精彩文字只いたづらに追めぐりしばらく時を
うつせしが忽ちアッとたまぎる聲讀者殺まづ一人はうちとめたり
ど、如何いふは正しく阿公なり、さてハ弟はうたれしか、果然ばや我
が兄は手を負玉ふと、然耶果心あはて、仇人の聲を、慌哉慌哉是阿媼
豈能斬下得如斯猛烈しるべにはたど斬る太刀風の唯是慌矣故、雲さ
等語皆自此生出來得有一語下あらはれ出づる夜半の月隈なきかげ
へ吹きやはらひけん、

横説弓張月鶴龜復歸節

日本文華

ともろともに見れむざんや阿公の如文情王子をのけさまに引よ
して胸さかぐさと刺したるが今鶴龜がうちかけたる刃に左右の
肩をきられて流る、ちしをの泉の如し、等果は何兄も弟もこのあり
さまにおどろきあきれて目をあひし、者亦老大喫驚暗きに迷ひて
や阿公の、豈其迷於暗哉、王子を弑し奉れり、この淺ましきかな今こ
ゝに罪いと重き弑逆のうらみかさなる君の仇、亦添一天罰家私怨
おもひしらせんと、左右よりまたあぐる刃を見あげてやよや
まておたりの孫よ鶴龜よばいがいまわの懺悔あり、讀者は何等不果
然失しはらく息をつがせよといへば鶴龜あざわらひ、おいばれて
うつけたるう、以則讀者亦うくても吾儕をあざむくか孫とよばるゝ
覺はのあらずといへば阿公につことうち笑み、痛癢然しか疑がふ
のこどわりなりは、トめより汝等にうたるべうの思ひしが孫よ祖

日本文華

母よど名告りおはたどひ母の仇なりども、かくまでたけくうち
んや、是所以堅忍、結苦勝、今こそあかす、且が素生耳引たて、能もき
け、尙不失望、そもく我父にておのせし人の勝連の親方法司従一
品阿高と呼れて、國家によしある精神なりし、後此一節撫往語來、與前
情甚佳、犯せる罪ありて鬼界へあがさる、そのひろわが身の、且が枝
の姫松、此人亦有母もろともたすみなれし勝連を追放せられ、憂苦
にたへす母の身まかり、とが身ひとつにみとせへて、せめて配處へ
赴きて父につかへんと思ひたち泊の津より硫黄船よ、たよりもど
めて彼處へとたり父をたづぬれば悲し死かあるの春やみて世を
去り玉ふどきくにのぞみもたへはて、鬼界が島に浪のよれども
身はよるべあきつながぬ船さはれ、雄々しき性なれば、こゝまで
來たるおもひ出に、薩摩瀧へおし渡り、何にまれ一藝を習ひおぼ

椿説弓張月鶴龜復讐節

日本華文

て故國へかへらば用ゐらるゝこともやと膽太くも思ひ定めて大日本へ渡海しつ大隅國大泊ふたとせあまりさそらひて唯一神道の奥義をたづね便りにつきて肥后におもむき阿蘇の神社へ参詣してこゝましはらくたびねせしころかの明神のまつりのよみやにどかうどにかたらひよられいなにはあらぬを船の楫を枕のおだなるちぎりに若花亦羞ちて名告らす名も知らずあゝ見んまでのうたみどてをどこの差副の短刀をそがまゝとりてわれにおくり吾の亦ふどころなる巻軸を取出でて巻軸後面有物件をどこにおくりて果敢なくもおきわかれせし次の日にまれにきこへし故郷の風のたよりは赦免の沙汰あきびと船に便船してやがてぞかへる琉球國官府にきこたてまつればわが身はさらなりなき父が罪ゆるされて本領の三が一ツ北谷の間切を返し玉はり大國の

日本華文

神道をうけ傳へ來しものありとて託女の長になされしかば北谷の女王とたゞへられあまたの託女にかしづかれ按司にもます身の富貴に父が汚名をきよむるうれしさ樂みたちまち哀みの本といへばはづかしや日本の人と一トよさの契りたちまちみごもりて月をかさぬる身のはてはしのぶにもたしのはれずこの事もし世にきこたはば神につかふる掟にそむくと官家のたゞり脱れがたくて人知らぬむねをくるしめまたねははやく臨月に人への告げすうみおとせし玉をおさむく女子をいと不便にはおもへどもやしなはんやうあらざればある夜ひそかにかき抱きて北谷のただ村なる濱川の里にすて日本のをどこが贈りたる九寸五分の短刀をむつきのひもに結そへて心づよくいかへれどもなみだに路の去りあへずそのあすも又あさつてもそなたのそらのみうち

日本文華

あがめ何處の人にひらいたる夜の中犬にはまれなど、愛情思ひ
かねつゝ送る日にあまたのとしの経たれども、わすれがたき女
兒がこともとよりわれに託女の長、夫もつべきものならず不淫に
くらすの日本なるをどこへたつる操ぞと、思ふてさかりをおだに
過し、雖爾機亦自よる年なみに生れ得老、大膽いよ、愚にかへ
りて食る心いと深く、從孤獨過盛奪直接慾にまどひて中婦君と利
勇等が奸計にかたらのれ、賢明のきこゆましませし、王女をうしな
ひたてまつらんとして事ならず、毛國鼎に看破られて、未知毛國北
谷をおのれしが、利勇が扶持によつて都のほとりに潜びてをり、な
ほこりずまに中婦君の奸惡をたすけんとして、利勇等と謀しあひし、
民間なる赤子をぬすみて、中婦君の産み玉ひしといのせんために、
しのびく、に彼此を徘徊し、富藏河のこなたなる効原に病みふす

日本文華

女房が臨月なるをはや猜し、それが子供を、即在緬緬あざむきて藥
かへとてほとりをとほざけ、はらみ女が腹を裂きて、はらある赤子
を引出すに、是皆前諸節提起件々をんながいまはにいとをしみし、
短刀こそ此ものどもが名を知るよすがとありもせめ、未知其爲の
としおくべき物ならずと、これさへにうばひ去り、即是構成本節件
の赤子を利勇にわたして後に彼短刀をつらく見れば、見も忘れ
ぬ三十九年さきの秋、すてしむすめがむつきの紐へ、むすび着けて
のこしたる日本のおどこがかたみの一口、是證爲仇之左券、最有關係物件
紛ふやうなきめぬきの鶴頭、是二探命さて、わが手よ殺したる、孕
婦はわらの上より、すてしむすめにありけるあり、極悍婆娘落膽こ
はあさましきわざしてけりと、百たび悔ひ千たび悼めど、あせし惡
業とりもかへらず、隱隱の惡報は、かなしみ却て強慾をますな、かた

日 本 華 文

ちとなりしかば、あたよび三たび思ひかへすに、女兒が良人こそ定
かならね、既知其爲女兒、未知婿爲誰うばひし赤子の我孫なり、此ものよつぎの
きみに立られ、琉球王とならんには、女兒か非業の死に代て、亦もく
りあきさいひありと、果是極悍強、怒人心腸しおんをすれば未憑もしく、不
見秦政、誅其不韋乎その事の深くかくして孫が成長をまつほどに、曠雲か幻
術にてにわかよ國王中婦君も、おちじ日にかくれ玉へを、利勇は王
子をとりかしづき、南風原の城へたてこもり、牛角のいきほいを張
るものからはかくしくは寇をゆるたす、しかれどもどが孫の、王
子新主と尊敬せられ、すでにむとせの月も日も、どが手にこれを守
りそだつれば、身による年の惜からで、只孫が人とあるをよてば又
あやにくに、却深數倍、言下不覺真情露出、形狀莫不曲盡、可謂鍾有神内亂
によつて大臣利勇の爲朝にうたれし日に、汝はらからわれを逐ふ

日 本 華 文

て母新垣が仇人とよびかけ、前の中城の安司毛國鼎がふたりの子
ども鶴龜と名告りしときに、初知女兒爲毛國鼎之妻、而毛國鼎爲吾之女婿矣ふたりは孫とわ
が婿の名字をはじめて知る悔しき、嗚呼既遮莫この王子の龜鶴ら
が弟なり、曠雲亡びて孫王子が國をおまねく知るにいたらぬ、二人
の兄の従一品國舅國相の高位高官をきめんもいと易し、説き知
らさばやとおもへども、果能聽從大母之言乎否事急かれの告るによしなく、そ
の短刀を銚劍に、ねらいを外して打かけし、環りあふせもあらん
日よ骨肉のまことを告げ、王子のたすけになさんすと、深きてだて
の曉らぬ同類、自謂深暗、呼其逆矣さきに平霸安榮等が不思議に龜をいけど
り來たれぬ、そいろだつほどあつかしく、どが胸中を知らせんと
おもひながらいひよるすべのあきまゝに、その剛臆をみるみん
とて、かうべを刎ねよと下知せしを、まことと思へぬおさきこの王

日 本 華 文

子に見るに忍びかねて、毛國鼎の國の忠臣、復提出王子之言來その子
をもらをいかで誅せん、命をたすけよとといめたる年、血涙ヲ行いとも
ませしさがし、又稱其冷烈、真情可掬自然とあはれむ兄弟のまことはおす
におしがたく、白刃の下にありながら、われをのしる龜が勇敢、額
のおはひに身をかくして、弟を救ひし鶴が智畧、三孫賞これら未
だ數ならず、おやのうたきを討んとて、百折の艱苦を厭はず、あると
き、王女に供奉して、隙雲に生どられ、利勇がためにとりことなれ
ども、忠孝の志移らず、天の祐を得たれば、や、長川の敗軍、汝等兄
弟のみうされず、今亦こゝよ、これを見て、母の仇人とよせ、あはせし
勇士の廣言道理に稱ふ、そのけなげさに、身の奸曲を、唯見孫兒可愛、不見身之可吝
はづれの邪念の角も折れ、孫が導く、淺瀬川、おかきまよひに、よこり
きど、淵深之字、下得好はじめて曉る天罰は、尙寧王のたねあらぬを、王子と

日 本 華 文

稱して世をおさむき、王女爲朝の討死を、身の幸とよろこびて、その
殘黨をたばかりつぎへ、祭の費にかこつけて、人をころして、賊をあ
す、みやまの奥の深山樹の根が、かきおのが強悪を、細溪川に影見ぬ
て、清くながら、鶴龜が、造語甚佳、鶴龜清操、茲氏稱賢得無遺誤、忠孝よ、おもひくらがれ
い、今さら悔しくはづかしく、せめて罪惡を滅せんために、天孫氏の
御廟の前にて、王子といつゝる孫を、ころし、年たけたる孫鶴龜に、う
たれんと思ひさだめたれり、嗚呼亦、可憐火をかみけして、暗きに紛れし
かはかりしと知らざるや、眞是人之將死、其言也善者うたがのしく、影あかき、
月を、ともしに、これを見よ、わが生血と、王子のちしほと、ひとつにな
りて、骨肉のまことを、こゝにあらわしたり、ハブ毒蛇之名、にもませ
し、毒惡の祖母が、さんげをき、わきて、首をはねて、忠孝の名をおげ
家をおこせかし、唯見孫兒可愛、不見身之可吝みたり、の孫のみたり、あがら、いづれ

日 本 華 文

疎かにおもふにあらねど、復提此三孫來、觀其わが手にどしどし、
くみたるをさなきものは八しほます可愛さあまれどしかく、
復説至干幼孫愛之、最深而痛之最切者いひ知らさてさしころせし者いかにあまらな
へしひれいづこに刃をあてんどもおもひ定めず目にあまるかみ
だの甲夜のむらさめよりなほありそいげ身身の鏑を洗ひながさ
んすべもなし、女兒をころし又孫をふるして孫にうたるゝも因果
てきめんのがれぬ應報、自孫復説至身之事、悟因果應報之不可免、悟而尚
矣、なきて首をはねざるといひはげませども身いよとる息の下あ
るものがたりに鶴龜しをくく嘆息しわがはかたのおはばにて、
おとするよしをきくからに、疑者罵為賊、今者理為奪、いかてう刃をあ
てらるべき善惡邪正のみな人の心がらとひじりもいへどわが
同胞の忠孝におとこだましひをみかきあげても善にすゝむ道

日 本 華 文

もかく母のかたきとつけねらひしかたき、母の又母にて、傷心等世
をいつりのまうけのきみの亡き父母のわすれがたみ、現在弟に
あらんとは知らずもののがれぬ國家の刑法族滅縁座にいひとさ難
し、そもいかなればかくまでにさちなきうへにさちなきや父の忠
信、母の貞節世に知られず罪あて討れし親を親とも知らぬ弟
ハ王子のみなをおりしてあがらく父の名を下し、又鶴龜ハは、
たのおほばをうては棄てられても年ごろ親を慕ひ玉ひし母のた
めに罪をます、觀其入骨之狀、不見其重、良此筆獨
思ひ定がたし、やよ弟ならいゝね死するより外すべもなし、是まで
なりとらからが草を細に坐を占めて刺ちがへんとしたりし、
は阿公はあはぬしく見かへりて聲をはげまし、おろかり鶴龜
心にさかく迫るとも自殺することやはある、その短刀の日本ある

椿説月張月額復歸節

文 華 本 日

汝等が祖父のたまもの今これをもて阿公をうてば、則ち孫せもが
 手づから祖母をころすにあらず、われが夫の刃にかゝりてうた
 る、と知らざるか、通篇以一七首爲綱、鶴龜由此知其仇、又知其祖、母知
 父爲鎮西八郎君者、臣八町磯紀平次、而阿公以此七、
 首死、何等結構、何等布置、其細幼婦不可言、語有力、
 且れは外戚、しかも國
 賊、只一刀にして、已むとき、汝等は忠もなく、又孝もなきうろたへ
 もの、人情公道共にかけなん、無益の自殺を思ひといまり、ばいの首
 をはねざるや、ものいさ毎に漬る、文情、ちしほを見るに、忍ばれず、
 如火
露者唯恐不陷其肉、鶴龜の手にもてるや、いはを捨て、はらりと落
 今者唯恐見其血、
 ず、涙の露霜と、露字通用、消ゆるにも、又消たがたき、身を啣ちて、うち
 かなたる、いひがひあしと、阿公のひざすりよして、眼をみはり、汝等
 我をうたずして、瘡平愈することありとも、天亦われを許さんや、そ
 の短刀をどかきよして、刃を頂に押あてつゝ、自ら刎ねんとする折

百十

文 華 本 日

から、古廟の内に聲たぐく、何想是誰、祠中狐鳴、
 一語驚、鎮西八郎源爲朝こゝよありと名告り、玉へはこはく、いか
 殺入、孫おほはば、泣字見至、情便入、みあぐる、古廟の扉をひらかし、爲朝王
 女舜天丸の、松壽紀平治をいて立出給へば、三主二臣作者、
 列叙間有、
 鶴龜いと
 ちおもなげに、可前み迎へて再拜し、去年長川の敗軍に、大將うたれ
 玉ひぬと思ひ定めて、遺憾に堪へず、おかくもなげきたてまつりし
 に、王女もろとも恙なく、思ひがたざるや、しろの内におはしますこ
 と有がたくよろこばしくこそ候へとうやくしく啓すれば、爲朝
 につこと打笑みて、且れ島袋にて必死をまぬかれは、からずも王女
 にめぐりあひ、佳奇呂麻人に伴ひれて、姑巴島に赴き、日本にて出生
 せし、嫡男舜天丸及び心腹の老黨たりし八町磯紀平治太夫に再會
 して、彼島に春をむかへ、近ごろこの地にかへり潜ひ、越來山なる陶

権説与張月鶴龜復歸節

百十一

松壽がかくれ家と知らずして宿りを乞ひ、松壽が亡妻眞鶴が身後の貞節を感佩して、次の日件の山を出て、是皆前節所提起重數十言今也則僅々數語能均其首尾願末所謂寸祈願あるが爲にけふ此山へわけのぼりて天孫廟へ參詣有所長者し、主従こゝに通夜ごもり、夜風を凌がんために内より固くとざしたれば、人ありとの知らざるべし、かくて王子阿公が進退、鶴龜はらからがていたらく、これをたちぎ、これをかいまみ、因果の道理感ずれば、亦紀平治がいふよしあり、往古來今一筆用之馬琴眞能筆さるによつて阿公が先非をくひたる自殺をといむ、誠是非や紀平治願ふにまかして阿公が介錯許すと宣へ、紀平治の階を下りて、まづ鶴龜をうちまもり、祖父初見二孫亦阿公をうちまもりつゝ、嘆息し、昔の花の姿兒情態宛然いらせて、彼も老いたりわれもかく、如斯是之謂老いにければ名告らずば、その人なりとの得も知らず、いかに阿公鶴龜もよくたけ

日本文華

日本文華

かし、老女が今わのさんげものがたりに思ひあへずれば、われも亦四十餘年の非をぞ知る、阿蘇明神のまつりのよみやに、鶴龜のめぬたしたる、九寸五分の短刀を假初に贈りたりし、阿公がみそかをば、かくいふ八町礫なり、わかきときになさまぐの戀するは世の常おれど、われに定まる妻なきころ、おそのたはれをならねども、袖ふりはへしいな舟の綱手にむすぶあだし契りも、人目いぶせく名告りもあへず、與阿公所語同一事也而前後殊其様わかれの短刀妹は巻軸、これ再會のかたみにとどりかたしつゝ、起きわかれ家に歸りてたをやめが、おくりし物をひらきて見れば、琉球國の地圖にして、風俗俚言にいたるまで、事精細にしるしたり、初說明卷轉爲何物この奇なる事もありけり、わが先祖の琉球の人なるよしの亡き父の物がたりにて、きよたれども、書きもといめし物のあらず、彼のたをやめ、何人の、

文華本日

女兒なるらんきかまほしと思へば僅に四五日へて、ふたぶ阿蘇へ赴きしが、それかこれかと人にも問へず、たづねめぐれどたづねあわず、一ト夜の契りと思ひたは、年経て後に八代と、呼ばる、女を妻とし娶り、浮浪のたつきなきまゝに、木綿山に山居して獵夫とありし幸ひ、八郎は曹司に値遇したてまつり、九國を管領し玉ふ程に、やがて近従に召おかれ、二十八騎の第一と世にも人にも知られしは、眞にこよなき面目也、しかるに八郎は曹司の君父の仰せかしこみて、放せし鶴をとり、なんために、潜かに琉球へ赴き玉ふに、案内知つたるものはあらず、こゝに紀平治がはからずも、年來おさめし彼處の地圖の、主君の役にたちし夜玖島役夜玖邦音相通、故作者委合成趣、彼のみちしるべに俱し玉へば、朋輩にもうらやまれ、鞭く鶴をたて歸りし、皆是主の忠孝を、神の憐み玉ふによれど、時にとりては阿蘇山にて、地圖

文華本日

を○お○く○り○し○た○を○や○め○が○い○さ○は○あ○り○ど○は○人○に○も○い○は○れ○ず○結○び○捨○て○
た○る○縁○し○を○こゝに、紀平治懷舊話一段、文字有情有色、白頭翁思ひ出れば、
短○刀○の○め○ぬ○き○を○更○に○孫○と○し○見○ん○ど○は、是言邪否々悲也、是悲耶否々知
ら○で○ぞ○遺○す○た○ね○島○と○秋○津○洲○根○に○二○人○の○妻○三○人○の○孫○が○善○惡○邪○正○を○
身○に○知○り○涙○に○く○れ○は○ど○り○あ○や○し○き○な○し○を○い○さ○ゝ○め○に○名○告○る○も○
昔○恥○し○と○説○知○ら○す○れ○は○阿○公○は○さ○て○は○そ○の○夜○の○み○そ○か○を○い○お○ん○身○
な○り○し○か○も○ろ○ど○も○に○花○も○實○も○あ○き○老○樹○と○ち○ひ○ど○つ○根○に○よ○る○相○生○
の○あ○ふ○は○別○れ○の○は○じ○め○な○り○ど○も○い○か○て○面○を○あ○は○さ○る○べ○き○さ○は○あ○
れ○後○の○夫○に○あ○は○ね○は、應前對後耶、只是のみがうしろやすし、雖爾家
家○節○自○曲○れ○る○木○に○も○花○ぞ○さ○く○僻○め○る○も○の○に○も○ま○ふ○と○あ○り、妙言又
憐○ま○れ○ず○と○昔○の○よ○し○み○に○こ○の○世○の○暇○玉○は○し○て○孫○が○心○を○や○す○ら○へ○
玉○へ○と○た○な○そ○こ○を○合○す○れ○は○鶴○龜○も○か○ね○て○そ○の○名○を○聞○及○べ○る○八○郎○

按司の股肱の老黨八町礫の紀平治ぬしは、わがは、かたのおほぢ
 なりしか思ひげけなき見参かなど、名告るは親の泣よりにて、一語括全
篇 王女舜天丸陶松壽も奇耦を感嘆したりける 輕々數言収全篇不費力

雨月物語僧西行謁白峰陵條

曲亭馬琴椿説司張月有源爲朝謁白峰陵一節一篇結構實取粉本
 于上田秋成所著雨月物語矣秋成浪花人傳言爲郡山士人生田傳
 八郎之子傳八殺僚友亡命匿于浪花倡家其所殺士人之子二人追
 跡復讎與闘北中嶋宗禪寺馬場敵我皆死當時戲曲演之題曰復讎
 宗禪寺馬場至今劇部時演之傳八既死其所昵倡家之女生遺腹兒
 是爲秋成育母家冒其姓上田既長移京師住於南禪寺中恒慙身處
 汚下鬻家業獲千金盡以換書籍栖逸屏迹專攻我邦之學最長于和
 文及和歌興到則一日數十百篇言出于口皆成文性狷介寡合業醫
 不售爲書肆作小說以資餬口号餘齋又無腸居士文化四年歿歲七
 十八所著雨月物語實爲絕世好文字本篇尤妙今表出之使人知馬
 琴以前自有箇好文字

日 本 華 文

弓張月爲朝謁白峰陵一節幽渺清迥實爲一種好文字然其結構其文字實皆是學雨月者唯其妙于換骨奪胎之術是以巧弄讀者使不得窺其斧鑿之痕但取彼是並誦細咀嚼其真味則雖馬琴文非不巧妙到底不免爲東施之鑿邯鄲之步矣乃其議論之的切痛快一層深一層亦雨月上弓張月一等矣

馬琴實襲雨月矣然卒不欲爲秋成之王莽也故其叙爲朝到新院廟下處忽點月光射廟柱插入雨月所揭西行國詩暗示其粉本所在用意周到後人之襲前人宜當如斯馬琴不恥爲名家

逢阪の關守にもるされてより秋こし山の黄葉見過しがたく濱千鳥の跡ふみつくる鳴海瀉ふじの高嶺の煙浮島が原清見が關大磯小磯の浦々紫匂か武藏野の原鹽竈の和ぎたる朝氣色象瀉の屋が管屋佐野の舟梁木曾の棧橋心の留まらぬ方ぞなきに猶西の國の

日 本 華 文

歌枕見まほしとて仁安三年の秋ハ後がちる難波を経て須磨明石浦吹風を身にまめつも行々讃岐の眞尾坂の林といふに暫く節をといむ草枕はるけき旅路の勞にもあらで觀念修行の便せし庵なりけり自東海而與羽自與羽而東山而離波而須磨明石叙西行遊跡諸勝文字何等流麗何等快暢後面忽覆爲一路極極涼極極幻怪的文字猶如海此の里近き白峰と波平穩觀者神暢氣和不知須叟有波堅潮吼鯨鮫出沒之惧大凡作極奇極怪文字起手不可缺此平穩工夫

いふ處にこそ新院の陵ありと聞て拜み奉つらばやと十月はじめつかた彼の山に登る漸入松柏ハ奥深く茂り合ひて青雲のたなびく日すら小雨そぼふるが如し深山光景荒涼摸樣確如於隻句中與下更夜判別塞路等兒が嶽といふ峻しき峰背に聳たちて千仞の谷底よ許多語上比竟如何兒が嶽といふ峻しき峰背に聳たちて千仞の谷底よ

り雲霧おひのぼれば咫尺をもをばつかなき心地せらる松柏蒼翠晴天猶疑雨乃奇峰吐雲咫尺難辨樓閣懸崖滿山皆鬼氣使人毛骨森堅○是西行眼中看出 木立わづかにへだてたる處に土うつだかく積たるが上に石を三かさねに疊みあしたるが荆

日 本 華 文

棘○薜○蘿○に○埋○も○れ○て○う○ら○か○な○し○き○を○こ○れ○な○ん○御○墓○に○や○と○心○も○か○き
 く○ら○ま○さ○れ○て○更○に○夢○現○を○も○わ○き○が○た○し○惘然恨立是痛悼徹骨光景
 の○あ○た○り○に○見○奉○り○し○の○紫○宸○清○涼○の○御○座○に○朝○政○き○こ○し○め○さ○せ○給○ふ
 を○百○の○官○人○の○か○く○賢○き○君○ぞ○と○て○詔○恐○こ○み○て○仕○へ○ま○つ○り○し○稱其盛德寫得
意忽折入崩後荒涼來何等筆力何等自在可見弓張月百官連紫袖云々句是明々學此篇者然彼唯寫其榮華光景是併及其盛德臨政覺追慕轉深竟風弓
 一○着○近○衛○の○院○に○ま○し○て○も○鏡○姑○射○の○山○の○瓊○の○林○に○し○め○さ○せ○給○ふ○を
 思○ひ○き○や○麋○鹿○の○か○よ○ふ○跡○の○み○見○て○詣○づ○る○人○も○な○き○深○山○の○荆○の
 下○に○神○が○く○れ○給○は○ん○ど○は○無奉仕臣僚最傷心語 萬○乘○の○君○に○て○わ○た○ら
 せ○給○ふ○さ○へ○宿○世○の○業○と○い○ふ○も○の○い○お○そ○ろ○し○く○も○添○奉○つ○り○て○罪○を
 逃○れ○さ○せ○給○は○ざ○り○し○よ○と○世○の○は○か○な○さ○を○思○ひ○續○け○て○涙○湧○出○る○が
 如○し○讀者須要與弓張月十普君主云々句比較上西行是願德僧人悲新上院之心非新院之爲作者寫其胸中照宿業等語做下後段調帝魂觀染上
 も○す○が○ら○供○養○し○奉○つ○ら○ば○や○と○御○墓○の○前○の○た○い○ら○か○な○る○石○の○上○に

日 本 華 文

座をしめて經文徐に誦しつゝもかつ歌よみて奉つる松山の浪の
 けしきのかはらじをかたかく君なりまさりけり猶心怠らす供
 養す露いかばかり袂に深かりけん是露日は入りし程に山深き夜
 のさま常からね石の牀木の葉の衾いと寒く神清み骨冷て物とは
 なしに凄じきこゝちせらる是等光景即有是等感觸大膽置大正覺者亦
貴夢中快樂妻子珍寶及王位不是身後伴侶抑出三界之火宅到九品之淨土亦非所成得容易等語忽縱把迷求以下見此思彼以帝王之尊猶且如斯况吾人不是數中人等歎欲流涕模樣開 月は出でしかと茂きかともとは影を
漏さねば有月矣不是開夜樹陰森則不是月 あやなき闇にうらぶれ
 て眠るともなきにまさしく圓位圓位とよぶ聲す眼を開きてすか
 い見れば其形異なる人の背高く瘦衰へたるが顔の貌着たる衣の
 色綾も見えて匪言異狀人物其面親其衣彩 こなたに向ひて立るを西
 行素より道心の法師なれば恐ろしともあくてこゝに來たるれ誰

雨月物語僧四行説白峰隆條

文華本日

そと問ふ彼の人のいふ先によみつる言の葉の返り言聞ゆんとて見
ゆるかな嬉しくもまうでつるよと聞ゆるに新院の靈なることを
知りて地にぬかづき涙を流していふさりとていかた迷はせ給ふ
や濁世を厭離し給ひつることのうらやましく侍りてこそ今夜の
法施に随縁し奉つるを現形し給ふありがたくも悲しき御心に
し侍りひたふるに隔生即忘して佛果圓滿の位に昇らせ給へど誠
をつくして諫奉つる語々婉曲而諷諫之意益然溢紙厭離濁世隔新院呵
々ど笑はせ給ひ汝知らず生即忘等語與下前所點出宿業云々昭應太佳新院呵
なす業なり生てありし日より魔道に志を傾けて平治の亂を發さ
しめ死して猶朝家に崇をなす見よくやがて天が下ふ大亂を生
せしめんといふ西行此詔に涙をどいめてこは淺ましき御心はへ

文華本日

を承へるものかか西行亦深君は素よりも聰明の聞へましませば
應百官王道のことどりのあきらめさせ給ふ試に討ねまをすべし
そも保元の御謀叛は天の神の教へ給ふことわりには違はトとてお
ぼし立せ給ふか又みづからの人欲よりだばかり給ふか詳にのら
せ給へど奏す先稱揚一番而後難詰又一其時院の御けしきかはらせ
玉ひ汝聞け帝位人のきはみなり新院更亦若人道より亂す時
は天の命に應じ民の望に順ふて是を伐つ民望之字抑永治の昔犯
せる罪もなきに父帝の命を恐みて三歳の體仁に代を禪りし心人
欲深きといふべからず隱然於下百僚仰賢君云々句上○若々正理讀來覺
體仁早世ましてハ朕が皇子の重仁ころ國しらすべきものをと朕
も人も思ひをりしに美福門院が妬みにさへられて四の宮の雅仁
に代を篡はれしハかき怨にあらずや重仁國しらすべき才あり

雨月物語僧西行謁白峰隆條

文華本日

雅仁何らのうつゝ物ぞ人の徳をばらばすも天が下の事を後宮にかたらい玉おは父帝の罪なりしさを世にあらせ玉おほは孝信をよもりてめ色にも出さしりしを西行胸中之秘、新院舌鋒一々、扶出、無餘、慈覺、作者、前點、出、百、條、仰、賢、君、云々、崩れさせ玉ひてはいづまてありあんと武きこふる語、益、有、光、輝、上、ざしを發せしなり臣として君を伐つすら天に應ト民ののぞみにしたげへは法、應、前、論、密、周八百年の創業となるものを胸、裏、既、有、周、室、矣、故、起、手、跡、先、點、出、天命民望之字至此徐說周室論法極佳雖、然、是、竟、新、院、點、所、以、喚、西、行、之、一、拾、まいてはるべき位ある身に於て牝鶏の晨する代をとつて代らん道を失ふといふべからず汝家をいて佛に煙し未來解脱の利慾をねがふ心より人道をもて因果に引入れ堯舜のおしへを釋門に混じて朕にとくやと御聲あら、かにのらせ玉決、然、叱、西行いよくおそるゝいろもなく座を進みて君がのらせ玉院、去、處は人道のことわりをかりて慾塵論、人、慾、是、を、

文華本日

のがれ玉西、行、亦、深、とほく辰且をいふまでもあらず新、院、說、唐、山、朝、舊、事、皇朝の昔譽田の天皇兄の皇子大鷦鷯の王をおきて季の皇子堯道の王を日嗣の太子とあし玉お天皇かみかくれ玉ひては兄弟相もすりて位に昇り玉はず三とせをわたりても猶果つべくもあらぬを堯道の王かかくられ玉ひて、豈久しく生て天が下を煩ひしめんやとてみづから寶算を斷たせ玉おものから罷事あくて兄の皇子御位に即せ玉お是天業を重んじ孝悌をよもり忠をつくして人慾なし無、人、慾、堯舜の道といふあるべし好、的、例、○、新、院、以、儒、道、來、我、亦、以、儒、道、應、之、本朝に儒教を尊みて専ら王道の輔とするは堯道の王百濟の王仁をめて學ばせ給ふをばしめなれむこの兄弟の王の御心ぞ即漢土の聖の御心ともいふべし極、合、又周のはしめ武王一たびいかりて天下の民をやすくす臣として君を弒すといふべからず仁をぬ

日 本 華 文

すみ義を盗む一夫の紂を誅するありといふ事孟子といふ書にありと人のつたへに聞侍るされば漢土の書の經典史策詩文にいたるまで渡さるるはなきにかの孟子の書ばかり未だ日本に來らず此書を積て來たる船の必しも暴風にあひて沈むよしをいへりそれをしていかなる故ぞと問ふに我國は天照すおほん神のはつぐにしろしめしより日嗣のきみ絶る事なきをかく口賢しき教成つたへなば末の世に神孫を奪ふて罪あしといふ敵も出づべしと八百よろづの神の惡ませ玉ふて神風をおこして船を覆し玉ふときく

是本邦學者之陳說作
者點化來爲西行之語 されば他國の聖の教もこの國土にふさはしからぬことすくなからず且詩にもいはざるや兄弟牆に鬩ぐとも

外の侮を禦げよと
議論進一層○新院論
據儒道故引用經語 さるを骨肉の愛をわすれたまひあまつさへ

又一院かみぐれ玉ひて
廢 殞の宮に御肌膚も

日 本 華 文

いまだ寒いさせ玉いぬに御旗かひかせ可未かり立て室祚をあらそひ玉ふは不孝の罪これよりはなはだしきあらう

無地
上 天下の神器なり斷案 人のわたくし人をもて奪ふとも得べか

らぬことわりなるをたどへ重仁王の即位は民の仰ぎのぞむ所なりとも徳を布き和を施し玉いで道ならぬみわざ冊旌張風をもて

代と亂し玉ふときいきのかまて君をしたひしもけかひ忽怨敵となりて本意をも遂げ玉いでいよしへより例あき刑を得玉ひてか

るひなの國の土とならせ玉ふなり一層又一層辨
盡又下鉄案 たいく舊き

警をわすれ玉ふて浄土にうへらせ玉はんこそ願はまほしきみこ

るなれと願宿業
之字 ばいかることなく奏しける院長き息をつかせ

玉ひ今事を正して罪をさかことわりなきにあらず院動兵之車新さ
院亦悔矣

れといかにせん新院之憤恨實在此一節前數節不過乘
興申前怨讀者看本節論法轉綴密處 この島に請ら

雨月物語西行謁白峰院條

日 本 華 文

れて高遠が松山の家に困しめられ日に三たびのおもひのすゝむる
より射下西行無事只天とふ雁の小夜の
枕におどづる、をきけの都にや行くらんとなつかしく曉の千鳥
の洲崎にさわぐも心をくだく種となる鴉の頭は白くなるとも都
には還るべき期もあらねば定て海畔の鬼とならんづらん海隅之
亦甘ひたすら後世のためにとて可見新院亦為身後之計者是五部の
大乘經をうつしてけるが貝鐘梵鐘の音もきこぬ荒磯にといめ
んもかなし附木附草現於眼前せめては筆の跡ばかりを洛の中に
入れさせ玉へと仁和寺の御室の許へ經にそへてよみておくりけ
る濱千鳥あとのみよこにかよへとも身は松山に音をのみぞ鳴僧
感概一しかるに少納言信西がばからひとして若し呪咀の心にや
と奏しけるよりそがまゝにかへされしぞうらみなる恨根いにし

日 本 華 文

へより倭もろこしどもに國をあらそひて兄弟敵とかりし例ハ珍
らしからねど罪ふかき事かちと思ふより惡心懺悔のためにとて
一腔熱血如潮漲來明々自寫しぬる御經なるをいかに支ふる者あり
とも親しきをはかるべきのりにもたがひて筆の跡だも納れ給ハ
ぬ叙慮こそ今ハひさしき懺新院不吝悔者實激之矣一
所詮此經を魔道に回向して承接入聖道恨をはるゝさんと一寸ぢ
に思ひ定めて指を破り血をもて願文をうつし經と、もに志戸の
海にしづめてし後は人にも見えずかかどちこもりてひとへに
魔王となるべき大願をちかひしが目彷彿如見朱顏暉はた平治ハ亂
ぞ出で忽勾入平治之亂何等筆力俄然大呼先提綱領まづ信賴
が高き位を望むおごりの心をさそふて義朝をかたらはしむ彼の
義朝こそにくき敵なれ又提綱與前同一句法一筆說信賴隨說義父

爾月物語付西行説白峰後條

文華本日

の爲義をはしめ同胞の武士の皆朕がために命を捨去に彼れ一人
朕に弓を挽く爲朝が勇猛爲義忠政が軍配に勝色を見つるに西南
のかせにやき討せられ叙正史白川の宮を出てしより如意が嶽
の嶮しきに足を破られあるひと山賊の椎柴をおほひてあめつも
を凌ぎつひに擒はれて此の島に謫られしまでみな義朝が姦しき
計策に困しめられしなり又說新院亦會即忘隔生矣但其經典不聽入洛再
爾起前怨欲盡珍其難也補此數句これがそくひを虎狼の心に障化し
來其情入神○是所以該朝可憐吾因乘之也信賴が陰謀にかたらはせしかば地祇に逆さ罪武
に賢からぬ清盛に逐討る言長武義朝爲不武清盛かつ父の爲義を弑
せし報偪りて家の子に謀られしは天神のたゞりを蒙りしものよ
天地所不容新院不言是吾崇妙又少納言信西いつねに已を博士ぶり
て人を拒む心の直からぬこれこそかて信賴義朝が讎となせし

文華本日

か言彼能拒人吾因つひに家を出て、宇治山の抗にかくれしをは
た探し得られて六條河原にかけらるるれ經をかへせし諛言のつ
みを治めしなり若々有照應それがあまり應保の夏の美福門院が
命をせまり長寛の春の忠道をたゞりて朕も其秋世をさりしかど
猶噴火さかんにして尽きざるまゝに終に大魔王となりて三百餘
類の巨魁となる朕が眷族のなすところ人のさいはひを見てはう
つしてわざわひとし世の治まるを見ては亂をおこさしむ只清盛
が人果大にして親族氏族ごとくく高き官位につらかりおのが
まゝなる國政を執り行ふといへども重盛忠義をもて輔くる故い
まだ期いたらず義朝虎狼心信西拒人皆可乘之際平氏獨有重盛之賢故
汝見よ警策平氏も又久しらじ雅仁朕につらかりし程いつひに報
かべきぞと御聲いやましに恐しくきこゆけり鬼氣入西行いふ君

文華本日

かくまで魔界の悪業につかされて佛土に億万里をへだて玉へ
 きた、びいはじとて結隔生即忘佛只黙してむかひ居たりける陣論
 漸交兩ときに峯谷もすりうごきて風はやしを僵すがごとく沙石
 を空にまき上る後面一段精采一段幻怪先置懸雲落一向而後發之水
 那起一陣風起處星月光輝之下大吼了一聲忽地挑出一隻雲生從龍風來是
 文同法一見るく一團の陰火君がひざの下よりもへ上りて山も谷も
 晝の如く明かなり光の中につらく御氣色を見たてまつるに從
 行眼中朱をろぎたる童顔におどろの髮膝にかゝるまで亂れ白
 き眼をつりあげ熱きいきを苦しげにつがせ玉前唯際麗叙去鬼氣
 基諦認大阿修羅王御衣のかきいろのいたうすびたるに既說盡
 全形即有一段光彩顔貌又
 叙其衣彩亦射前手足の爪のけものゝ如く生ひのびて及從衣彩さな
 說衣彩不分明手の爪のけものゝ如く生ひのびて及從衣彩さな
 ら魔王のかたちおさましくもおそろし狀盡大そらに向ひて相摸

文華本日

々々々々叫ばせ玉波又ふと答へて驚のごとくの化鳥かけ來り鳥怪
 不解其為まへに伏して詔をまつ院かの化鳥にむかひ玉何ぞは
 何者却妙まへに伏して詔をまつ院かの化鳥にむかひ玉何ぞは
 やくしげもりがいのちをとりて雅仁清もりをくるしめざる化鳥
 こたへていふ上皇の幸福いまだ盡きず重盛が忠信ちかづきがた
 し今より支干一周をまたば重もりが命數既に盡きなん彼れ死せ
 ば一族のさいはひ此時に亡ぶべし院手を拍つてよろこばせ玉ひ
 かの讎敵ごとく此前の海に盡すべしと此弓張月亦有與御聲谷
 峯みひいきておさましさいかべくもあらず魔道のおさましきあ
 りさまと見て與佛果回涙しのぶにたへず僧人かたふび一首のう
 たに隨縁のこゝろをすめたてまつる隔生即忘よしや君昔の玉
 の床とてもかゝらん後は何にかいせん利も須陀もかはらぬも
 のをど心おまりて高らかにうたひける忽點出國詩一御慰新院醒悟

日 本 華 文

作的人照應惡心賊侮等句兼此のことはをきこしめして感させ玉うや
 うなりしが御面も和らぎ陰火もやうすくきたむくほごにつひ
 よみかたちもかきけちたるごとく見えずなれば這般大波瀾從容
 収來不費力大怪
 是及木書高野山紀事而較拙取去怪化鳥もいづち去けんあどもなく鳥亦不
 於十日あまりの月は峯にかくれて木のくれやみのあやなきに夢
 路にやすらふが如し超然止使入神暢○不直下南柯一夢等語神韻自程
 かくいさのめの明けもく空にあさざりの聲をもしろく鳴きわた
 れば山中清曉光景○馬琴則寫為朝醒覺時狀況用雁かさねて金剛經一
 過月沒雨滴點面等摸樣脫化極妙亦可謂能手矣
 卷を供養したてまつり山をくだりていほりにかへりしづかによ
 もすがらのこといをも思ひいづるに平治の乱よりはじめて人々
 の消息年月のたがひあければ筆さかくつしみて人にもかたり
 出でず符過去既其後十三年一周支を経て治承三年の秋自過去及未來
 處幹旋不費力

日 本 華 文

平の重盛やまひにかゝり世を遊りぬれば平相國入道君をうらみ
 て鳥羽の離宮にふめたてまつりかさねて福原のかやの宮に困し
 めたてまつる未來亦一有驗頼朝東風に競ひおこり義仲北雪をはらふ
 て出づるに及び看他句平氏の一門ごとく西の海に漂ひ遂に
 讀岐の海志戸八島にいたりて眼前武きつはものどもおほく菴魚
 のはらに葬られ赤間が關壇の浦にせまりて幼主海に入らせ玉へ
 ば軍將たちも残りなく亡びしまて露遣はざりしぞおそろしくあ
 やしき話柄なりけり史實其事其後御廟の玉もて彫り丹青を彩
 りなして御稜威を崇めたてまつる彼の國にかよふ人のかあらず
 幣をさゝげて齋ひまつるべき御神なりけらし局要自不可欠一箇馬
琴亦疑之矣說彰廟鎮祭結新院之局亦自不可欠一箇馬琴亦疑之矣可見弓
 張月一々嬰秋成之故智但此篇紀事從西行所見聞立筆故其說史止於平氏
 之末路弓張月則為爲朝及其子孫豫叙其前
 途者故其所記遺及頼朝頼家等之事跡也

兩月物語借西行記白降陸徐

武將感狀記兩四郎左忠戰條

武將感狀記不詳其作者或云熊澤蕃山著之未知然否其文章叙言

叙事渾不存一片冗語而所當有則莫不有所謂簡明是感狀記長處

此時甲斐の師源君を追こと猶急なり本籍紀美形原之役遂及兩鳥井

四郎左衛門内藤四郎左衛門これを兩四郎左と號す二士共に源君

に從て引けるが鳥井此体を見て内藤に向てとれは此に陥とめ敵

をふせぎて討死せん貴方の殿を助て退れよと云内藤危きにのぞ

みて命を殞す其處也といへども貴方は我より少し未久く殿の

ために忠義を尽されよ今日の討死は我任なりとて言語眞率素朴純

引返さんとする處を鳥井内藤を押といめ忠義を論ば貴方と我

と同一然れ共我すてに言を出せり言を喰むは士の道にあらず可

說士道此風貴方と我と共に討死せんは是殿を棄るなりと制し尙

日本文華本

日本華文

れば内藤義におかれてこれを可く味方此に捍ぎ彼にさへ處々に
て闘死する其ひまに源君鹽市口七八町になりたるとき甚危急な
りけれ内藤其子彌九郎に謂て曰汝殿の御命にからんや否や
彌九郎が曰諾是のぞむ處なり内藤我返して討死せんことは易け
れ共殿に從へる者皆若武者なりこの處はたい恙なく引取を善と
す若武者血氣剛ければ北るを恥とせん我討死せば殿かならず危
からん返す處ハ此地なり返す事を知て地を知らざるハ利あり此
こそ拒ぐの地かれといさむれば重疊說下彌九郎其詞の下より即
引返す數字見不老踏踏内藤かへりみて愁る色あり果是當時情彌
九郎競ひかゝる敵に馳合せ撞卻け遂に此にて討れたり源君退得
て濱松の城に入玉へり夏目長右衛門之忠死哈多人口至鳥井内藤之

全池田市兵衛話往事條

寺澤廣高の家に池田市郎兵衛と云ふ者あり、度々の戦功を累て首
供養したるほどの武士なりしが、中略池田いづれの所の戦にか、後殿
をして引取事あり、見知りたる者、田の畔に腰かけて居たりけるが、
池田を見て、そこを御通り候、池田殿か、重手を負て退く事ならず
候、助で賜らんやと、詞をかくる、弱鳥池田心得たりとて、我馬に抱き
のせ、馬の口を取つて引退く處に、投擲敵三人追つかけたり、池田踏留め
て一人を撞斃し、二人を追拂ふ、長句短句錯落如其の後付慕ふ者も
なくて本陣に歸る、此の士武名あるに由て、後黒田甲斐守長政に仕
へぬ、長政件の事を聞て大に感稱す、長政一日廣高を訪て閑話に及
ぶ、池田を呼出し、かやうに強きはたらきをしたる人なり、御存じか
と問ひ、に、廣高、拔群の戦功をも常に自衛ふ事を不仕者もへ承

日本文華

日本文華

いらす候、池田人品從廣高よくこそ語り出されたりとて、悦ばれけ
るに、池田仰に付て、恥入候、其の時助けんや否やと申す聲を聞て、こ
の難儀ある事かなとまづ驚き候、提一句誓敵の跡を慕ひ身方の續
かず、捨殺したりとも知る人のあるまじ、聞かぬ體にて打過ぎんと
い存じながら、我こそ後殿と思へ、萬一我よりあとに残りたる士あ
りて、此者を助けたらむ、二度男の立られまじと思ひ返し、毀譽亦名
説是非なく助け申候と云ふ、叙池田言語皆作綱目叙曰就仰恥入候曰難
遂至一云々宛轉說出端腔長政蓋藏なき心中、百人の首を斬より、卻
て難しと讚美せらる、池田次の間へ出たりければ、人を餘りありの
ま、なる返答かな、其の時の貴殿の胸中、誰か知る人の候べきやと
云ふ、池田我れ若き時より一つのたしきみの候、假初にも表裏なる
言行あるまじきとの念願たるに由て、口に虚を言はず、身に偽りを

行はず候、只今兩將の御前よて少しも欺き申さば、心に恥る處に候
と云、此心付其の高義正操、世人の及ばざる處なり、論贊一、句、讀器
如千言在筆下

茶根百事談米村權右衛門對吏條

茶根百事談署無荒逸士纂錄、未詳爲其何人、分類記天正元祿以后
將士之事蹟、其文章真率有味、

米村權右衛門の大野修理亮治長が草履取なりしが、大坂一亂の前
にとり立て士とあしたる者あり、修理亦有眼識、非才器勇力ありけ
翻々才子之倫れ、治長が恩顧よのつねならず、大坂没落の後、米村治長が遺言を
受けて、密に其の小女を養育して、匿居たりしを、囚て江戸に到る、殿
中に於て大坂の金銀財寶を問る、に知らずと對、汝修理が寵士な
り、何ぞ不知と謂んや、知らずと云ひ、責て問へと云を聞て、米村額
を地に付てありしが、頭をあげて、是は御奉行衆の御詞とも不覺候、
一語先
破其勝拙夫は鄙賤なりしを、今い士の數に入候、修理大坂に在て、軍
陣の成敗を司り、運命の存亡をこそ、且暮に計り候へ、嘗て金銀財寶

を心とせず候、是を以て修理が部下も亦敵を撃ち首を取んどのみ
 思て、他の慮をさすに違あらず候、理を以て申候に、城中戦に負くる
 時ハ首領をも保たず十万の財寶ありとも何にか用ひ候ん、如し勝
 軍からハ兩將軍の御腰の物まで皆我儕が有なり、財寶を求めずし
 て財寶にあきみち候ん、之自是不厭且つ申すべきの義あらば即座
 に申さん、可申の理なくば口を裂舌を抜かれても申すべきや、使不
能復責て問へど、何事ぞと憚かる氣色もなく申ければ、源君聞し
 召れ、かれハ無類の剛の者なり、彼が如き者を兵衛常陸にも付け置
 きたき事なりとて、則ち御赦免あり、開口使亡主重於呂鼎有米村後
 淺野因幡の守長治に仕へぬ、衣服飲食を賤くして、武具をきらびや
 かにす、治長が小女を京師に置いて育ふ事、懇情を尽せり、因州の祿を
 受たるハ之が爲とぞ、晚節似屈而不屈得此一結米村
 無遺憾文亦覺首尾盡然端助

明良洪範記氏家氏父子條

明良洪範眞田增譽撰、雜記織田豐臣徳川諸氏明君良佐之事蹟、傍
 及將士之言行、

本篇俱四節、第一節叙氏家内膳不從徳川氏、兼説其器度、第二節叙
 其世系、復及不從徳川氏、精義就死、第三節叙其三兒自殺、爲最有精
 采文字、第四節叙其季子爲僧者、膽勇拉狂漢、

氏家は常陸介入道卜全が長男なりし、秀頼公の近習に召仕のれけ
 る、兄左京ハ早世しける故父の家絶たりしに、秀吉公不便に思召し
 て弟内膳を桑名の城主として懇意を加へ給ふ故、後年本多忠勝よ
 り桑名へ使者を以て内府公の御味方せらるべしと申遣はしける
 に、氏家答へけるハ、我等事ハ古太閤の御恩を蒙りし身なれば、關東
 へ隨身ハ仕る間敷と申、其後城を渡し浪人しける也、或説ハ内膳事

始めて秀頼公の御近習とある時、祿一萬石と成り、京極修理亮朽木兵部少輔と、官祿も同じかりし時、相州小田原進發の時、京極氏家朽木三人同道にて關東へ下りけるに、江州草津の驛にて宿の者を呼んで酒を吞せて戯むれて、此三人の内何れが殿下の御意に叶ひ立身すべきやと、其方目利して盃をさすべしと云しに、亭主初めの辭退しけるに三人頗りに望みしかば、其時内膳が前に盃を出して申けるに、近き内に貴公様御主人の御氣に叶ひ、必桑名の御城主に成り給ふべしとて盃をさしける、案の如く小田原陣中にて太閤より桑名の城を内膳に給ひり、五万石を御加恩せられしとあり、扱氏家の桑名へ入部せし時、先日目利したる草津の宿の亭主、此の事を聞て桑名に來りて初つ地入の賀儀を述べけるに、内膳に左のみ祝着の氣色もせずして、並々の引出物有しゆへ、館人之言有驗奇、内膳不賞之愈奇、

日 本 華 文

日 本 華 文

近習の者にもあやしく思ひて内膳に申けるに、草津の亭主の御着途の祝し、不思議の御吉兆と申合たれを、一廉の御褒美も有べき事也と申に、内膳更に承引なく、彼れが吉兆の一言の風と申あてたる計にて深く稱するに由來なき也、若し彼れに恩賞を遣はず程ならば父兄の時より軍功ある輩幾たりともなく有りし、夫に施こしての中々にあきたるべきや名將之器識、此故に薄くもてなしたり、されども一笑のちなみの空敷のなし難し、幸ひ草津の上方宿次の往來なれば、いつも彼れを旅宿に致しけると也、内膳が父常陸介稻葉伊豫守安藤伊賀守美濃三人衆と號し、智勇の者なり、彼の輩の信長公の旗下に屬して、氏家が嫡子を左京亮と名付られて秘藏の者とせられ、其方と稻葉右京亮との其父常陸介伊豫守に劣らぬ者也、戰場に於て左右の手の如くに頼母敷思ひる、由、定めて、氏家の次男内膳

も父兄に劣らざる者なれば、神君も頼母敷思召る、にや、關ヶ原の後其所領を没収せられけれども、其子左近内記父子三人を縁者なれば京極高次と池田輝政に預け置れしかば、内膳の若狭守と播磨守に往來し年月を送りける所に、大坂冬御陣に至りて、神君に内膳儀を召し出すべき御内意有り答るに、某事元より不肖の者と云ひ、殊更十四五年弓馬の道を捨候へば、武道に於て何分にも及びがたき事に候間、御免あるべしと申して仰に隨がらず、翌年夏御陣に兩御所より御内意として、十萬石の軍勢を預け給ける、是非京都へ參陣致すべしと板倉伊賀守方より奉書到來せしかども、御請に及ばずして後密に大坂に行て籠城し、五月八日秀頼生害の時淀殿を介錯し其身も自殺しける古人云、概捐軀易從容就義者、内膳浪人の後男子兩人出生せしを、三男を南光坊天海の弟子になし、四男をば八

日 本 華 文

日 本 華 文

丸と號し未幼少なりしかども、父内膳御敵對したりし罪も依て、嫡子左近二男内記四男八丸三人とも、に京都妙光寺に於て切腹しけりと也、此時の有様を見たりし齋藤玄了と云し点出姓名、醫師の語りし、虎落の中に敷皮をまかせて、三人座に並び、左近の二十四才内記の二十才、八丸は八才ばかりに見せし、何れも無双の美男なり、八丸事は未だ幼少なれば、不覺の事も有るべきかと思けるにや、嫡子左近八丸に向ひ、御邊の我等に先立べしと申ければ、八丸が曰、某事の未だ腹切を見ざるに依て、如何様に切てよからん存ぞ申さず候間、御兩人の御切腹を見て、某も左様に切申さんといふ口吻に依りて左近の彼れが様子未練の事も有間敷と思ひ、然らば我等と内記が切腹の様子を能見て、汝も其如くにせよと云聞せ昆弟相勵、避下使、一讀之、泣左近諸肌脱ぎ、一文字に引廻し首を打たしむ、其時八丸

明良洪範記氏家父子條

日 本 華 文

の面色少しも替らず、身繕ひして肌を脱ぎたるに、如見物の老若見るに堪へずして、一同に聲を立て泣出し、皆々門外へ逃出せしと也、
八九の静かに脇差を取て、弓手の脇に突立しが、其儘首を打落され
ける也。此一箇悲壯淋 三男の南光坊の許に有りけるが、神君二條
の城へ入らせ給ひし時、天海彼の小僧を具して御前に出で、氏家内
膳こと此度大坂へ籠城仕候ニ付、其子供等御成敗なされ候段御尤
も存じ奉り、但し此小僧の拙僧が弟子に仕置けるなれば、一向に御
免下さるべしと願ひければ、神君聞し召し、氏家は古太閤の恩を
忘れずして、此度秀頼が最期の供をせし義士あり、然れば出家を
したる子迄罪すへき道理なし、心安く思ひ給へとの仰有しとぞ、後
年南光坊彼の小僧を召具し、武州東叡山に入院し給ひける、其頃寛
永寺の坊中に一人の浪人有りけるが、俄に狂氣して本坊に切入り

日 本 華 文

ければ、兒喝食等の云に及ばず、年長じたる者迄も逃込しに、彼の内
膳が三男の若小僧三字 出向ひて狂人を組伏せ、持たる刀を奪ひ取
りけるとかや。亦内膳 これ氏家代々勇氣も血氣も連続せし事と、皆
人々大に感心しける、祖父の名迄も著しける、後に山城國愛宕山康
樂寺の住持となりける、

藩翰譜伴大膳諫止池田輝政戰死條

百五十

藩翰譜源白石著之、白石名君美、字在中、初名瓊、源姓新井氏、号白石、稱勘解由、江戸人、仕德川幕府、叙從五位下、任筑後守、白石生而岐嶷、三歲寫字、六歲誦書、既長、器識宏偉、才負經綸、其學洽聞多識、通曉倭漢古今典故、夙攻究西洋事情、所述作書、概以國字記之、世稱其有用、如讀史餘論、最爲史家所推崇、而其詩其文、亦皆臻上乘、益本邦學士中通上下二千年、求才富經綸者、當先屈指白石、求識力精通論證明確者、當先屈指白石、求文字精妙才情如泉者、亦當先屈指白石、可謂古今偉人矣、初就富豪河村瑞軒借覽其藏書、後入木下順巷門、少有大志、常自誦曰、大丈夫生不得封侯、死當爲閻羅、故白石歿、祇園南海作哭詩云、生逢聖世應無恨、死作閻羅足有爲、又自題肖像詩云、蒼顏如鐵髮如銀、紫石稜々電射人、五尺小身渾是膽、明時何用畫麒麟、其

豪懷可以概見、以明曆丁酉二月十日生、以享保十年五月十九日卒、歲六十九、著書最富、併未脫藁者、至一百六十餘種、其中采覽異言、五事略、折焚柴記等近梓行、藩翰譜則奉幕府台命所撰、往時屬禁書、不許庶人容易覽、故世稀傳、騰本而已、

予嘗稱白石先生之文爲邦文中第一等、而其所指專在藩翰譜、蓋本邦歷世多能文之士、有流麗者、有婉約者、然要之大抵其聲自孱弱、輕浮、竟乏渾厚雅健之氣象、乃如平家物語、亦不免時有此弊、獨太平記較雄渾、有爲大文章之器度、然比之藩翰譜、氣魄光燄、尙且不得不讓一着、况其玉石混淆、瑕瑜相半、焉得比肩藩翰譜之通篇金玉、

秀吉また北島殿うしなひ奉らんとせし時、信輝が父子秀吉の方人してまづ手合に犬山の城を攻めとす、徳川殿は北島殿たすけ玉ひて清洲の城に至り玉ひ、天正十二年三月十七日、何等閑心妙腕、勿忙中挿入支干、御

藩翰譜伴大膳諫止池田輝政戰死條

百五十一

日本文華

方の人々まづ森武藏守長一が羽黒の陣を打破りて秀吉の御勢に
向ひ小牧の山に陣をとり術深明潔他人 同き四月四日勝入秀吉の
陣に行向ひて徳川の勢日々に馳集ると見えて小牧のかたき多勢
にあつて候今の家康の國に残る勢多からし先三河の國をおそひ
取て候はんには一定小牧のかたきも破れつべし覺候といふ孫
損轉走大梁故智○語々明晰如指掌而視之蓋白石子才略不世出是 秀吉よ
以寫古昔英俊借箸通米車隨自家本色自然露出來所以爲古今獨步
く謀てこそ答ふへけれとて入道を歸さる明れの五日の朝入道又
來て家康篠木柏井の郷人等を催し彼ほとりに要害をかまへて軍
勢ふむべしとうけ給る道のほどふさぎぬうち三河の國にむ
かひいよといひしかの秀吉甥の三好を大將とし池田森が勢とお
なしく三河の國を襲はんとす叙事極簡叙言極繁而繁簡之 三好も森
も入道が聲なればかさねて軍の檢使を乞ふ堀久太郎秀政を加へ

日本文華

らる故種閑筆料出堀秀政句法 同き六日の夜半より打たつ秀吉もか
ねて大山をたつて樂田に陣をうつさる同き九日のおした入道岩
崎の城攻おとし心地よげに首二十實檢して居たるに後陣に立た
る大將三好が一萬騎徳川殿の先陣に打やぶられ散々になつて逃
來たる疾雷不暇掩耳○策非不真奈敵手甚高 堀久太郎秀政追來るか
たきをまぢかけて眞先に切てかゝる森も池田も續てかゝる徳川
殿に出あふて堀が軍勢たちまぢに亂れ立て武藏守長一すてにう
たれ池田が勢もやぶれしか加雄風 信輝入道馬うしなつて歩だ
ちになり堀が勢と一處にあらんとす句々皆拗字々皆仄是文奇
承繼皆敏強 是單力直入 間ひはるかにへだりぬ敵の間近く追詰めたり是迄
とや思ひけん胡床に座してかたきをまぢつ此間句法殊佳 永井傳八
郎直勝落合て首をとる年つもつて四十九歳嫡子紀伊守之助生年

將論諸伴大膳隼止池田輝政戰死條

日 本 本 華 文

廿六歳叙父子年齒 安藤彦四郎直次がためにうたれり段落○彼
客並叙句法驟變不暇應接俄見之如下單極筋淨之妙輝政手の兵散々にう
者仔細叙來則字鍛句鍊莫不滲從細心雕琢上得來 輝政手の兵散々にう
 ちなされ設不直承接父兄之死先 信輝之助うたると聞一所にこそう
 ち死すべけれとて取てかへす單騎決戰 輝政の家人伴大膳其頃い
 また麻の舍人なりけるが最急忙塞一開筆記大膳身上たい一人お
始末何等大腹量何等敏手腕 たい一人お
 ツついで馬のくちにすがり引返して一鞭おつ直入輝政いかつて
 あつばれ不覺の奴かなといふまゝに雖兩夕忙塞亦 鎧の鼻にてか
不失上將口氣 鎧の鼻にてか
 うべくだけよと蹴たり數字疊字 蹴られてちつともひるまず絶承接
如宜條 支隊丸やあ 一限わかとのこそ不覺なれとて健奴退入 かた手に轡
 をしかと取つて片手の鞭をあてはす悠揚 馬のさすげに逸物を
 り鞭ひしきりにあてられぬ飛ぶがごとくに馳せゆきぬ錯法 輝政
 腹にすべかかねて重疊說下來此句忽物一物如 ついけさまに蹴しほさ

日 本 本 華 文

にからうべごとくくにくにけられて流るゝ血遍身朱に染れども日要
日亂蹴日見蹴夥多一蹴 猶放ちやらざればか及ばせ僅結了信輝之局
急於一蹴一語緊於一語 猶放ちやらざればか及ばせ時奇未畢又接輝
政又逼出大膳忽而叙言忽如叙事如看走馬燈如入珍珠船如下駕急車過五都
之肆上如下輓馬馳中百花之海玲瓏透徹照映人目覽者一蹶一愕目眩神飛不暇
駐步一奇觀 今妙文天下奇觀

藤輪諸伴大膳諫止池田輝政戰死條

常山紀談番大膳分疏池田利隆無罪條

常山紀談湯淺常山著之常山名元禎字之祥稱新兵衛号常山備前
人世仕岡山藩常山初取贊服部南郭後周旋太宰春臺井上蘭臺松
崎觀海等諸名流之間爲人方正特立忘身循國數歷要職然危言無
所避終被貶黜從是杜門謝客著書自慰平生好武著常山紀談及雨
夜燈襍記戰國間英將烈士節婦義僕之事蹟

常山子之文瑕瑜相半蓋作浩翰之書易匆卒下筆遂使瓦礫混珠玉
然其間自有天真爛熳之妙未可一概等閑視

池田之家之士大將番大膳景次の父を藤左衛門景元といふ尾張智
多郡荒尾といふ處の人なり大坂冬の軍尼ヶ崎の城にて片桐が兵
ども討れしを援へざるにより二心ありと東照宮うたがひ思召よ
し聞ゆしかば其仔細を申述んがため使を參らすへきに誰かよく

日 本 華 文

日 本 華 文

使せんと各使をわらひ其姓名を書て出すへき旨與國公の仰によ
り數百千の士半を過て大膳が姓名をしるして出しける十指所指
公自ら書記させ玉ふも同トければさらばとて西の宮の陣處にて
大膳に仰付らる鑿於藩祖而存池田氏矣今日
諱於德川氏者捨大膳其誰也二條の城に參りけれ
ば東照宮の御前に召れて仔細を糺させ玉ふに一一道理明かに申
たりしかとも猶聞し召入らるへき氣色あかりければ尼ヶ崎の地
圖をとり出し武藏守露座ばかりも二心をきよしを申せしかり其
時うたがひ思召ざるよし仰出されて退出しけり人々再三押返し
諍ひ奉りて武藏守罪なきよしを申せし有さま類少き者なりと感
しあへりしに東照宮も其后大膳が事をしきものあり誠に豪
傑とは大膳あるべしと仰あり紀事節淨而周匝
常山子得意之筆
大膳のみみ髭ありて容儀もしき人ありしかば退出しけると

き罷よくもいひたりと仰られ其座に有し人々も御玄關に出て
おくり且しる人になりたりとなり

又

大坂没落の後利隆懐携貳兩陣の中に居て主客の勝負を料る是弱
を叛て強を快せんとするものなりと讒言に遇て源君利隆を譴責
せらるべきの沙汰あり利隆番大膳を以て毫厘も不忠の志非義の
事なし皆永盛が所爲なることを陳ぜらる城永盛徳川氏之將 大阪之役監利隆軍番と
斷養の卒より經のほり騎士の將となつて政を預聞程のものなり
始終少も不厭辨舌審に子細をのべたり故点出大膳出身而 抗爭一節益發光彩源君は
じめ籬をへだてて利隆が何をか陳せんと怒らせ玉ひけるが番が
言ふ所理明かに證正して疑ひことごとく解ければ籬の外に出さ
せ玉ひて之積疑水釋 段々聞し召届けられぬ以後を慎めとの上意な
り番頭を疊に付て拜して不立本多佐渡守正信御前におつて罷立
て忝き上意かり歸て此旨申聞せよとありけれども番猶不立正信

又

の方を見て憚多き申ごに候へども以後を慎めの上意の利隆
が誤なきだん未聞食届けられざる處有かと存候是より先にかつ
て過ち御座さく候へども以後も亦只今の通に候別に可慎のこと候
はずと申辨得志髮源君重て已に利隆の誤なきことを知り更に
疑を不遺との仰なればそのとき頓首再拜して歸る再存池田氏語諒
辭之功不可下與一
而語也正信以下座にある人を大に番を嘆美せり節切

常山紀談立花道雪行狀條

本篇與次篇雖分爲二篇自是道雪紹運合傳終

本篇共三節第一節叙道雪平生及愛士第二節叙道雪不誅盜其侍

兒者後依其忠死免難第三節叙道雪紹運提兵援大友宗麟逐道雪

卒于軍中

立花道雪上

始戸次といふ立花のあとを嗣しゆへ立花と稱すはじめの名の
鑑連男子なく高橋紹運の子をやしなひて嗣とす

若かりし時雷に震れ足痿ゆ歩行心にまか給す常に手輿よのれり
累代大友家にぞくす大友家おとろへけれども道雪心をへんぞす
武勇たくましき人にて士卒を見る事子と愛するが如し先叙道た
雪平生
たかひにのぞむとき二尺七寸ありける刀と種ヶ島の鉄砲と手

日 本 華 文

輿に入れ三尺ばかりの棒に腕貫をして手にひつさげのられ長き
かたき挿たる若き士百餘人手輿の左右に引具し軍はドまれば手
輿を此の士にウ、せ棒をとりて手輿をた、きいとうとこを
あげ此輿を敵の真中にかき入れよとて拍子とりおそきときは輿
の前後をた、かれけるに敵に北けたるよりも耻として面もふら
ずかき入れれば手輿の左右の士三尺あまりのかたなを抽連て一
文字に切てウ、りけるに先陣の者どもすはや例の音頭よといひ
もあへず風率寫其語我れ先きにときそひか、りいかなる堅陣を
も切崩さずといふことなし若先陣追立ちらる、時は道雪大音上て
我を敵の中へ昇入れよ命惜くは其後にげよと眼を見出し下知せ
られしほきにもり返して勝ざることおし斯れば道雪の士は一日
に幾度やりを合せたりといふ者おほし眞所謂勇將又道雪つねに

日 本 華 文

士によわき者はなきものなりもしよわきものあらはその人の惡
きにはあらで其の大將の勵さるるの罪あり吾士はいかにやおよ
ぶ下部にいたりても度々功名なきはあらず他の家にて後れたる
士あらず吾方に來り仕へよとりかへて逸物にせん大強人吾士の
四月朔日左三兵衛は若き時初て後れしとの有しにいつの頃より
か血臭きとに逢て次第に物になれ今は五六人の剛の者と世に云
る、ぞかしとて偶武功なき士のおれハ明塞ぎの有ハ武功の事よ
弱からざるハ我見定めたり明日にも軍に出んに人にそいのかさ
れ必拔懸して討死し玉ふな夫は不忠なり身を全して道雪を見つ
き玉はれ叙言素朴親切各々をうち連れたればこそ斯く年老い
たる身の敵の真中に有てひるみたる色を見せざるぞといとねん
ころに睦しくいひて酒酌かはし推赤心置其の比はやりける武器

日 本 華 文

とりいだしと與へられければ是に勵まされて重て軍のあらん時
必ず人に後れじと勇みて聊も武者ぶりの能く見ゆれば呼出して
あれ人々見候へ此の道雪が見し所に違ふべきにあらすとて勝れ
たる剛の者の名を呼て頼み候はどに能引き廻りしてよといひ又
人々の心を合はせらるゝ事此の道雪は天の冥加に叶ひたる事よ
と勇め立若わかき士の席上にて心得違たる事のある時、客の前
かどに呼出し打笑ひ道雪が士かつゝかにこそおれされども軍に
臨みて火花を散し候鎗ハ此の人々こそ能くすれとて句々通鎗
追ッ取りたるまねして譽められしかば人々感ト涙を流し此の人
の爲に命を捨んとはげみけり落道雪の側に仕ふる女に心をかよ
わす者ありけるをしらぬ体にてぞ有ける是をしるもの有てある
夜物語の時申けるハ東國の大將に誰といしらす候寵愛の女に密

日 本 華 文

に情を通はす者の候ひしを誅せられきとあらぬ事を態といひて
道雪の答を試みたり道雪打笑ひ若きものゝ色に迷ひたるハ必し
も誅せずとも有なん人の上に居て君と仰がれんには假初の事に
人を殺さば人背くもとひよ國の大法を犯したるには異なりとぞ
語られける有此恩意矣是以一呼驚軍士莫不彼の者傳へ聞て心に慙
又道雪の仁愛に感ず其の後薩摩の軍さ鎧が嶽の城を攻むる時道
雪城を出て戦ひしに大軍押懸り危かりしに彼の者大音上げ乱れ
ける味方をはぢしめて散々に戦ひ其ひまに道雪城ちかく引取り
たるに敵猶きびしく進み来て城門をたてあへぬ斗り也ければか
の者又取つて返し武士の討死すへき所の爰にあり各是れにて討
死せば城をば敵に奪はれ返せや人々といふまゝに鎗を横たへ
折り敷きければ返合する者三人あり面てもふらず戦ひて討死し

日 本 華 文

ける間だに城門を閉ぢたりける（段）天正十二年大友宗麟猫尾の城を圍みて數十日攻むれども落す大友の兵長陣に氣疲れたりと立花道雪高橋紹運聞て宗麟に馳加はり然るべしと相謀り（道雪紹運合叙）俄に兵を出し二た夜の腰兵糧を付けよと陣觸して八月十八日打立（唯吾馬首所向是見）より士卒是の何方へ向る、にやと怪みながら下知に従ひて三笠郡内山江原へ打上る是より黒木の猫尾へ押行くべしと下知し紹運先陣たり今宵のはや夜半過たり月傾きぬ筑後川の邊にて夜の明けなん然らむ敵の中數十里押通る事いかゞあらんと紹運の從士言ければ（補從士之言益見三將之勇）道雪へかくと云送る、に道雪色をかへおはれ早く夜の明けよかし見晴らして敵出ば撫て切りして通るへしとて乗物を叩かれしかば（紹運智謀之士道雪胆勇之人其自殊其筆隨異作者細心）使者に行きたる萩尾大學よしなき使をして恥辱に逢たるぞ

日 本 華 文

とて馳歸る紹運の從卒の謀しごとく筑後川へ押着れば夜明けり渡る處のかたの瀬といへり瀬踏みにも及ばずひたぐと打ち入れ押渡る（亦是拍氣概）秋月種實の士芥川兵庫といふ者五十騎計にて星野城より番代りして歸りけるがいつ方より誰の軍を押せられ候哉と問紹運餘すなど（省筆咄嗟野見通人）下知し取巻て一人も殘らず討ち取り首を小高き處に並べ軍陣の血祭りしたりとて夫より石垣原へ押出し後陣を待揃へ耳納山を越んとする處に秋月種實筑紫廣門の兵共處々方々より兵を出し爰のつよりかしこの切所に待うけ鉄砲を打ちかくる事數を知らず中にも大木を小楯にして其陰より顔ばかり出して鉄砲を搏つ者あり殊に手たれにて手負數多に及べり道雪の乗物昇きたる人にも中りて倒れしかば乗物をはたと落しぬ（火性人發怒可知）道雪怒てあれをうてと下知して傍より頻に鉄

日 本 華 文

砲を搦ちかけ、れども面計りさしのぞきて鉄砲を打出だせばね
 らふべき透間あくして中々あたらさりしかば道雪いかに紹運
 の士に手だれいおはさぬかあれうたせ玉へと詞をかくれば紹運
 市川平兵衛といふ士に命せられけり平兵衛承り候といふて鉄砲
 を搦へて待所に又かの木陰より面をさし出しければ市川手き、
 早に搦たりしに眉間に中り轉び出てうつふしに倒れ死す敵前後
 より取扱みければ後陣の由井雪加より道雪へ使を以て唯今討死
 を遂ぐへじと申送るを聞て紹運大返しに返さすは味方の後陣危
 くて此の切所を越へがたかるへしとて取つて返し敵と拂ひて耳
 納山の嶺に押上げたりしかばはや夕日に及へり諸卒はるるくと
 押來りしかの疲を休めよ今宵は爰に陣すへしとて曠原に折敷せ
 たり俄に雨降り來れども兩將打廻りて士卒に詞をかけたはら

日 本 華 文

る、に本より兩將の恩恵になづき服したる者どもなればちつと
 も疲れを覺ゆるざりしとぞ三軍之士 若狹斯て一夜はそこに陣し明の夜
 黒木に押付られしかば豊後の兵競ひあへり宗麟も兩將の舉動鬼
 神のわざ成へしと崇敬し諸卒に及ふまでもてなしせられけりさ
 れども宗麟には人々思ひ放れたりし故田原親家も俄に心替りし
 て兵を引具して豊後に歸りければおもひくにて事もかず宗麟
 も引返へされしかば兩將も高良山に陣して其の年も暮れぬ明る
 天正十三年の夏に及ひければ陣がへすべしとて紹運は赤司に屯
 をかへ道雪は北野村天神の壇に移られしに病付て次第に重くあ
 りしかは吾死したらば屍に甲冑を着せ高良山の好巳の岳に柳川
 の方へ向て埋むへし此の事背きなば我魂魄必ず崇をなすへしと
 遺言して九月十一日七十二歳にて終られけり斯て此の由十時攝

文華本日

津守を使として立花の城にやり統虎にかくと申す尸骸を只一人
棄置んこと人の誹も免れがたし立花へ歸し入るへき旨答へらる
十時陣所に歸り此の由をいへは由井雪加されば仰せの趣は不可
なるに非れ共遺言の重ければ背きがたし雪加先つ爰にて腹を切
り御供に參るへしといひければ由井大炊某も腹を切り右脇の御
供に我れ立つへしといへば誰も争か残るへき殉死すへき者數多
に及へり殉死之為事豈習可笑然道般赤忠道般氣
概求之今人則難矣未可下以其跡略其心上其時原尻宮内少輔
熟々と聞きて各達唯た名聞を好みなんには然るへけれども統虎
公の御爲めによりかりなんや夫程に存するからば嗣君にも御腹召
させたらんふそよからめと真乎一言如快刀亂繩荒らかにいひけ
道等人品非雪加等之倫荒らかにいひけ
れは雪加聞て尤もに候然る上は我思ひ止まるへし棺は立花へ歸
し參らせ候はん事然るへし崇のあらんには雪加か一族罰を蒙る

文華本日

へしとて從善如流雪
加亦好男兒九月廿四日陣拂して道雪の棺の供して立花
へ引取りけり

全高橋紹運戦死條

全篇共五節、第一節叙紹運陣頭與薩將問答、第二節叙紹運戰死、
卒不離心、第三節着異聞、叙薩將哭紹運、第四節叙統虎勇武、道雪養
統虎、第五節叙紹運娶婦、

高橋紹運近古難多得、其將擬其品不在、黒田小早川之下、本篇撰寫
得其人欲出、雖文非無微瑕、要爲老手則天下無異辭、

島津義久、島津圖書忠長、伊集院右衛門の大夫忠棟を大將として兵
五萬を以て筑前岩屋の城主高橋紹運を攻む、叙紹運岩屋は要害の地
にあらず、寶滿が嶽に楯籠りて防ぐべしといふ者有り、突如挿紹運
爰を去つて寶滿が嶽に入ればとて勝つべきにあらず、敵に恐れ
て逃げたりと誹られんも口惜し、此の城を墓に定めたりとて、一語
足見心ちつとも動かさず、四方を囲みて嚴しく攻めたりけれとも驚
志素定

日 本 華 文

日 本 華 文

く色もなし、義久の士大將新納武藏の守忠元矢留を乞て城中に申
へき事の候と呼はりければ、紹運聞きて何事にか候と問に、新納申
けるは、紹運の武勇世に名高しといへども、大友家に組せられ亡び
衰へられん事、近きにあり、大友家の切支丹を崇め無道にして、また
家の興るべきに候はず、古き詞に「一張一弛」と申事の候、肺胎盛疾く
義久と和平せられ候へといひければ、新納雄辨冠子九州所以其遇紹
運而用者大義精忠非口舌所能也、紹運聞て斯く申すは、高橋家にて麻布外記と申す者にて候、故用
足見紹運之識度、只今承はり候旨、紹運に申す程の事にも候はず、聊か義の
當れる所を、挾義字懸申べし、人々能く聞れ候へ、凡盛衰消長の、自一
弛時の運にて古の細川、畠山、赤松、山名を始として、今川、武田、近國に
て、尼子、大内等一度の盛にして一度の衰へずといふこと候はず、的
紹運今の限りに成りてよも兜を脱ぎて降参せうと存すべきや、大

日 本 華 文

友の家も右大将頼朝卿の時より子孫國を受傳へぬれど日向の軍に敗れしより貳心あるもの多く出来て今かく衰へたり 讀三人之間答恰如

國策 讀 されども今にも秀吉公大軍にて九州に渡らせ玉ひ薩摩に攻入られんに鹿兒島の破れん事も遠からず勢ひ盡き運衰へぬるを見て志を換るハ弓箭取る身の恥辱にて人ハ爪弾せらるべし 等公

其果降乎○所欲有甚於生者矣是以利害禍福不毫膠念頭 松壽千年終に朽る事ぞかし人生ハ朝露の日影を待つが如し 朝詠松壽千年終是朽植花一日自爲榮 只永く世に残らんものハ義名にありと覺に候程に降參ハ仕らトと高聲に呼はりければ新納も又いふ事なかりけり外記とい名乗りければも紹運ならでかゝる詞たいかひせん人やおると言ひあへり 借他人之口說其爲紹運避實術虛法

かくて猶降參をす、めて莊嚴寺の僧を使にしけれども聞き入れずさらば攻よとて天正十四年七月廿七日四方より

日 本 華 文

押寄せ開の聲を作りかけいゝく聲を出して攻めたりけり城中にハ思ひ設けたる事あれば爰を限りに防ぎけれとも終に打破られけり三原紹心は

うつ太刀のかねのひいきは久かたの天津空にも聞はあぐべきと一首の歌を屏の柱に書殘して討死す 紹運部下自與道雪之士異弓氣參皆蕪子主將之風者

削平内は強弓の手き、なり矢倉におがりさし詰引つめ箭種を惜まず射伏せけるが左の手に痛手を負ひ敵の中かけ入て討れたり高橋越前守伊部九藏も聞ゆる弓の手だれにて物具のさわやかなる敵を目にかけてあまた射倒し矢種盡きけれハ太刀のきつきを揃へて討て出散々に戦ひ一足も引かず討死しけり尾山中務が子太郎次郎十六才なるが父と一所に死んで出けるを母袖を扣へけるに振切て敵の中へかけ入討死しけり其片袖母の手に殘

けるときり片神一寄手も討れし屍に四方の谷を埋みぬ既に城兵
残り少くなりしかは何しに猶豫すべきとて討て出おめき叫んで
戦ひけるが最期の軍よも人に笑はれどいざとて或は腹を切り或
は敵と引組で刺違へ枕を並べて討死す紹運は江淵右衛門の大夫
三浦式部黒岩隼人に女童ども皆刺殺して敵の手にな懸そと下知
し薙刀打振薙て廻られしが今いそよとて和歌を門の扉にと
いめられけり

かばねをば岩屋の苔に埋みてぞ雲の空に名をとどむべき

一説

ながれての末れ世遠くらづもれぬ名をやいはやの苔の下水
かくて行年三十九才にて自害して失せられけり士卒をおわれみ
深く義厚かりしかむ救もあき城を守りて千八百人の士卒一人も

逃げ散る者のなかりしは例し少き事あり保孤城于重圍之中持名節
兵而敵有席卷長驅之勢終至城墮身死而士卒不背求内外史上足與此人比
肩者其唯唐張巡乎本節寫出其大義誠忠之狀神彩奕々一讀足掬淚離謂常
山子之 紹運始は鎮種と申けり一段一説に寄手の大將を島津家久が
りともいへり紹運の物具の引合に一封の書あり島津中務殿と書
たれは家久是を讀むに今度降参を勧めらるゝの諫に従はず是れ
義眼字の故也別に一封の書を大友に送り居け玉り候へとなり中
務類ひ稀なる勇將を殺しけるよ此の人を友とせばいかばかり嬉
しからんに惜き事よ弓箭取身は恨めしきものはあしとて英雄
愛好漢僧を供養し葬禮を執り行ひ壇を築きて家久香を焼き再拜
しければ義眼字を感ずる國風にて薩摩武者皆焼香して涙を流し紹
運を稱美しけるといへり中偕立花へ使ひを以て降参せられんや
と言ひ送くる統虎實父にて候紹運は關白の爲に自害を遂候ひき

我れ又紹運の爲に自害を遂ぐべしとて軍兵を寄せられよ此の城の切岸にて箭一つ仕らんと駭得斬敵大有識力與下乃答へられけりかゝる處に八代に陣せられし義久より兩將に下知し秀吉師を出して打向はる、由言ひふらせり疾く兵を返すべしとありければ八月廿四日兩將大宰府を引拂ひぬ統虎陣を押出し高取の城を攻落し城主星野中務の大輔兄弟を始め悉く討ち取りそれより岩屋に向る、所に立花の内に小野理右衛門といへる者忍び入りて火を懸たりしかばあはてさゞぎ一支もなく逃落たり秀吉感狀を賜はり大に稱せらる中此の統虎は後に左近將監宗茂とて驍勇無双の大將あり宗茂豐公所謂關西第一勇過にし天正十年十月六日秋月と道雪紹運宇龍野にて軍有し時紹運自薙刀をとり端刀一刃元也烈しく戦はれしに統虎十六歳にて初陣ありし其の器量を見て道雪養子に

日本華文

日本華文

して家を嗣すべき事を紹運に乞て吾子にせられしとぞ紹運若き時彌七郎といひし比兄の鑑理齋藤鎮實の妹を彌七郎に妻せられよと約束せられけり自道雪養子統虎速及其砌豊前中國と軍有て殊に騒しくて迎へ取ずして打過ぎぬ其の後彌七郎鎮實に對面の折から兄が申しかはせし如く迎へべきに軍の最中にて斯くの遅なはり候頓て迎へ申さんと語られしに鎮實げにく申かひせし可忘も候はねど其の後妹は痘瘡を煩ひて以ての外に見ぐるしく成りぬ中々かれが有様にて見届らるへきにあらず今にての參らせん事叶ひがたしといひし時彌七郎色をかへ夫の存トも寄ざる仰せを承りぬるなり齋藤家の先祖大友家にて武勇たくまじき弓取にておはすれの兄にて候もの、迎へ申さんと約束しつる事に候夫に辭退も候まじ我の少も色を好む心に候はずとて頓て婚禮

あり與吉川元春婚熊谷氏同一佳話其の腹に二人の男子出来にけり此の迎へとりし頃紹運二十才に及びたりしとかや紹運娶醜婦道雪不問盗美入者上自然映帶

全志賀親次狙島津義久條

本篇刻意描爽快男兒悵悵之聲真以簡勁出之精神躍然所謂寸有所長者

島津義久大友を攻め處々に亂れ入る志賀太郎親次獨義久に降らず亦可謂豪傑之士義久松の尾の城に在て秀吉大軍にて九州に渡らると聞て薩州に引退く親次大に悦ひ嶮岨の地に兵を伏て打破るべしとて鉄炮の手利廿人擇み出し山海が嶺の林に待せけり快男兒足與道雪紹運並然る所に首藤五郎太夫堀八郎といふ者此の度の撰に残りけるを口惜き事におもひ密に道に隠て薩摩武者二騎打落してけり偕の伏兵有るぞといふ程こそおれ大軍林に入草を分てさかしければ廿人の者ども力なく藥を惜ます散々に打かけ追ひくる者ども打殺して引き退ぞく親次大息ついで義久をば山海が嶺の越さ

すまじき物を天の祐に逢ひたる義久語倒置文なりと言れけり凡人
有天助是之謂英雄雖然多是燒倅耳

德川氏實記附錄鈴木久三郎網禁惶條

德川氏實記附錄成島東岳司直撰之東岳江戸人世仕德川幕府實
為成島錦江之裔錦江則鳴鳳卿元文中撰江戸飛鳥邸碑文者也東
岳為奥儒員奉幕命撰德川家代々實記及同附錄東岳之孫為柳北
僊史以文著稱一時

本篇共二節第一節叙鈴木久三郎諫德川家康第二節叙太田某拒
德川秀忠之賞元來兩頭話則假家康談話湊合兩話來作者不可無
此靈活

全篇行文平坦如無他奇者仔細看來渾是精勁穩當一字一句不可
易作邦國之史者當如斯

初節久三言語力長叙大將言語力縮寫蓋久三容言其君者不得不
丁寧懇到大將是大腹量君主喋々多言却損躰面是作者存權衡處

不可等閑看過

いまだ岡崎の城におはしましけるに御賓客あらん時の御もてあ
 しの爲にとて長三尺ばかりの鯉を三頭御池にかひおかせられし
 を鈴木久三郎といへる者ひそかに鯉一頭とりて御くりやの者に
 あつらへ調理させまかのみならす其頃織田殿より進らせられた
 る南都諸白の樽を開て同僚うちより酒宴せしを同僚等酒も鯉も
 上より賜りて饗應することよと心得て伏後各よろみびあひて沈酔
 しまかてたり其後御池の鯉一頭うせたりと御覽し付させ玉ひて
 預りの坊主をめして聞せらるれば久三郎さる事して我々も其饗
 におづかりたりと承前申たるにより聞しめし驚ろかせ玉ひ御くり
 やの者をたゞされしにまがふべくもなかりしかば大に御氣まき
 損し久三郎を御成敗あるべしとて長刀の鞘をはづし廣縁につと

日本文華

日本文華

たち玉ひ久三郎を召けるに一篇精彩在此段燦久三郎少しも臆せず
 露地口より出て三十間ばかりも進み出しを御覽せられ久三不届
 もの成敗するぞと御言葉かけさせらるれば如親聲然久三かのが
 脇ざしをどつて五六間あどへ投す用密大の眼に角を立て恐入
 たる申事には候へども魚鳥の爲に人命をかへらるゝといふ事は
 あるべきか左様の御心にては天下に御旗を立て玉はん事は思ひ
 よらずさらばとて思召まゝにあそばされ候へど叙言區蹇中含恭謹
 諸肌ぬぎて御側近く進みよる其体思ひ切て見へけるに御長刀を
 かりりと投すて玉ひ甚妙汝が一命もるすぞとて奥へ入らせ玉ひ
 し句法錯落叙やがて久三郎を常のおましめてめして汝が申所
 ことばりと聞し召れたりよくこそ申したれ汝が忠節の志満足せ
 りそれによりさきに鷹場にて鳥をどり城溝にて魚を網せしもの

日 本 華 文

をとらへおき近日には刑に行ふべしとめしよめ置しが汝が今の
 詞に感トこれもあるすぞと仰ければ 先使讀者疑久三諫爭無因由而後從大將語中叙出戈鳥捕魚是
作者狡 久三郎も思ひの外なる事とかへりて恐れいり卑賤の身を
 もて恐れをもかへりみず聞かあげし不禮をもとがめ玉はず却て
 愚言を用ひさせ玉ふ事たぐひなく有難しこれ全くもくく天下
 をも御掌握あるべき寛仁大度の御器量あらはれ玉ひぬとて感涙
 袖を沾し 頌言與規語反視感涙與睜眼映帶作者謹 玄はしは其座を退く
 事を得ざりしとあり 段はるか年經て後台徳院殿太田何げしに五
 百石の恩祿下されんとの仰有しをいかなる故にや御折紙を擲返
 しまかてしかば大いにいからせ玉ひ死刑にも處せられんとて 台
隆厚寫之自與 井上河内守正就もて駿河へ伺ひせ玉ひしに聞しめ
 して是は天下長久の基なり 勢頭一語使人喫驚唯其解得滑筆摸樣使人轉驚為笑 凡賞罰の當

日 本 華 文

らさるゝ衆怨の歸する處きり太田が不禮と知りつゝかゝる舉動
 せし己か身を抛て將軍を諫るの下心ならん 緩頰說出妙齒妙舌 主の怒を
 侵して君を救はんとするの忠臣なりはめて遣すべし 太田俗骨與久三不同品
得此公一語 將軍もかゝる事まで我に問示さるゝは機務に心を尽
博些價格來 さるゝといふべし 既稱太田又贊將軍舌鋒史筆俱周到 君臣ともはその職に怠らさ
 れは長久の基とこそ覺ゆれ 君臣並叙淡合前旨 これにつきそのかみとれ岡
 崎に在しとき鈴木久三郎が無禮をいかり誅せんとせしに彼がい
 さめによりてわが過を改めし事の有しとてこの事語りいで玉ひ
解得完又 今太田にも千石まし玉ひてそが志にむくわれよと仰て
是英君撥入心秘 正就にも御刀賜ひ使節の勞を慰めらる江戸にかへ
詠暗道庭訓者 承活その旨申上しかば台徳院殿も御庭訓のかしこきを感じ
 玉ひ 蓋台公亦 太田に祿千石たまひ正就には汝によりて承順の道